今日のソ連邦

1978
8
4.15.

創刊20周年記念号

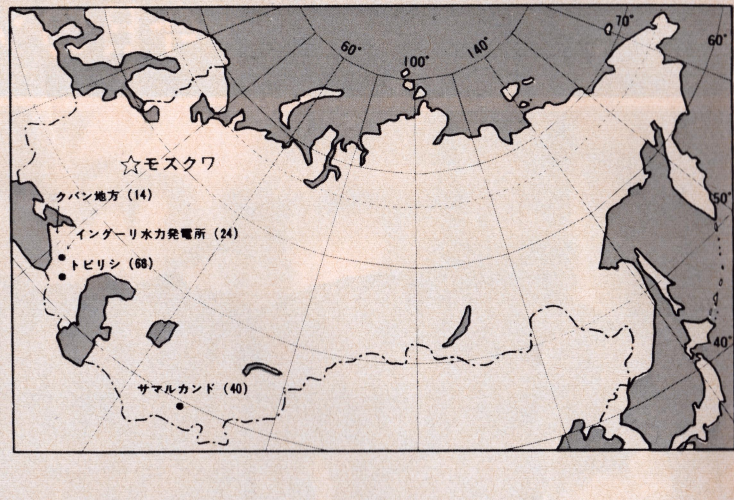


今日のソ連邦

第8号　1978年4月15日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

★数字は関連記事のページ



本誌を入手するには

下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……………………………1200円

1年分送料……………………………2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

創刊20周年に寄せて

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話(03)447—3536(代表)
振替口座東京9—122358（加入者名—ソ連大使館広報部）





「われわれは日本国民とよい隣人として暮らすことを望み、なにごともわれわれの関係に暗影を投げかけることがないように、信頼と好意と協力の空気がこの関係において支配的になるように願っています」——1977年11月7日のテレビ朝日のインタビューでのL・I・ブレジネフの発言から。



ソ連教育相・ソ連国会議員団ソ日部長

ミハイル・プロコフィエフ

『今日のソ連邦』誌の20周年に際して、貴誌の読者と編集部にお祝いを申し上げます。

貴誌は日本の人々にたいして、ソ日両国の国会議員の接触をも含め、ソ日関係のあらゆる出来事について知らせておられます。

ソ連と日本の国会議員間の友好関係は順調に発展しています。ソ連最高会議と日本国会ならびにソ連国会議員団ソ日部と日本の日ソ友好議員連盟による代表団の不断の交流はりっぱな伝統になっています。

ソ連と日本の国会議員間の接触の強化が貴誌に反映されていることを喜ばしく思います。

ソ日両国の国民間、国会間の友好関係の強化のために、あらたな成功をおさめられるよう貴誌編集部に望みます。



ソ連海運相・ソ日協会理事長

チモフェイ・グジェンコ

本年4月に記念される『今日のソ連邦』誌創刊20周年は、ソ日協会創立20周年と時を同じくしています。この20年間、貴誌は、ソ連と日本の社会団体間の友好関係がどのように発展し強化されているかについて定期的に紹介してきました。

ソ日協会は、ソ連の諸都市と連邦構成諸共和国に15の支部を持ち、50万人以上の会員を擁しています。協会の活動のすべては、ソ日間の友好関係のいっそうの発展と強化に向けられています。

貴誌は、わが協会がおこなう行事についてしばしば書いておられます。また、貴誌には、日本のさまざまな社会団体の代表団と〝友好の船〟のソ連訪問にかんする記事や日本のお客さんたちの印象と思い出がいちどならず掲載されました。

この機会に、貴誌の読者と編集部にたいして、創刊20周年のお祝いを心から申し上げます。ソ日両国民間の友好をめざして奮闘することが、こんごも貴誌の総路線を決定するものと確信しています。



ソ連第一外国貿易次官・ソ日経済協力委員会議長

イワン・セミチャストノフ

『今日のソ連邦』が創刊されてから20年。この間、貴誌では、ソ連と、極東のわれわれの隣人日本との貿易・経済協力にかんする記事が重要な位置を占めてきました。

ソ日貿易の広範な発展は周知のとおり、1956年10月の共同宣言調印に続くソ日関係の正常化に結びついています。そして『今日のソ連邦』誌は、1958年に創刊されるやただちに、互恵的なソ日貿易・経済関係を紹介する活動に積極的に参加しました。

シベリアとソ連極東の天然資源開発におけるソ日協力の経過、各種の貿易協定の実施、ソ日両国の経済関係での新しい傾向――これらの事柄について貴誌はくわしく書いています。貴誌に掲載された資料から、読者はソ日貿易・経済関係がどれほど高い水準に達しているかをはっきりと理解することができます。

貴誌の読者と編集部に創刊20周年のお祝いを申し上げるとともに、貴誌がこんごもソ日経済協力について読者に広く知らせ、協力の大きな可能性と、それが両国の発展に与える好影響について大いに書いて下さることを期待します。



ソ連漁業相

アレクサンドル・イシコフ

『今日のソ連邦』誌は、ソ連でどんな出来事が起こっているか、ソ連の人々はどんな暮らしをしているか、かれらは日本についてどんなことを知っており、またソ日両国間の関係の発展から何を期待しているかなどということについて日本の読者に知らせるという重要な使命を遂行しています。

私はこれまで、かなりしばしば日本を訪問しています。そして日本の国民がわが国の生活に関心を寄せていることを知っています。外国にかんする知識、外国の人々、風俗、習慣にかんする知識は相互理解を生みます。そしてこの面で、『今日のソ連邦』誌は重要な役割をはたしています。

ソ連と日本は、ともに漁業大国であります。両国の漁業上の利益は、世界の海洋の多くの水域で接触しています。漁業の領域における協力は、ソ日関係の重要な構成部分であり、魚族資源の合理的で科学的根拠のある利用に関連した問題全体の重要な構成部分であります。このために私は、ソ連の漁業政策、ソ連の漁業者の生活と労働について正しい情報を読者に提供している『今日のソ連邦』誌の重要な意義をとくに強調するとともに、貴誌のご成功を望みたいと思います。



ノーボスチ通信社理事長

レフ・トルクノフ

〝平和のため、諸国民間の友好のための情報〟をモットーとする、ソ連社会団体の報道機関であるノーボスチ通信社を代表して、『今日のソ連邦』誌の読者ならびにソ連と日本の編集部員の皆さんに、同誌創刊20周年のお祝いを申し上げます。

ソ連の人々は、日本国民が平和を願っていることを知っています。ソ連の人々も、それに劣らず平和を強く願っています。したがって両国のマスコミ機関は、両国民間の平和と善隣の達成を促進するために全力をつくさねばなりません。貴誌に掲載されているノーボスチ通信社の記事は、ほかならぬこの目的に奉仕するものであります。

貴誌を多かれ少なかれ定期的に読んでおられる読者の皆さんが、ソ連の人々がどんな生活をしているか、何に関心をもっているか、何を願っているか、どんな問題を解決しているか、ソ日関係を強化するためにどんなことをしているかなどについて知って下さるよう期待したいと思います。

もし貴誌が、わが国の生活にたいする日本の読者の関心を満足させ、またわが国とより近しい知り合いになりたいとの願望を呼び起こすことができれば、貴誌はその直接の使命を遂行し、両国民の相互理解と友好の強化を促進していると考えることができます。そしてこのことは、かならずや平和の強化をもたらすのであります。



全ソ労働組合中央評議会議長
ソ連最高会議幹部会員

アレクセイ・シバエフ

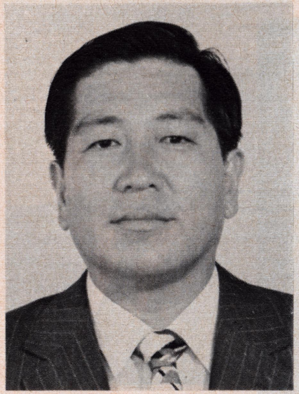
『今日のソ連邦』誌の読者の皆さんと編集部に、創刊20周年のお祝いを申し上げます。

ソ連の労働組合の大きな役割、ソ連の労働組合が持っている幅広い権利、ソ連における労働組合運動の大衆的発展、労働組合組織の多種多様な活動――こうしたことについて書かれた記事が貴誌に絶えず掲載されていることに満足の意を表明したいと思います。貴誌は読者に、国際労働組合運動の行動の統一、すべての国の勤労者の友好、軍縮と緊張緩和をめざすわが国の労働組合の闘いについて定期的に知らせています。

貴誌は、ソ日両国の労働組合の強まった関係に光をあてるという重要な課題を遂行しています。そして両国労働組合のこのような関係は両国民間の関係の強化に大いに寄与するものであります。

全ソ労働組合中央評議会と、日本の総評および中立労連の代表間の定期的接触、ソ日労働組合集会の開催、代表団の交流その他の友好的諸措置――これらはいまやりっぱな伝統となり、このような伝統によって両国民は相互理解と友好を強め、善隣関係を発展させることができるようになっています。これは、勤労者の権利をめざす闘争での勤労者の深い国際連帯の現れである、と私たちは見ています。

この機会に、貴誌を通じて、日本の労働組合員とすべての勤労者の幸福と成功を心からお祈りします。



総評事務局長

富塚　三夫

『今日のソ連邦』発刊20周年に際し、心からお祝いを申し上げます。

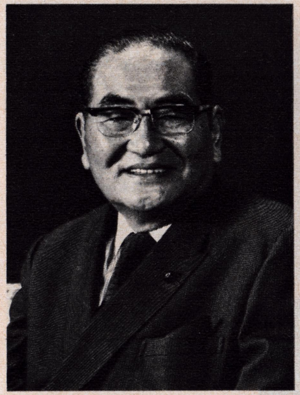
昨年の10月革命60周年は人類の世界史における偉大な業績であり、東ヨーロッパをはじめとして現在社会主義建設にいそしんでいる多くの国々に限りない励ましを与える出来事でありました。

今年、『今日のソ連邦』が発刊20周年を迎えたという事は、特に日本とソ連の労働者の友好関係において新たな一頁を加えるものであります。

資本主義、社会主義の体制の違いを問わず、世界人口のほとんどは労働者であり、労働する者という同じ立場から友好、連帯が可能かつ必要である事は言うまでもありません。国際労働運動の統一は、世界の労働者にとり最も望まれる事ですが、このためには各国の労働者の、仲間意識による相互理解の姿勢と交流の場が必要であると思います。

総評はこの様な立場から全ソ労組中央評議会を通じてソ連の労働者と長年にわたる交流、集会を開催し、日ソ労働者の友好、連帯の伝統ある関係を進めて来ました。貴誌『今日のソ連邦』も長い間、日本の労働者のソ連およびソ連のはたらく人々に対する理解を深め、そこから日本の労働者の状況についても考え直す有効な手だてを与えて頂いた事に感謝致します。

今後も貴誌の御発展をお祈り致します。



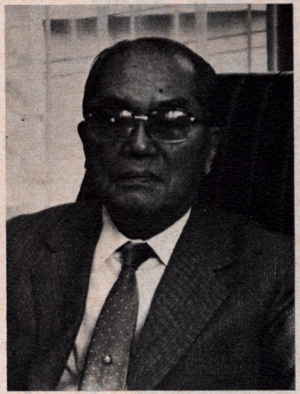
日ソ友好議員連盟会長

石田　博英

10年一昔。日ソ国交回復の共同声明から間もない1958年に発刊された『今日のソ連邦』が、二昔を迎えました。誠に、年月の歩みは早いものだと痛感させられます。その間、日ソ間の種々の懸案事項の解決をみ、日ソ善隣友好の歩みは確実なものとなってきていますが、その折々のソ連邦の見解、また、その時々のソ連邦の国民生活、社会文化活動を、我が国民に伝え、両国民の相互理解増進のため『今日のソ連邦』の果した役割は、誠に重大なものでありました。

その『今日のソ連邦』誌が発刊20周年を迎えました。関係各位の御努力に対し、深く敬意を払うとともに、心からおめでとうと申し上げます。日本では、20歳をもって成年として特別にお祝いし、その将来を幸あれと祝福する習慣があります。私も、日ソ友好親善を願う者の一人として、心より祝福し、その将来のますますの発展と内容の充実を期待するものであります。

今日、日ソ間には未解決の問題が残されています。これは非常に重要な問題でありますが、私は必ず両国民の英知によって解決される日が近い事を確信するものです。その為には両国民の相互理解がさらに深められなければなりません。私は、この『今日のソ連邦』誌がそのために払われてきた努力を高く評価するとともに、今後さらに有効な働きをされる事を深く祈るものであります。



日ソ交流協会会長

時子山　常三郎

本年４月をもって『今日のソ連邦』誌発刊20周年を迎えられた事はまことに御同慶にたえません。

この時に当り、私は日ソ両国の善隣友好関係を推進する事を主旨として組織された日ソ交流協会の会長として、所感を申し述べる機会を与えられた事は誠に光栄であります。

思えば日本の首相鳩山一郎氏が「日ソ共同宣言」に調印し、両国の国交が回復したのは1956年10月でありました。貴誌の発刊は、実に国交回復後間もない時に行われたのであります。

当時を回顧すれば、日本は戦後そうそうの時期で国事多端、戦後処理と戦災復興に余日はなかったのであります。おそらくソ連におかれても同様に困難な時局を経験されたことと存じます。その後20年日本国民は、不眠不休一致協力してよく国力を回復し、狭小な国土と廃墟、資源貧困の中からＧＮＰ世界第三の経済大国と称されるようになり、世界経済の中で重要な役割を担うこととなりました。

ソ連におかれては、政治的に経済的に素晴らしい実績を挙げかつ無限の資源を擁して総合国力においてアメリカとならんで世界の二大国として世界社会をリードされるに至っています。

この20年間に日ソ両国のとげた飛躍的発展と国力を思うとき、すべての部門において両国相提携することによって平和と諸民族の福祉増進に大きく貢献しうるでしょう。この提携は両国の善隣関係の増進によって得られることはむろんで、それには両国民の相互理解と相互国情をよく認識し合う事が肝要かと存じます。

貴誌は、過去20年間たゆまずソ連国情を日本社会、一般市民に紹介することに努められて正しい知識を与え、貴国理解を深めることに成功されました。この功績には偉大なるものがあります。

今後ますます貴誌の発展とご活躍を期待し、私の祝辞と致します。



日ソ親善協会会長

赤城　宗徳

『今日のソ連邦』発刊20周年おめでとうございます。

第２次大戦後の日本とソ連との交流は、日ソ共同宣言による国交回復により始まりました。そして初めて鉄のカーテンとかいわれたものが取り除かれ、ソ連事情を知る機会に恵まれました。

そして人事、文化の交流などにより、日ソ親善友好の気運が高まりつつあります。その意味で『今日のソ連邦』が日ソ交流に果した役割はたいへん大きなものがあります。

昨年ロシア革命60周年を迎え、わたしもその祝賀行事に招待され、労働者農民のブルジョワ階級への革命闘争によって生まれたソ連が、世界で初めての社会主義国家へと躍進し、いまや、失業のない社会主義国家としての役割が止揚され「能力に応じて働き、必要に応じて分配する」という共産主義の理想目標に進みつつある姿を羨ましく思う様になっています。憲法も全人民の為の国家というように改正され、その新憲法を採択する最高会議を私も傍聴する機会を得て、そのバイタリティーのたくましさに直接接しました。また、街頭では、働きつつ、その生活を楽しんでいる人々に会うことができました。しかし一部の人々は30年前頃の終戦時のソ連人の生活状況を今もって宣伝し、真実を誤り伝えています。特にソ連通ぶっている人々にそれが多いことは遺憾であります。

『今日のソ連邦』がより多くの情報を提供することにより、日ソ親善の気運がさらに高まることを期待いたします。



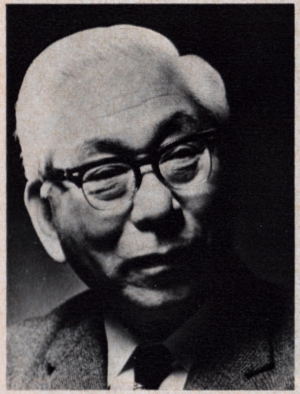
日ソ協会会長

石黒　武重

このたび在日ソ連大使館広報部から発行されている『今日のソ連邦』が、1958年４月創刊以来満20周年を迎えられたことは、まことにおめでたいことと思います。

日ソ協会は、これまでも、ソ連およびソ連国民の生活についての日本国民の関心にこたえて、その実情を正しく伝える活動を行ってきましたが、この内容豊かで美しい『今日のソ連邦』は常に有効に利用させて頂いております。そして貴重な文献として、日ソ協会付属図書館に創刊以来全部保存して、多くの会員その他の閲覧に供しております。

20年間にわたる編集・経営の御努力に敬意を表するとともに、今後の御発展をお祈りいたします。



日本対外文化協会会長

松前　重義

『今日のソ連邦』誌が、発刊以来20周年を迎えるという話をきき、月日のたつのは早いものであるという気がします。

今日のソ連邦を日本人に正しく紹介しようという本誌の目的は、最近、大型グラフ版から週刊誌タイプに変ったことによって一層達成されることになるでしょう。

私は、ソ連邦について知りたいと思ったとき、いつもオフィスに送られてくる本誌を手にとります。そして注意深く記事に眼をとおすことにしています。科学者である私にとって、本誌の科学技術に関する記事はまことに興味あるものであり、とりわけソ連における原子力やエネルギー開発、自然保護、海洋資源の開発について教えられるところが多くありました。

このようなソ連邦を知るための雑誌が今後さらに日本の人々に親しまれ、よりよく読まれることを期待いたします。

ただこの際、少し批判めいたことをつけ加えるならば、文章や編集が硬く、日本人にはなじめないところが多いということです。もう少し読ませるための努力をお願いしておきたいと思います。ともあれ、本誌が20年から30年にむけて一層発展するようがんばって下さい。



ごあいさつ

『今日のソ連邦』誌創刊20周年にあたり、日本の幅広い社会層にわが国の生活について紹介することで、本誌が重要な役割をはたし、善隣と互恵協力にもとづく日ソ関係の発展と強化の事業に寄与していることを指摘できるのは、私のきわめてうれしく思うところです。

ソ連と日本はたがいに隣国であります。したがって日本のさまざまな社会層の人々が、ソ連とその一般国民の生活に関心を持っておられることはまったく当然のことであります。

本誌は創刊以来、ソ連の最も重要な出来事について、ソ連国民の一貫したたたかいについて書いてきました。このたたかいは軍縮、恒久平和、国際安全保障をめざすたたかい、すべての国の国民が平和に生活し、あらたな破滅的戦争の脅威におびえることなく平穏に安心して働き、自分の幸せをつくり出すことができ、子供たちを火薬の匂いを知らず、晴れた空をいつも楽しめるように育てることができる条件を地球上に創出し、強化するためのたたかいです。

本誌は日本の読者に、わが国の国民生活について、ソ連の個々の人々について紹介し、わが国の国民の労働、休息、伝統について話すとともに、具体的実例にもとづいて、問題と困難を隠すことなく、わが国の条件のもとで、あれこれの問題が経済と文化の発展、社会的諸条件の改善によりどのように解決され、これが各人にそれぞれ何をもたらしているかを、日本の読者にひろく紹介するように努めてきました。

『今日のソ連邦』誌はその読者に、ソ連について真実をつたえ、ソ連人の関心事や期待について語りながら、ソ日両国民間の相互理解の増進という、重要で高潔な任務を遂行しています。

本誌の誌上にはこの20年間、一九五六年10月の共同宣言調印がその正常化の端緒となった両国間の相互関係に起こった出来事が、あたかも鏡に映されるかのように反映されてきました。この意味で、本誌は、あらゆる分野におけるわが両国間の善隣関係の確立と発展を記録する独特の年代記であると言うことができます。

日本の広範な世論の代表者たちが本誌について述べている温かい言葉を耳にすることもうれしいかぎりであります。そしてこのことは本誌の権威と好評を物語っているものと私たちには思えます。

この機会に、本誌の読者の皆さんと編集部にお祝いを申し上げるとともに、わが国の生活の正しい理解、ソ日両国民間の友好と真の善意および善隣のふんい気の創出を促進する興味ある記事が、こんごも本誌に掲載されることを期待します。

一九七八年4月15日　東京にて

駐日ソ連大使
D・ポリャンスキー

編集部から



『今日のソ連邦』創刊号の表紙

本誌はここに創刊20周年を迎えました。

この間、私たちは誌上で、ソ連でどんな重要事件が起きているか、ソ連の内外政策はどのようなものか、ソ連の人々はどんな暮らしをし、ソ日関係はどのように発展しているかについて読者にお知らせするよう努めてきました。

この20年間をつうじて、本誌で何が書かれてきたのか、読者の皆さんといっしょに振り返ってみましょう。

まず第一に私たちは、ソ連が平和をめざして奮闘していることについて、ソ連が社会体制を異にする諸国の平和共存を支持していることについて書いてきました。私たちは、国際舞台でのソ連の平和的イニシアチブについて、軍縮、大量絶滅兵器の禁止、すべての大陸での安全保障と協力、すべての紛争の平和的話し合いによる解決をめざすたたかいについてお知らせしてきました。

私たちは誌上で、ソ連では工業、農業、科学、技術、文化、芸術、スポーツがどのように発展し、これらすべてのことが具体的なそれぞれの人間に何を与えているかについて書いてきました。私たちは、社会主義国家の条件のもとでは、シベリアにおける石油採掘量の増大あるいは鉄道の敷設にせよ、共同住宅と畜産場の建設にせよ、あるいは新作バレエの上演にせよ、国民経済のいかなる部門の達成も、国全体の発展という共同の事業にたいする寄与であるだけでなく、この国に住み、働いている人々の物質的、文化的水準の向上に直接役立っていることを示すよう努めてきました。

私たちは、私たちが抱えている問題や困難を隠そうとはせず、正しく理解していただこうと努めてきました。これは、これらの問題が解決可能なものであり、困難は一時的なものであることをソ連人が少しも疑っていないからであります。私たちの確信は、ソビエト経済の不断の発展と国民生活の質の向上を示す具体的指標にもとづいています。

私たちは誌上で、個々の人々、その人たちの日常生活様式、労働、休息、伝統について話してきました。読者の皆さんがこの人たちを実際に理解し、この人たちが、他の幾百万の人々と同じように、自分なりの喜びと悲しみ、長所と欠点を持っていること、またこの人たちが、よりよく生き、興味深く、しかも賃金の高い仕事を持つことを望み、子供の教育、休息、レジャーのためにもっと多くの時間を欲しいと望み、健康であることを望み、将来にたいして確信を持ちたいと思っていることを理解していただこうと努めてきました。

どんなに要求の厳しい読者でも、本誌のなかに反人道的で低級な、人間の名誉と品位に反するようなものは、なにひとつ見出すことはないものと私たちは確信しています。本誌の記事はいちどとして、不和や衝突をあおったことはなく、民族的あるいは人種的優越を主張したこともありません。私たちは、わが国に存在しないものについて書いたことはなく、読者めあてにありもしない状況やあつれきをことさらにねつ造したこともなく、ソ連人がなにか非凡なもの、特殊なものであると主張したこともありません。

同時に私たちは、ソ連に存在する社会主義体制はその本質からして公正であり人道的であるため、人間にその個性を自由に発展させる無限の可能性を与えていること、ソ連憲法のなかに規定されているソビエト民主主義の諸原則が、最も広範な個人の権利と自由を与えていることをつねに強調してきました。

私たちは、生活と活動のあらゆる領域におけるソ日両国民間の友好・善隣関係の発展にかんする記事を数多く、進んで掲載しています。私たちは、ソ連の人々が日本の現実にたいして大きな関心を寄せていることについて書いています。そして逆に日本の人々がソ連の現実にたいして大きな関心を寄せることを、私たちが歓迎していることも隠してはいません。

私たちは、われわれ両国民間の相互理解と協力の強化が両国のみならず、アジアと全世界の平和の事業にとってもまた有益であるということから出発しています。

私たちは、本誌が、わが国の生活に関心をお持ちの多数の読者に読まれるようになることを望んでいます。私たちは、読者の皆さんが、関心を持っておられることについて積極的に編集部にお知らせ下さることを、本誌の内容と形式を改善する方法について編集部に批判的に、同時に好意的にお教え下さることを期待しています。

……20年という歳月は雑誌にとって短い期間ではありません。このような記念日は、編集部にこれまでの総括をさせるだけではありません。将来の方針を立てる契機にもなっています。こんにちすでに、その第一着手として、私たちは、本誌のサイズを読者にもっと便利な大きさに変えたことを挙げることができます。

その他の点にかんしましても、編集部は『今日のソ連邦』が両国民間の相互理解と友好の強化に奉仕するという自らの使命をさらにいっそう効果的に遂行するようあらゆる努力をする所存です。

ヘルシンキの事業の継続

ベオグラード会議の結果に寄せて

3月9日、全欧安保協力会議参加国代表者のベオグラード会議が終了した。最終文書で予定されていたように、この会議の使命はヘルシンキで開始された事業を継続し、まさにそのことによって欧州の平和と、そこに住む諸国民の安全の強化を助けることだった。

ソ連は、ソ連共産党第25回大会の対外政策面における原則的路線を一貫して実現しながら、ベオグラード会議の主要な内容となるべきものは、ソ連共産党中央委員会書記長、ソ連最高会議幹部会議長L・I・ブレジネフ同志が指摘したように、欧州における平和と安全保障、欧州諸国民間の協力の発展にかんする配慮でなければならない、そしてこれと関連して今述べた問題にかんする若干の具体的勧告および提案について合意すべきであるということを出発点としていた。

全体として、ベオグラード会議では肯定的な結果が達成された。会議は欧州諸国民が今後もヘルシンキで始まった道を進もうとする決意を示した。全会一致で総括文書が採択された。

ソ連は、ベオグラード会議で安全保障・協力問題にかんする提案をするにあたり、現在、欧州にとって最も主要な、緊要な問題は緊張緩和過程の強化、政治的緊張緩和の軍事的緊張緩和による補足、実践的な軍縮措置の採択であるということを考慮した。

ベオグラードでは、L・I・ブレジネフ同志によって定式化された、欧州の軍事的緊張緩和を強化するための行動綱領が広範な関心を呼び起こした。ソ連と社会主義兄弟諸国はベオグラード会議で、欧州における戦争防止をめざした具体的、効果的措置を含むこの現実主義的プログラムを積極的に推進した。プログラムは、周知のように、全欧会議参加国間でお互いに核兵器を最初に使用しないことにかんする条約の締結、欧州大陸で相互に対立する軍事・政治的ブロックおよび同盟を少なくとも、新しい加盟国によって拡大しないことにかんして協定の達成、五万―六万人以上の参加する軍事演習を実施しないことについての合意、最終文書に規定されている軍事的信頼措置の、地中海水域南部に位置する諸国への拡大等を予定している。

ソ連側は、軍事的緊張緩和のあらゆる問題、さらにこの分野で可能なその他の建設的な提案を、近いうちに全欧安保協力会議に参加したすべての国の特別協議によって審議するよう提案した。会議では、中性子爆弾の製造を相互に停止する取り決めをしようというソ連の提案の大きな政治的意義が強調された。

欧州の軍事的緊張緩和を強化するための行動綱領と、軍事的緊張緩和に関係するすべての提案がベオグラード会議で採択されたならば、欧州だけでなく、全世界の平和の事業にとって大きな意義を持っただろう。しかしながら、米国とそのNATO同盟国の一部はこれらの提案を拒否し、まさにそのことによって欧州大陸における平和確保の根本的諸問題にたいするまったくの無関心を示した。米国とその他のNATO諸国の代表団が持ち込んだ提案の中には、欧州における軍事的緊張緩和と軍事的対立の減少を実際にもたらすようなものは、一つとしてなかった。

ソ連と他の社会主義諸国はさらにベオグラード会議で、諸国間の協力のいっそうの発展をめざす一連の提案を行った。

政治の分野では、ある国の代表および市民の他国領内での個人的安全を保障し、文化、スポーツその他の行事を安全に行うための追加措置の採択にかんするソ連の提案は、緊張緩和の強化にかなうものだった。ソ連とポーランド人民共和国は、最終文書に述べられている諸原則を法制化することについての提案を行った。ドイツ民主共和国は、政治、経済、文化の分野において条約関係を発展させる方向で最終文書を遂行することについて提案を行った。

会議参加諸国間における政治的協議制度を発展させることをめざす重要な諸提案が行われた(ドイツ民主共和国とチェコスロバキア社会主義共和国)。戦争の宣伝およびあらゆる力の行使と力による脅しの禁止についての提案が行われた(チェコスロバキア社会主義共和国)。

経済の分野では、ソ連の代表団は環境保護問題、エネルギー問題、輸送問題にかんする代表者会議あるいは国際協議会の早期招集についての勧告を採択するよう提案した。

ポーランド代表団の提案は、たとえば、ヘルシンキ会議参加国が現存する貿易上の障壁の排除を促進し、貿易・経済協力の途上に新たな障害を設けないという義務を負うことを予定している。

環境保護にかんする国際協力を拡大しようとのノルウェーの提案や、エネルギー産業の分野での全欧的協力の積極化、内陸水路の全欧的利用計画にかんするオーストリアの提案もまた興味深いものだった。数百万の人々の運命にかかわる切実な諸問題が、移動労働力にかんする提案の中で取り上げられた。

社会主義諸国は人道的協力の分野で一連の新しいイニシアチブを発揮した。平和、安全保障、諸国民間の友好を擁護する社会団体の会合の奨励、民族芸術フォーラムの開催(ソ連)、平和教育の分野での協力(ポーランド)、大量情報手段の活動の積極化(チェコスロバキア)、全欧的文化協力(ルーマニア)、一九八〇年を欧州文化年とすること(ユーゴスラビア)等にかんして提案が出された。

ソ連は、全世界における人権の全般的承認と発展を助成するうえでの国際協力にこれまで公然と賛成してきたし、いまも賛成している。社会主義諸国の実践の影響のもとで、全欧会議の最終文書や他の一連の国際文書で承認されている国際法的概念が形成された。それは、人権の原則を国際法のその他の基本原則(内政不干渉、主権平等、諸国民の自決権など)から切り離して検討したり、適用したりすることはできない、ましてやこれらの基本原則に対立させることはできないということである。

ベオグラード会議では、ブルガリアとドイツ民主共和国の代表が、会議参加国すべてによる国際人権規約批准にかんする勧告を採択するよう提案した。ハンガリー代表は、すべての人に労働の権利を保障するよう参加諸国に勧告することを、またブルガリアとドイツ民主共和国の代表は、男子と同等の権利を婦人に与えるよう勧告することを主張した。

ソ連は、社会主義兄弟諸国および欧州の安全保障と協力の強化に関心を持つ他の国々とともに、ベオグラード会議の肯定的結果の達成に重要な貢献をした。中立諸国と非同盟諸国も重要な役割をはたした。会議の首尾よい終了のためにユーゴスラビアが行った有益な寄与を指摘しなければならない。

総括文書では、会議参加諸国が緊張緩和過程の継続に与えている意義が強調され、日程にもとづく意見の交換が全欧会議で規定された目的の達成への貴重な寄与であることが指摘され、最終文書の諸条項を一国で、また二国間、多国間で完全に遂行するとの参加諸国の決意が確認されている。

総括文書には、次回の会議を一九八〇年11月にマドリードで開くことで合意したことが記録されている。この会議に先立って三つの専門家会議を開くことでも合意が得られた。それは、紛争を平和的に解決する一般に受け入れられる方法の検討と作成、学術的フォーラムの準備、地中海沿岸地域の経済、学術、文化の諸領域での協力などの問題にかんする専門家会議である。

それでは、ベオグラード会議の基本的結果はどのようなものだろうか?

第一に、会議は緊張緩和発展の傾向を確認し、緊張緩和がその敵対者たちの妨害にもかかわらず、自らの道を切り開きつつあることを確認した。

第二に、ベオグラード会議の経験は、当面の国際問題の解決をめざす真剣な努力と、他国の内政にたいする干渉とを結合することは不可能であることをはっきりと示した。

第三に、ヘルシンキの合意のバランスをくずし、その内容の意義を歪曲しようとするあらゆる志向にたいして断固とした反撃が加えられたおかげで、最終文書は弱められなかったばかりか、欧州の政治的土壌にさらに深く根を下ろした。

そして第四に、会議は最終文書にもとづく安全保障の強化と協力の発展の多面的過程の継続に通ずる道を敷いたのである。

ベオグラード会議は、平和、安全保障、緊張緩和の共同の事業に利益をもたらした。

(『プラウダ』一九七八年3月25日号、一部省略)

明日の農業をになう青年たち

A・グーロビチ
カメラ　A・ズイピン



農民になるには、どうしたらよいだろうか？　こんなことを言ったら、多分、変に思う人もいるだろう。実際、農民というのは、一定の技術を修得して資格を得るといった職業ではない。おまけにこれは生活様式全体であり、ほとんどつねに生まれた時から決まっている職業だった。農民や牛飼い、羊飼いの知識や経験は父から息子へ伝えられ、毎日の生活の中で身につけられた。この経験は非常に貴重な贈り物だ。なぜならそれは単に事実や技能の集計というだけでなく、その中には言ってみれば父、母、祖父、全祖先の生活と労働と願望、土地や農業にたいする忠誠が蓄積されているからだ。しかし今やこのようなやり方で身につける知識は、その重要性には変わりがないものの、それだけでは不十分なのだ。ソ連農業の技術的再装備と工業化により、農民の労働の性格や内容が大きく変わり、科学技術進歩の条件に対応したまったく新しい知識が農民に要求されるようになった。農村は、新しい技術や生産工程を素早くのみこんで、たえず知識を更新させる能力をもった、教育を受け、技術資格のある働き手を必要としている。当然のことながら、農村青年も今日の農村生活に特有の多様な技術、新しい職種にあこがれる。

現代の農民になることは、とりも直さず専門家になることだ。そのためには学ばねばならない。その確実な方法は農村職業技術学校（SPTU）で学ぶことで、ここでは職業教育と後期普通中等教育とが併せて行われている。

三年後には専門家

SPTUへは普通教育学校の8年を修了してから、つまり、前期中等教育を修了してから入学する。そして三年後、コルホーズやソフホーズは農村の生産活動の諸条件に楽に適応でき、技能的に応用のきく専門家を受け入れることになる。

以上のことはクバン（ソ連ヨーロッパ部南部の農業地帯）へ行く前から一般的な予備知識として持っていた。しかしクバン地方のレニングラーツカヤ村で第12SPTUで学ぶワレリー・バビチ君と会った時、少年としか見えない、こんなひ弱そうな青年にトラクタをまかせるなんて危険ではないか、機械を駄目にしてしまうぞ、と一瞬思った。おまけにまだ大事な取り入れの真っ最中なのだ。だが、それは思い過ごしだった。数日後、SPTUの生徒バビチ君がコルホーズでのこの実習期間中、一定してノルマの一二〇―一二五％の成績をあげていると聞かされたのだ。仕事の内容も完璧で、一度として機械の故障はない。

第12SPTUのパーベル・コルニエンコ校長は私からこのことを聞いても、いたって平静だった。

「当然のことです。わが校の生徒たちは見かけは若いが、みなさんの期待を

こんな若者に大きなトラクタを任せて大丈夫だろうか？　だが、心配は無用。農村職業技術学校の生徒たちは立派に期待にこたえている。

裏切るようなことはありませんよ」

理論と実際を結びつけて

コルニエンコ校長は大学卒業後すでに10年以上もこの学校の指導者をしている。生粋のクバンっ子で、農業生産のことは十分知りつくしている。自分の学校の教え子たちが実習をする夏には、何度も校長みずからコンバインに乗り込んで、すばらしい運転技術の模範を見せる。

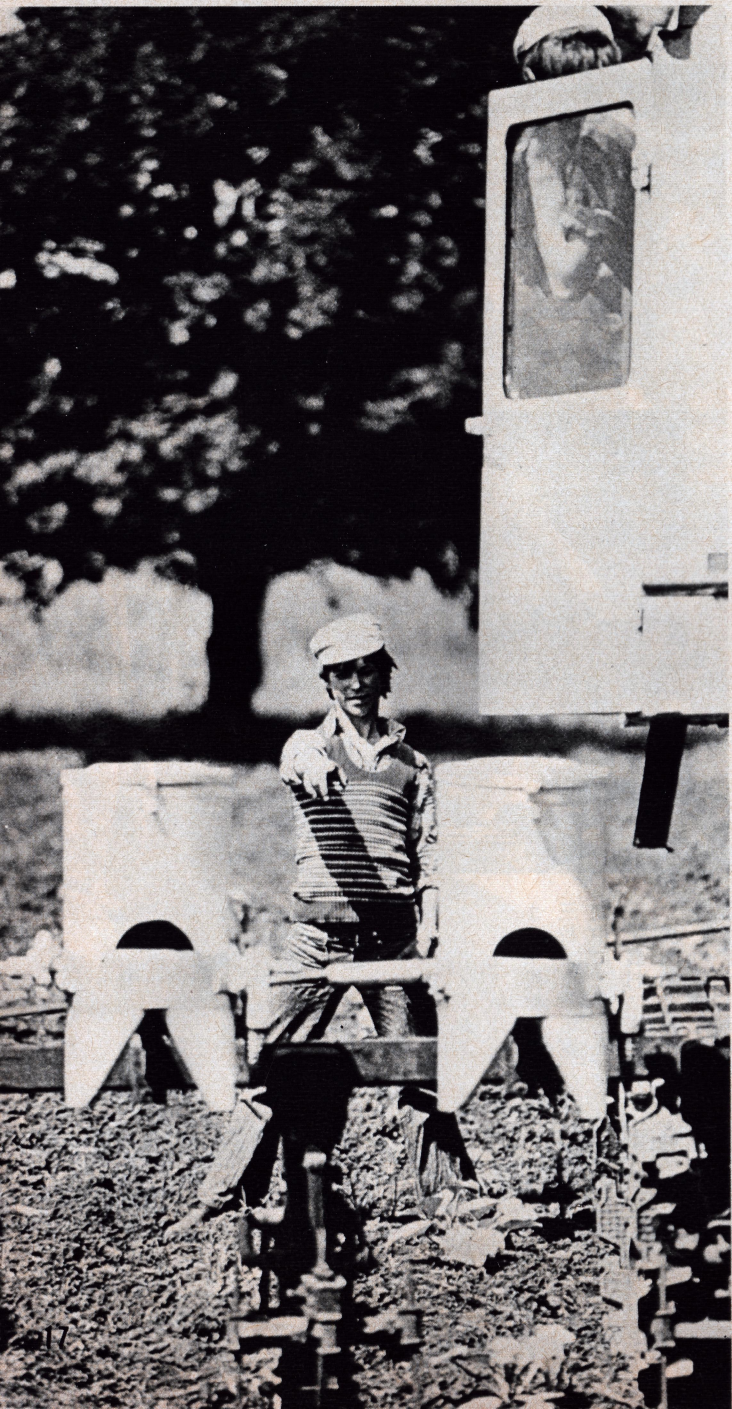
コルニエンコ校長は授業内容を次のように説明した。「われわれは生徒たちに重要な知識と技能を広範に授けます。ここでは幅広い専門知識を身につけた機械運転要員を養成していますが、理論学習は各教科ごとに別々に割り当てられている特別教室で行います。物理、化学、数学、機械の製図、トラクタ、コンバインの構造などの科目がそれです。実験・実習の授業は、各種の機械類がすえつけられている特別研究室で行われますが、ここで生徒たちは実習担当の職長の指導を受けてそれらの機械の構造をマスターします。機械の組立て、分解を行い、各部分を徹底的に学習します。それがすむと生徒たちは演習用の模擬農場での作業です。この農場は実際の作業条件そっくりに作られています。生徒たちがトラクタやコンバインの運転や総合機械の組立てを学ぶ教習場もあります。わが校にはトラクタが50台、穀物収穫用コンバイン10台、それにトウモロコシ、ビート、サイレージ収穫用の特殊コンバイン6台がそろっています。そのほか農業機械が一四〇台あります。それにトラックが25台。これら全部が四五〇名の生徒のものです。

ほぼ三〇〇haの広さの演習農場の畑で生徒たちは基本的な農機運転技術をマスターします。生徒たちは自分たちで農地を耕し、種をまき、作物の面倒をみます。収穫もします。クバンの主要作物は小麦ですが、学習が片寄ってはいけないので、大麦、ヒマワリ、スイカ、メロンなども栽培しています」

五年間で三〇〇万人を養成

クバンの穀倉地帯をかかえるクラス

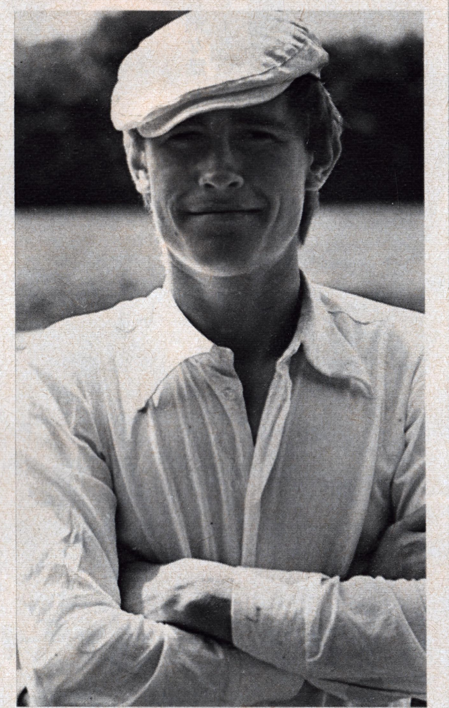






▶現代の農民は、化学を知らないで高い収穫をあげることはできない。

◀第12農村職業技術学校の生徒ワレリー・バビチ

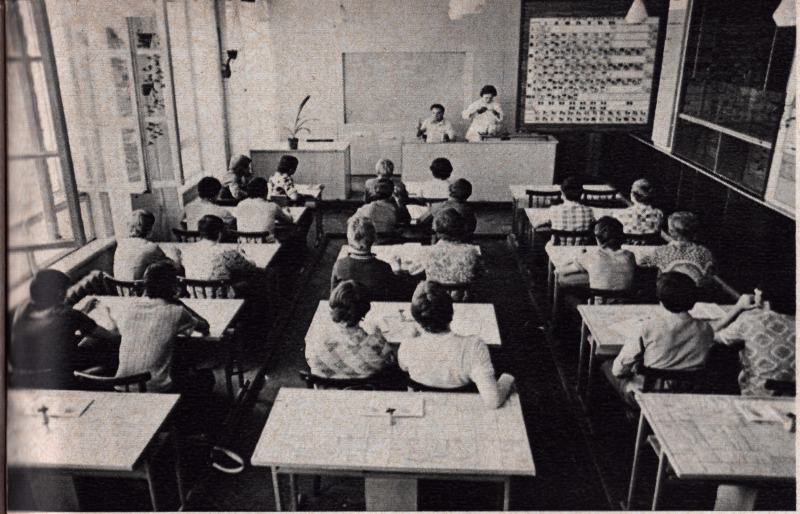


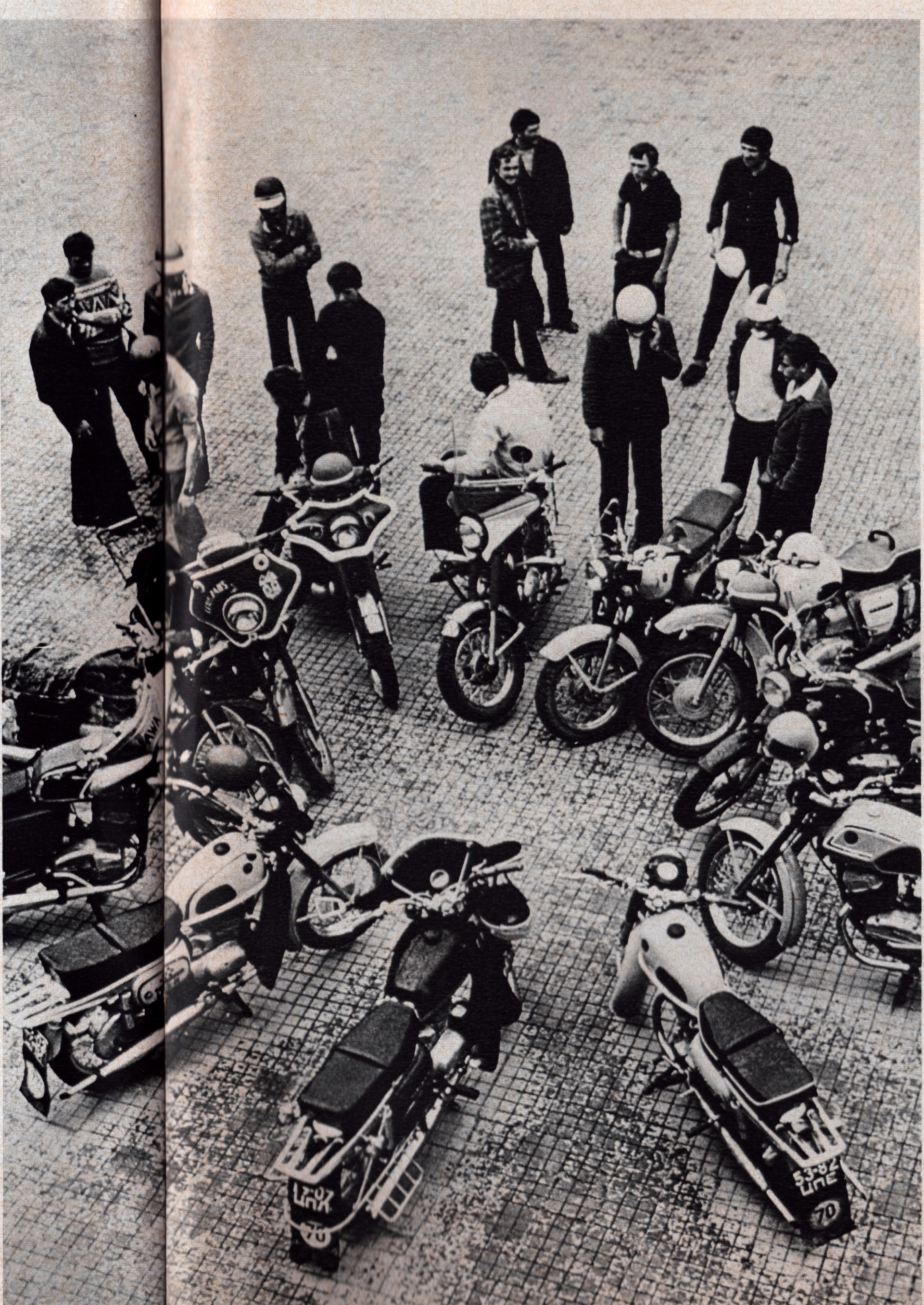
▶オートバイはどこでも若者たちの心をとらえている……

▲スラーワ・ムラビヨフは、自分が正しい進路を選択したと確信している。

左上　生徒たちが運転のコツを覚えるトラクタ練習場

◀演習農場で初めて一人で機械を動かす。



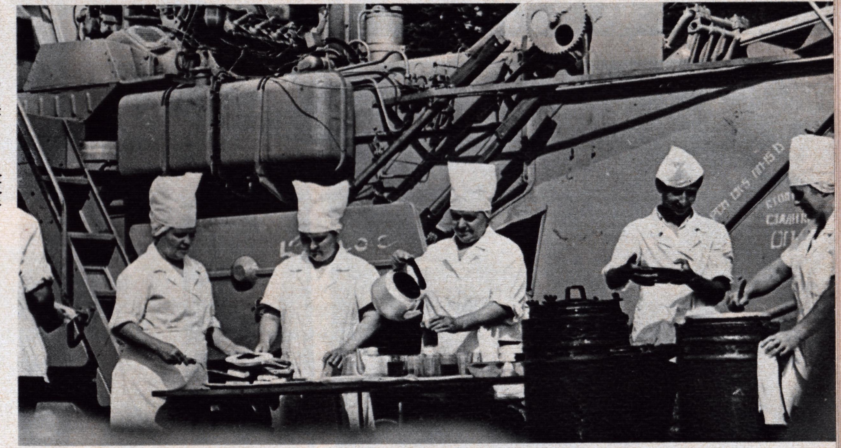




◀仕事についての真剣な話し合い。ここにはもう先輩も後輩もない。



▶農村職業技術学校の宣伝隊。同行した先生と生徒たちが各地の普通教育学校の生徒に学校や学校生活のことを紹介する。



実習中の楽しい昼食





練習装置では簡単だから落ち着いていられるが、本物の機械ではこうは行かない。

ノダル地方にはSPTUが26校あるが、ソ連全国には合計一六一四校ある。昨年度だけでもSPTUは、ほぼ一〇〇の職種の有資格のスペシャリストを六〇万人余り養成し、コルホーズやソフホーズに送りこんだ。一〇〇の職種の中には、従来からあるもの以外に少し目新しいものもある。たとえば、畜産コンプレクスのオペレータ、トラクタおよび自動車の技術的診断士、計器・オートメーション修理工などだ。

現5ヵ年計画が終了する一九八〇年までに農村職業技術学校の数は一八五三校になる予定で、この5ヵ年計画期間中に三〇〇万人余りのスペシャリストを農村に送りこむことになろう。

農村職業技術学校の良さがますます多くの農村青少年をひきつけている。費用は全額国庫負担で、寮費、食費、制服もすべて無料、おまけに奨学金まで支給されるという恵まれた条件の中で、生徒たちは専門技能を身につけると同時に、後期中等教育を修了する。だから卒業後は、あらゆる大学への進学の道も開かれているわけだ。

ソ日経済協力シリーズ⑥

人気よぶソ連レコード

V・タラネンコ

音楽に国境はない

この言葉が、ビクター音楽産業株式会社常務取締役・金子　秀氏の執務室でなんとなくすぐに頭に浮かんだ。ソビエト音楽レコードの生産は、ソ日経済協力というこのシリーズのテーマに関係する貿易の領域以外に、他の側面、つまり純粋に精神的な側面をも持っている。それは、率直に言って、私にはいささか困ったことだった。しかし同社の田中啓介、町田寛、ウサミ　ナオキ氏らと会談するにおよんで、私の懸念は雲散霧消した。というのは、同社の活動のなかには、消費者の現在の需要を満たすという一般に認められた基準を離れて、日本の聞き手に新しい作品とソ連の新しい演奏者や歌い手を紹介するという志向が見られるからである。

ロシア・ソビエト音楽が普及しているかどうか、またそれを日本でさらに広く普及させるにはどんな問題があるのか、という点も当然の問題である。

一つの出来事を私は思い出した。広島の平和公園を訪れたとき、一人の子供が近づいて来て、自分の学校のことについて盛んに話しだした。子供は唱歌の教科書を見せた。驚いたことにそのなかには、かなりたくさんのロシア・ソビエトの歌があった。なるほどそれらは比較的古い歌だったが、『カチユーシャ』『モスクワ郊外の夕べ』『赤いサラファン』など広く知られたものだった。そして日本の若い世代がはやくも学校時代から隣国ソ連の歌に親しんでいることを知って、私たちは非常にうれしかった。



金子　秀・ビクター音楽産業常務取締役
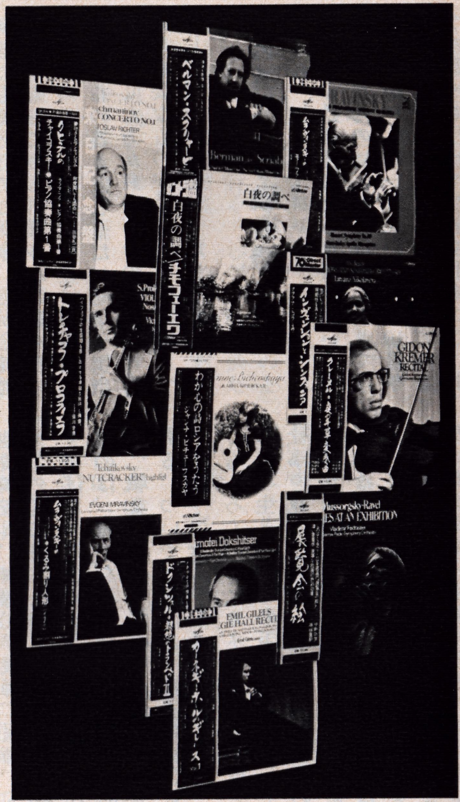
ソビエト音楽にたいする関心が高まっていることについては、金子常務は次のように語った。

「ロシア・ソビエトの歌にたいする関心は、日本では戦後すぐに現れはじめました。あなた方の歌のなかには多くの叙情性と美しい旋律があり、その真情が日本人にわかるのです。わが社はほぼ10年間、『メジクニーガ』（全ソ国際図書輸出入公団）を通じて、ソ連のレコード会社『メロディア』と協力しています。この間に貿易高は10倍に増加しました。この数字自体が、ソ連音楽の人気がますます上昇していることを立証しています。いまやわれわれは、カセットをも含めて約六〇〇点のソビエト音楽レコードを生産しています。

初めはクラシックから

もちろん協力の当初の段階では、われわれはD・オイストラフ、S・リヒテル、E・ギレリスその他のような世界的巨匠が演奏したクラシック音楽に比較的大きな注意をはらい、最もよく知られたレパートリーを選ぶことに努めました。しかしその後われわれは、日本の聞き手に、ソ連の若い世代の演奏者を順次紹介するようになりました。そして喜ばしい結果が生まれました。最近日本では、ソ連レコード・ベストテンが発表されましたが、そのなかには女流ピアニストのタチヤナ・ニコラエワ、トランペット奏者チモフェイ・ドクシツェル、バイオリン奏者ギドン・クレーメル、ビクトル・トレチヤコフ、ピアニストのラザリ・ベルマンその他、これまで日本では知られていなかったが、ソ連の音楽批評家の間ではその技量が高く評価されている演奏者がふくまれています。これらの演奏者は日本の音楽ファンの気に入りました。ショスタコービチのレコードが最近非常な評判になっていますが、われわれは、チャイコフスキーのこれまで日本であまりよく知られていなかった作品も発売しました」

さて、ソ連のポピュラー音楽はどうだろうか？　ここには若干の問題があります、と金子氏は話を続ける——「第一に、日本ではこれまで、ソ連の軽音楽の奏者はほとんど知られていませんでした。わが国には、この方面を専門にしている音楽批評家が非常に少ないという事実も、残念ながら指摘しなければなりません。第二の問題、これは言葉の壁です。英語、フランス語、そしてこれよりはやや少ないドイツ語——これら3カ国語は日本の聞き手にとって理解し得るものです。以前には、このように思えました。もちろん別の問題もあります。それは、どの国の場合でもそうですが、世界的に名のあるスターたちへの熱中です。



ビクターから発売されているソ連音楽のレコードの一部

二人のソ連フォーク歌手

わが社はこんど、ソ連の有名な2人の演奏家、ジャンナ・ビチェフスカヤとブラト・オクジャワのレコードを発売しました。

なぜ、ほかならぬこの2人の演奏家を選んだか？

これは、言わばわれわれの試験盤だったのです。ちなみにこの試験盤によって、現代風なソ連の軽音楽と民謡のレコードの生産を拡大すべきであるとの結論を得ることができました。問題は、最近とくに若者の間で、一般に〝フォーク〟と呼ばれる音楽や歌、つまり民謡に近い音楽にかんする関心が強まっていることにあります。

他方、われわれの調査結果によると、言葉の壁の影響は少なくなっています。この点について一つの例を挙げましょう。私は米国へ行ったとき、ひとりの青年に、どんな音楽が好きかとたずねてみました。答えは——ソウル、つまりロックン・ロールでした。さらにたずねました——『きみにはそれがわかるのか？』答えは否定的でした。この例からわかるとおり、言葉の壁は音楽や歌における最大の障壁ではないのです。この偶然の会話が、さらに立ち入った調査をしてみようという考えをわれわれに起こさせました。ソ連の現代歌手のレコードを発売する準備をしていたのだから、なおさらです。

聞き手の大多数は、歌い手がどんな言語で歌うかにかかわりなく、全体的な印象によってその音楽を評価するように思われました。現在、音楽では非常に漠然とした〝フィーリング〟すなわち感覚という言葉がよく使われます。ソ連の先の2人——ビチェフスカヤとオクジャワは、ほかならぬこの二つの特質に完全に合致しています。かれらのレパートリーは現代に歩調を合わせています。2人とも高い歌唱力を身につけており、聞き手の情緒的感動を呼び起こします。

この2人の歌い手は、ソ連の現代歌曲をこんご日本で普及させるための、われわれのいわば足場です。次はアラ・プガチョワのレコードを出すことにしています。この女性歌手にもわが国のファンが生まれるでしょう。

これからも新たな企画で

将来について話しますと、現代ソビエト音楽は日本でさらに広範に普及するでしょう。この関心は一九八〇年モスクワ・オリンピックに関連してとくに高まるでしょう。わがビクター社もそのときにそなえています。われわれは、ソ連諸民族の最も有名な歌のレコードを20—30枚、セットにして発売することにしています。これは独特の記念シリーズとなるでしょう。

ロシア・ソビエト歌曲を普及させるために、わが社は、現代ソビエト歌曲を歌うボーカル・グループ『ボニー・ジャックス』と提携しています。

われわれが契約を結んでいる『メジクニーガ』はもとより、ノーボスチ通信社や、必要な場合にはソ連大使館も、私たちによい援助を与えています」

今述べられたことに追加して、日本の新聞雑誌からの抜粋を引用したい。

「ソビエト・ポピュラー界の新星といわれるジャンナ・ビチェフスカヤ……それはソビエトの民謡を各地で集め、それを現代風にアレンジし、ギターの弾き語りで聴かせる。演奏はソビエトのジョーン・バエズといったところ。このアルバムはソビエトで二〇〇万枚以上売れている」（『FMファン』一九七八年3月6日号）

「アメリカでも人気で、レコードの中の『ドン河のバラード』をバエズが取り上げ、日本では加藤が『ステンカラージンの夢』を歌っている。またNHKテレビのロシア語講座では『母を想う』『黒いからす』などが放送され好評だった」（『中日新聞』一九七八年3月3日付）。

訂正　本誌第6号8ページに掲載された条約草案の名称に翻訳上の手違いがありました。「ソ日善隣友好条約草案」とあるのは、「ソ日善隣協力条約草案」の誤りです。お詫びして訂正します。

ソビエト民主主義

天職の発見

エブゲニー・ドボルニコフ

4半世紀前、人類は今ある職業の半分も知らなかった。われわれの父親たちが持っていた専門技術の寄せ集めだけでは、今日では非常に困った目に合うだろう。たとえ対象がエキゾチックな宇宙や手の込んだ電子工業や、ロボット工業ではなく、伝統的な、日常の必要だとしても、同じだろう。今では専門と技能を考慮に入れた人類の〝職業〟一覧表には、五万近くの職業が記載されるだろう。

ある初老の作家がある時、青年たちとの会合で次のように語った。「私は諸君がうらやましい。選択の可能性が何倍にも増えたのだから。しかし諸君に同情もしている。雑多な、騒々しい市場にいるように選択に迷うからだ」。青年たちの答えはこうだった。「選択に苦労した方が良い。その代わり貴重な、必要なものが手に入るのだから」。そして双方の意見は一致した。

若者たちの職業観

ソ連の社会学者たちが興味深い調査を完了したのは、そう以前のことではない。かれらは一九二〇年代（10月革命勝利後まもなく）に中部ロシアの二つの農村で行われた学校生徒にたいするアンケートをそっくりそのまま繰り返した。調査は農村の子供たちの職業の選択や人生観にどんな変化が起こったかを記録した。半世紀前には5人に1人の男子がくつ屋になることを考え、9人に1人が教師に、7%が農業技師に、同じく7%が小店の経営者になることを考えた。子供たちは洋服屋、猟師、指物師、かじ屋、測量士、書記など、全部で36の職種を挙げた。だが現在の彼らと同年齢の少年少女はどうか？4人に1人が運転手に、5人に1人がパイロットになることを望んでいる。そのあとに技師、機械技師、船員、地質調査員、無線工学技師、医師、トラクタ運転手と続き、全部で54の職種を挙げた。そこにはっきりと認められたのは、量的な増大だけでなく、〝知的な〟職業に向かっての明らかな前進である。ついでに言うと、女子の場合もそうだった。

もちろん、単にカネをかせぐ手段として、生きるための手段の一つとして仕事を見るならば、選択の問題は別の見地から現れるだろう。選んだ仕事にどんな態度をとるかは知ったことではない。大切なことはその仕事が賃金を与えることだ。しかしこの見地はあまりにも実用第一主義すぎる。はっきり言えるが、ソ連では若い世代の圧倒的多数はこのような見解を持っていない。もちろんかれらは調和を求めている。仕事は収入をもたらさなければならない。しかし同時に仕事は気に入ったものでなければならない。仕事は働き手に興味を与えるものでなければならない。仕事は働き手の能力を存分に発揮させるものでなければならない。アマチュア創造活動、スポーツ、コレクションにおいてだけでなく、職場においても自分の個性を発揮できるようにしなければならない。これが次代を担う青少年の信条である。

職業、人間、社会

先に述べたアンケートにもどろう。二〇年代の子供たちは自分の選択にどんな理由を挙げたか？ 37%が「もっと多くかせぎたい」という希望を挙げた。1/3が「毎日食べる」ために、と説明した。くつ屋の職業は「いつでも仕事があってたくさんかせげる」ということで人気があったし、教師の職業も「カネになるから」ということで人気があった。現在は基準が違っている。男子の59%、女子の67%がなによりも選んだ仕事への愛着を挙げている。物質的な理由は男子では8位に、女子では9位にある。男女ともに、教師になりたいのは「人に知識をさずける」ため、医師になりたいのは「医師が人々の生命を救う」から、化学者になりたいのは「自然のなぞの解明が人々に利益をもたらす」から、トラクタ運転手になりたいのは「機械が好き」だから、と回答した。

このように、労働は賃金のためだけでなく、自分を表現する機会として選ばれているのである。この場合には一生の職業の選択は計り知れないほど重要になる。

これらはみなきわめて個人的な関心事だから、めいめいが考えればいい問題だ、と思われるだろう。だがそうではない。社会の真の民主主義と人道性は、いうまでもなく、若さと仕事という二つの世界の不可避的な結合においても現れている。社会は個人的な悲劇や間違った決定が少なくなるように気を配っているだろうか？ 満足すべき結果を得るために、実際に何をしているか？ もし要求が根拠のない場合に、先見の明と機転を十分に発揮しているのだろうか？

職業進路指導

ソ連で出来ている、職業的軌道に人間を乗せるシステムをざっと述べてみよう。おそらく、このシステムを理想的でないと思う人も、議論の余地があると思う人もいるだろう。しかしこのシステムは時の検証を経て、疑いもなく成果をあげている。

ところで、学童は7歳で初めて労働教室での授業を受ける。ここでは紙やはさみや針を使って働くことを教える。原則は有益な物品——鳥の餌箱、人形の衣装、モミの木祭りのツリー用のおもちゃの製造である。3年間がこのようにして過ぎて行く。しだいに子供たちはさまざまな職業——都市や農村の職業に通ずるようになる。

10—11歳から学校工作室で労働教育が始まる。この工作室には簡単な、だが本物の工場の機械が備え付けられている。最初は最も簡単な木製品、それから金属工作機での仕事、現代金属加工技術の基礎の習得。普通教育学校の教師のほかに、最寄りの企業の専門家が子供たちを教える。学校は少年少女に近代生産の性格にふさわしい技術、工程、設計の知識を授ける。

しかし工作室での授業を過大評価してはならない。それは職業選択に直接の関係を持っていない。これらすべては、むしろ簡単な〝自己テスト〟である。だから高学年では週に一度生徒たちはいわゆる〝学校工場〟に通う。ここでは問題はいっそう深く、真剣に提起されている。さまざまな役割で——旋盤工、仕上げ工、電気工として自分をテストし、無線工学装置や計算機の取り扱いに通ずることができるし、少女たちは、速記や電話交換手の仕事、その他の普及している職業技術を習得することができる。

さまざまな企業が、このような〝職業コンビナート〟の職場に設備を提供し、生産教育のベテランを派遣している。理由は明らかだ。工場の管理部はこういう〝就職前〟教育に協力することによって、やがて追加の働き手の形で見返りがあることを期待しているのだ。この期待はかなり実を結んでいる。学校時代に気に入った仕事は、一部の者には一生涯の仕事になる。

選択するのは本人

これは、学校がだれかに職種を〝押し付け〟、前もって決めることを意味しているのだろうか？ けっしてそうではない。選択はその人自身がしなければならない。だれもその人に代わって選択するようなことはしない。ソ連における職業進路指導のあらゆる手段は、個人の可能性と能力を明らかにするためのものであり、けっして個人にたいする圧力の手段ではない。

注目すべき例を一つ挙げよう。ソ連では、一連の諸国で行われているように、学校の卒業生に、厳しく決められた一定の範囲の職業を勧告するたぐいの文書は発行していない。なぜか？ 現代の科学はこの件についての権威ある勧告を与えることができないのだろうか？ ソ連の専門家はその場合、間違いが起こるかもしれないと考えている。能力判別システムは今の所、残念ながら多くの主観的な要素を秘めており、好ましい職業について下された〝判決〟が根拠薄弱な場合もありうる。あるいは、ソ連の教師をあまりにも慎重すぎると言って非難する人がいるかもしれない。しかしこのような慎重さは、実生活に入ろうとするすべての人にたいする無条件の節度の現れである。問題が人間の運命にかかわるとき、社会は、その判決に一部分でも疑わしいところがあれば、それを下す権利をもたない。

選んだ仕事との出会い

若い人が大衆的な職業の一つを選ぶ決心をしたと仮定しよう。今後かれの一生はどのように形成されて行くのか？ 選んだ仕事とはどこで、どのように出会うのか？

大抵こうしたことは常設の学校、いわゆる職業技術学校で起こる。3—4年間ここで職業だけでなく、後期中等教育も受ける。余分なことではないか？ おそらくそうだろう、もし労働者を功利主義的に見るならば。だが、もし人間の全面的発展について考えるならば、もし人間から中等専門学校または大学で学ぶ可能性を奪わないとしたら、後期中等教育というのは少しも余計なものに見えないだろう。社会がどんな人物を育てるか、生産業務のすぐれた遂行者だけか、それとも精神的に興味深い人物か——これはどうでもよいことではない。

これまでわれわれは主に大衆的な職業の範囲内での人材の養成について述べてきた。なぜならそこでは需要がとくに大きいからである。しかしソ連で行われている職業進路指導の本質は、いうまでもないことだが、労働者の募集ではない。青年たちのさまざまな熱中にもとづいた多数のサークル、部、クラブの存在は、別のアプローチを語っている。

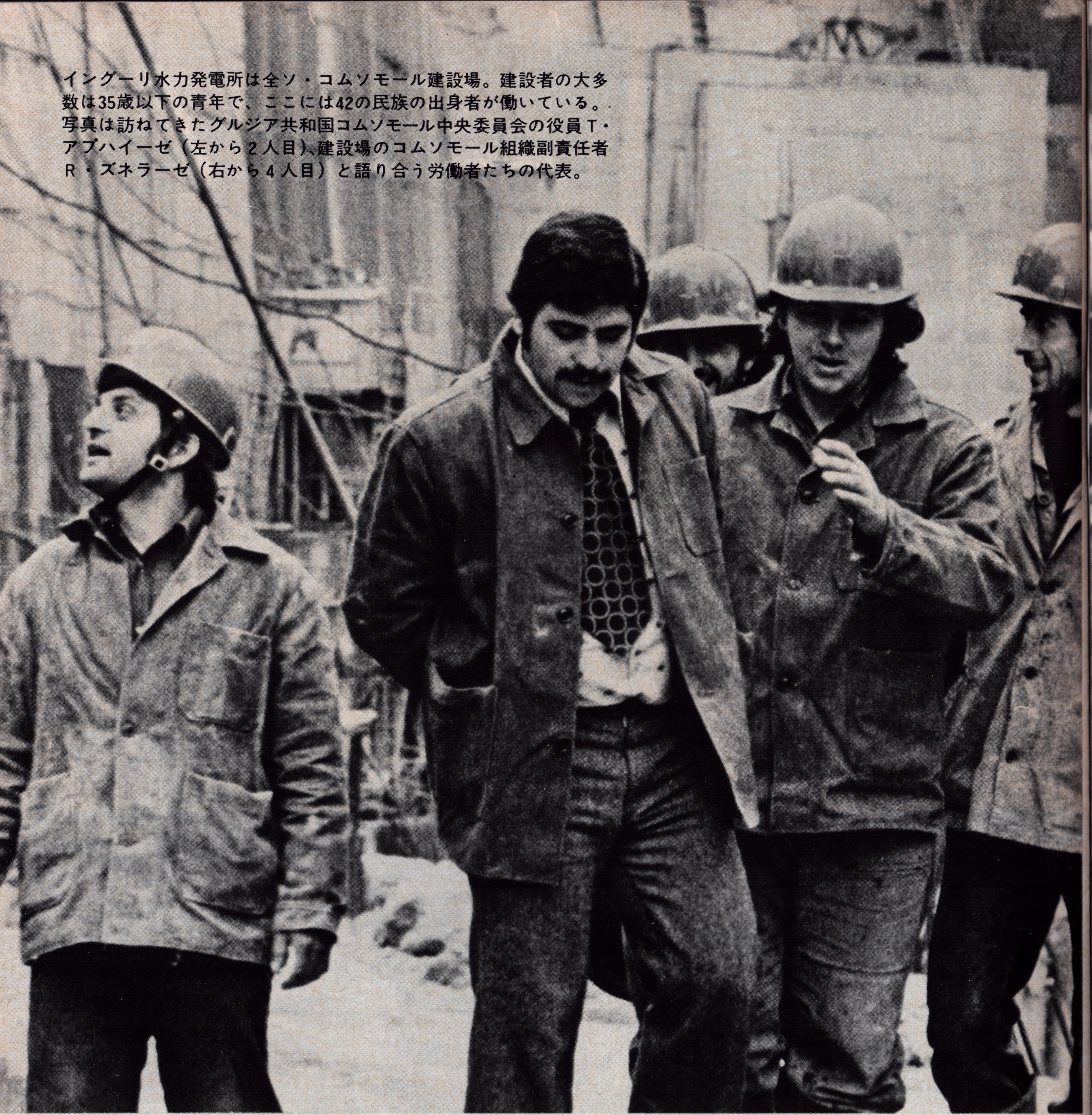
授業時間表の範囲内で興味に応じた選択課目が導入されている。自分の判断で、たとえば園芸に参加したり、絵画、音楽、演劇を勉強したり、美学や国際関係を研究したりすることができる。もし数学または外国語、音楽またはスポーツへの明らかな才能が現れたら、そういう専門の学校へ入ることができる。五〇万人の人口を持つ都市にはこのような特別学校が普通30—40校ある。

ところでもし学校が面白くないとしたら？ あるいは自分の興味を満たすことができないとしたら？ その時には放課後に気に入ったレッスンを見付けることができる。ピオネール宮殿か文化会館へ、少年技術者ステーションか子供鉄道へ、少年航海者クラブか児童公園へ出かければ十分だ。教師、コーチ、有能な専門家が指導してくれる。その料金は無料だ。

* * *

労働の権利、教育を受ける権利とならんで、ソ連憲法で保証された個人の自由の中には天分、才能、職業教育と一般教育に応じ、社会的需要を考慮に入れて職業を選択する権利が含まれている。この権利は無料の教育、奨学金や特典の提供、専門に応じた仕事の保証によって裏付けられている。

今世紀がどんなにダイナミックであろうとも、現在どれほど新しい職業が生まれて来ようとも、人間は自分の天分とすれ違ってはならない。この原則は、ソ連では〝自己を探求している〟者すべてにとって不変である。



イングーリ水力発電所は全ソ・コムソモール建設場。建設者の大多数は35歳以下の青年で、ここには42の民族の出身者が働いている。写真は訪ねてきたグルジア共和国コムソモール中央委員会の役員T・アブハイーゼ（左から2人目）、建設場のコムソモール組織副責任者R・ズネラーゼ（右から4人目）と語り合う労働者たちの代表。



暴れ川イングーリにできる発電所

オレグ・カシリン　カメラ　L・ウスチノフ

イングーリ川（グルジア共和国）の水源は大カフカズ山脈の斜面。一筋の細い流れはやがて氷河や雪や雨の水を集めて成長し、黒海に向かって激しく流れ落ちる。

イングーリ川に発電所を建設しようということを最初に思いついた人間がだれだったのか、今となっては分からない。土地の古老たちの記憶では、70年ほど前にここに調査隊がやってきて、ダム建設の候補地探しをしたことがあるが、あきらめて帰って行ったという。

高さ二七一mのダム

現在、この川の中流に建設中のイングーリ水力発電所は、出力では一三〇万KWと、それほど大きくはないが、アーチダムの天端の長さが七五〇m以上で、高さが二七一・五mに達するダム建設では前例のないもの。この高さは、とくに出水時のイングーリの水圧に耐えるために必要なのである。

しかし、問題はそれだけではない。われわれはイングーリ水力発電所建設総責任者のミハイル・ツイスカリシビリと話した。かれはもう50歳を越しているが、とてもそうは見えない。動作が機敏で、エネルギッシュだ。ツイスカリシビリは語った。「最大の難問は山です。ここの岩山はもろい、ひびの入った石灰岩でできています。この山を強化しなければ、山は水に浸食され、ダムもおだぶつです……それに地震対策。ここではマグニチュード8の地震が予想されるからです」

私は、岩の割れめをふさぎ、コンクリートで固めているところを見た。そのためにどれだけの力、資材、そして勇気が要ることだろう。岩山は垂直に、四〇〇mから一〇〇〇mもそそり立っている。

岩登りの四兄弟

強い雨が3日間降り続いた。増水したイングーリはどす黒く濁り、下流部でトウモロコシ畑を水浸しにした。

3日目の夕方、工区長のゲオルギー・スワニーゼはダムに接している岩山を見回った。長年のあいだ、イングーリがこれほどの力で岩山にぶつかったことは初めてだった。この水勢なら、比較的条件のよい個所でも山崩れを引き起こす危険があるということをかれは承知していた。そして、事実、かれは右岸で上から小石が降ってくるのを見付けた。

「始まったな」——スワニーゼはいまいましげにため息をついた。

スワニーゼは急いでロッククライミング作業班——アコビヤ四兄弟に召集をかけた。

「ネグシ、事態は緊迫している」と、スワニーゼは班長に向かって言った。「右岸の岩山は、いつ何時〝はぜる〟かわからない。人間や機械は避難させるよう命令した。今度はきみたちの番だ。岩はだを整備して、強化してもらいたい。時間は余りない。ダム工事の中止をこのまま長引かせるわけにはいかないんだ…」

落石がおさまるのを待って、ロッククライマーたちはわきの、多少とも安全な岩山を伝って登はんを開始した。下から投光器が高さ四〇〇mの山を照らし出す。頂上にロープを固定して、第一隊がゆっくりと下へ向かって降り始めた。途中、不安定な岩石をたたき落とし、岩はだを整える。もっとも崩落の可能性のある出っ張りは金網で補強された。

「もしかしたら、山崩れに巻き込まれる危険もあったわけでしょう?」

「作業をしているときは、危険のことは考えないもんです」と、班長のネグシ・アコビヤは語った。「そこにいるのがぼくらの親父ですが、親父の心配は大変なもんです。もう70歳で年金生活をしているんですが、われわれの総員出動のときはずっと見守っていました。ぼくらが下へ降りてきたときは、とんでもない職業を選びやがって、とどなりちらしたほどです。大体、はたから見ると恐ろしく見えるもんです」

「四人兄弟が全員ロッククライミング作業員になったのはまた、どうして?」

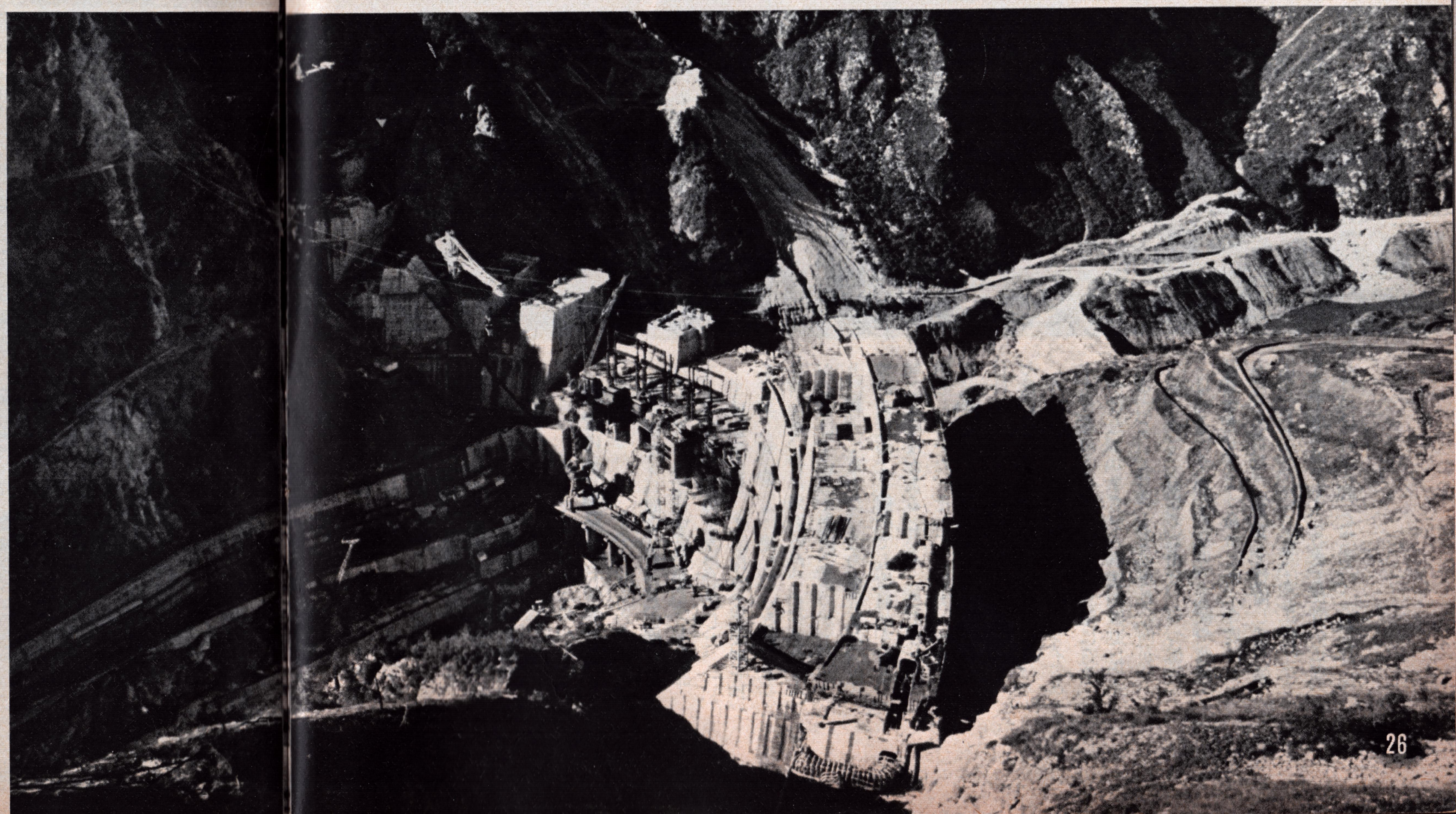
「ぼくらはここの生まれです。子どものときからこの辺の山道は歩き慣れています。ダム工事が始まると、ぼくと兄のデニスはここで働きたかったので、ロッククライミング作業員を志願したのです。そのあと下の弟たちゴネリとアフタンジルも仲間に加わりました」

アコビヤ四兄弟の長兄デニスは29歳、一番下のアフタンジルは22歳。アフタンジルを除いて、全員が結婚していて、子どもがいる。兄弟の人生計画はさまざまだ。アフタンジルは今のところ現状に満足していて、将来のことは考えていない。三番目のゴネリは大学の法学部に進学したいと思っている。ネグシとデニスはここの工事が終わったら、上流へ移ることに決めている。イングーリ水系の次の発電所の建設が決定しているからだ。

青年の建設場

ダムから地下の発電所主屋まで山の中に15㎞のトンネルが掘られている。水はこのトンネルを通ってタービンに達する。われわれは高さが4階建ての建物に相当するこの大きなトンネルを数百m歩いた。チーズのように多孔質の地層から氷のように冷たい地下水がほとばしり出ている。トンネルのほとんど全区間にわたって、小はちっぽけな〝モグラの通り道〟から、大きいのは曲がりくねった洞くつまで、地層に空洞がある。このために作業は3倍も手がかかる。これらの穴から水を汲み出し、コンクリートの〝継ぎ〟を当てなければならないからだ。

こういった複雑な作業を行うために、イングーリ水力発電所には高技能の水工施設建設者たちが必要だ。この発電所の建設にはソ連のいろいろな都市から来た30の建設機関が参加している。しかし、全部で一万一〇〇〇人居る建設者たちの大半は地元の住民、主として近くの村や都市の若者たちである。





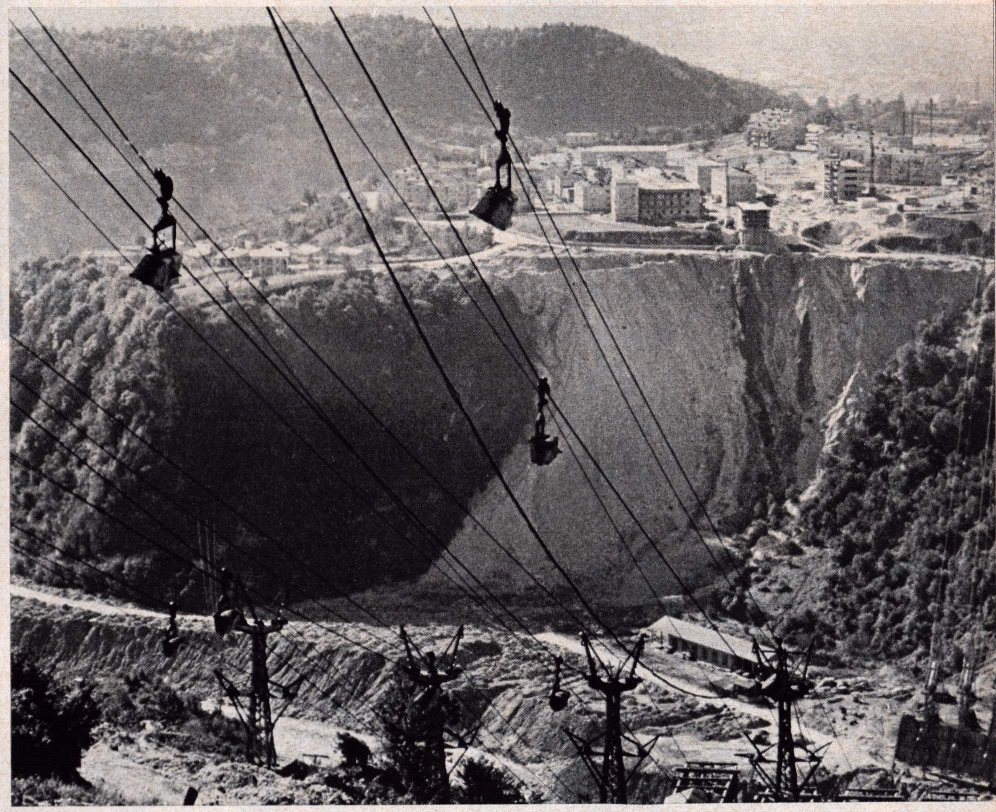


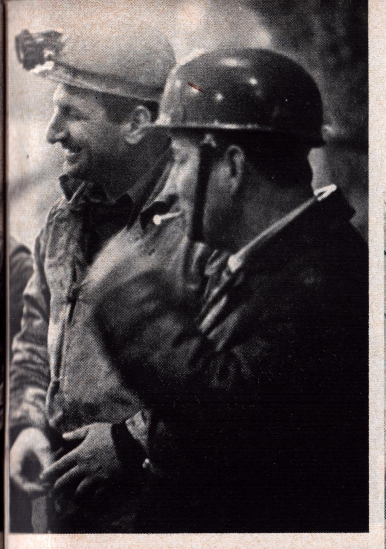
地下の発電所の〝Ｉ階〟に降りるドゲブアーゼ班長の掘進作業班

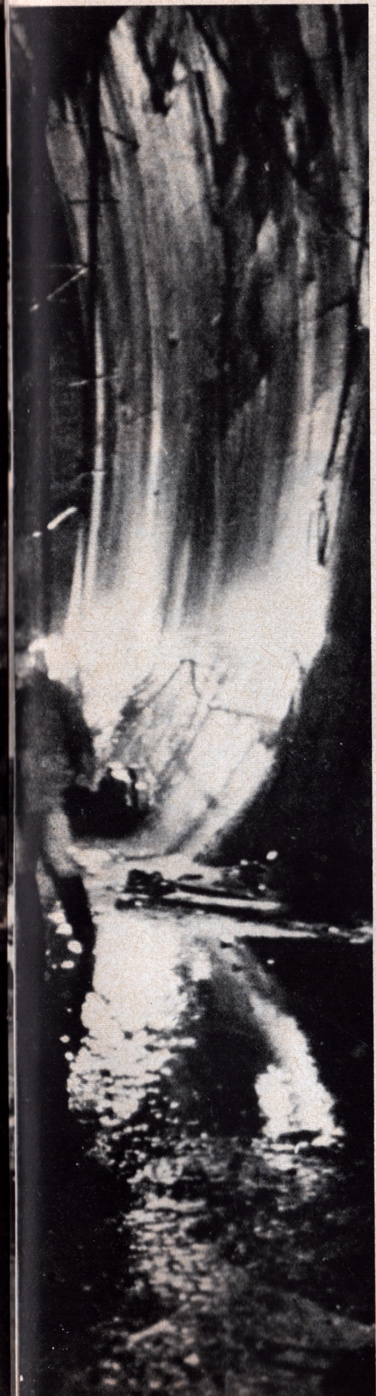
高さ400mの岩山から見下ろしたダムサイト。ここではもう大きな土砂崩れの心配はない。

ダムの高さは271・5mになる。

イングーリ水力発電所のアーチダムには合計 400万立方mのコンクリートが打ち込まれる。生コン工場への砂、その他の骨材の運搬、工場からダム工事現場への生コン運搬はケーブルで行われている。







兄の跡を継いで

ワフタング・ドゲブアーゼは文字通りの地元の人間だ。かれの生家は工事現場から徒歩で30分ほどのところにある。

普通教育学校を卒業すると、父親はかれに向かって言った。

「もちろん、お前にはブドウ栽培をやってもらいたいと思っている。だが、これから先のことは自分で決めろ…」

ワフタングは長兄のラミコと一緒に、将来のダムに通じる道を作っていた道路建設隊に入った。工事の範囲はどんどん広がった。兄はやがて地下発電所を建設する掘進作業班の班長になった。

災いは例によって、思いがけないときにやってきた。落盤事故のさい、他の人たちを救おうとして、ラミコが死んだのだ。まだ25歳にもなっていなかった。このときワフタングは、それまでは自動車の運転手になる積もりでいたが、兄の跡を継いで掘進作業員になろうと決心した。

現在、ワフタングは30歳。働きながら講習会を終了して、掘進作業班の班長になった。かれの指揮の下で28人が働いている。われわれが地下のこの作業班のところへ降りていったとき、かれらは最後の傾斜導水路の工事を終わろうとしていた。

「運転手になったほうがよかったと思うことはありませんか?」

「仕事がうまく行かないときには、そう思うこともあります。運転手のほうが楽でしょう。しかし、われわれの仕事のほうが高く買われています」

ワフタングはひまができれば、すぐ山へ狩りに行く。もう一つの道楽は釣り。あるいはこういう趣味と家庭の雑事が、ワフタングがもっと勉強するのを妨げているのかもしれない。トビリシ工業大学の通信教育課程で学んでいる友人はワフタングについてこう言った。

「かれはもう何回も大学へ入ろうとしたんですよ。しかし、そのたびに延期している。時間がない、と言ってね…」

「みんながみんな、高等教育を受けなきゃならんと言うわけでもなし…」と、ワフタングは手を振った。





「地下の空洞に降りて行った。ところが底がない。どんどん降りて行くと、いつの間にか、水の中にいたというわけさ」——仲間に冒険談を語る掘進作業班の労働者。

ダムから地下の水力発電所まで長さ15Km以上のトンネルが掘られている。

レーニンの人となり

レーニン生誕記念日に寄せて



レーニンとクループスカヤ（モスクワ、クレムリン内の居室で）

4月22日はレーニン生誕記念日。一八七〇年のこの日、ソ連共産党とソビエト国家の創設者ウラジーミル・イリイチ・レーニンが生まれた。

この日にちなんで、一九三五年にモスクワ脳研究所の学者たちがレーニンの性格や好みや性癖について行った質問にたいするレーニンの妻であり身近な協力者であったナジェジダ・クループスカヤの回答を、一部省略してご紹介しよう。

弱い人ではなかったが、とくに強くもなかった。散歩に行って、非常に早く疲れるということはなかった。よく動いた。家ではいつも部屋の中を歩きまわって……なにかを考えていた。足早に音も立てず爪先で歩くことによって、注意力をより集中できた。

動きには拘束されたようなところはなかった。動作は柔軟ではなかったが、ぎくしゃくとかどばってもいなかった。

非常にしっかりと立っていた。

体操はやらなかった。ゴロトキをやった。泳ぎ、スケートで上手にすべり、サイクリングを好んだ。狩猟を好んだ。熱心なキノコ狩り愛好家だった。一般に森の中を歩くのがおそろしく好きだった。

きざな、気取った、奇妙な、芝居がかった、もったいぶった動きは、なかった。

表情と身振り手まねは、いつも表現力に富んでいた。非常にしばしば微笑した。微笑は気持ちのよいもので、いやみなもの、"いんぎんな"ものではなかった。

いわゆるお愛想笑いや、むりにつくった笑いは、まったく見られず、いつもきわめて自然な笑いだった。

早口にしゃべった。声は表現力に富み、単調ではなかった。発話は平易で、気どらなかった。情緒的に充実しているが、芝居がかった、考えてつくられたものではなく、自然な情緒を備えていた。

困難を感ぜずに、自由に語句を選んだ。いつも非常に念入りに演説の準備をしていたが、それは語句を準備していたのではなくて、演説のプランを準備し、内容を考え、趣旨を考えていたのである。

演説であると座談であるとを問わず、いつも熱中して話した。非常に感じやすいたちで、演説の準備をしながら部屋の中を歩きまわり、たとえば、これから書こうとしている論文の内容を、小声でつぶやいていることもあった。

なにかを言い、説明したいという欲求は、いつも彼にはっきり現れた。

相手のことばの意味が理解できなかったりした例はなかった。それどころか、意味を異常に速くとらえた。彼のメモは、しばしば一語、一句だけが書き留められていた。

非常に元気で、頑張り屋で、忍耐強い人だった。

おそろしく速く、省略しながら書いた。たくさん、すすんで書いた。報告を行うときにはいつも、演説の構想とプランを書き留めていた。報告を聴いているときには、報告者や弁士たちの考えと発言を書き留めていた。こういったメモには、いつでも主要点はすべてとらえられており、けっしてのがすことはなかった。

なにか特に関心と感動をそそることを（たとえば手紙の中で）書いているときには、筆跡はいつもより読みやすくなった。

手紙は脈絡がついて、理路整然としていた。

手稿はいつも下書きをつくらず、すぐに書いた。抹消箇所は非常に少ない。

しゃべることと書くことの、いずれか一方がすぐれているということはなかった。私見では、両方とも非常に発達していた。たやすく、自由に、書きもし、しゃべりもした。

統計表、数字、書き抜きは、いつも並はずれてきちんと、念入りに"習字のお手本"式に書いた。

読むのはきわめて速かった。黙読した。

ときおり、読みながら、読んでいることに関連して考えたことを、小声でしゃべった。

見たものの記憶はすばらしく、人々の顔、本のページ、行を非常によくおぼえていた。一度見たものとその詳細を、よく、長く記憶にとどめていた。

自然を熱愛した。山、森、落日を愛した。色彩の取合せを非常に大切にし、愛した。自分の服装には、あまり注意を払わなかった。自分のネクタイの色などには無関心だったと思う。それに、ネクタイそのものも、ぐあいが悪いが、やむなくつけるものと見なしていた。

一度聞いたことを非常によくおぼえ、非常によく記憶にとどめていた。人の話をいつも正確に、自信をもって、自由に伝えた。

演説の準備中や、一般に仕事中に、好んでアンダーラインを引いたり、印をつけたり、書き抜いたり、要約したりし、しばしば、多くこれらの手段にうったえた。それらはしばしば、簡潔で、表現力に富むものであった。

人の話を聞くのが大好きだった。まじめに、注意深く、喜んで耳を傾けた。

音楽を聴くのは大好きだったが、聴くとひどく疲れるのだった。真剣に聴いた。

音楽的だった。音楽的な記憶力にすぐれていた。よくおぼえたが、特に速くおぼえたわけではない。なによりもバイオリンを好んだ。ピアノも好きだった。

演劇は大好きで——これはいつも彼に、強烈な印象を与えるのだった。

人がしゃべっているところで書くことができなかった（好まなかった）。絶対的な静かさが必要だった。

まったく従順に、与えるものをなんでも食べた。

部屋の中に栽培花を置くのをいやがった。しかし、野の花や緑葉は、好んで部屋に置いた。

通常の、いちばんよく見られる気分——それは緊張した集中。

陽気で、冗談を好んだ。

気分がしばしば変わるということはなかった。一般に、あらゆる変化はつねに根拠を持っていた。

非常によく自己を制御していた。

いろいろな理由で抑制する必要がないときは、しゃべる場合にはいつも問題を鋭く提起し、"相手がだれであろうとおかまいなしに"それを先鋭化するのだった。

深く、研究的態度で問題と取り組もうとする意図が、非常に強く表現されていた。

つねになんらかの形で、生活と有機的に結びついていた。

集中力はものすごいものだった。

反省的で、きわめて厳しく自己を律した。しかし、こまかい点をほじくり、自己分析をやって心の中で悩むことは嫌悪していた。

狩猟に熱中した。不必要な危険、危険のために危険をおかすことはなかった。臆病でも心配性でもなかった。

大胆で勇敢だった。



ソ連の視点

中性子兵器禁止をめざす新提案

ノーボスチ通信政治評論員　スピャトスラフ・コズロフ

ジュネーブ軍縮委員会でソ連、ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、モンゴル、ポーランド、ルーマニア、チェコスロバキアの社会主義8ヵ国は、核中性子兵器禁止にかんする国際条約案を提出して審議を求めた。

すでに何ヵ月も、文字通り全世界がこの残忍な大量殺りく手段に反対の抗議をしている。責任ある政治家、幾百人の学者、数千人の文化人、その他の社会団体、宗教団体の多数の代表者、世界各国の幾百万人の一般大衆が「中性子爆弾反対！」を叫んでいる。

しかし問題はもはや、当然の抗議の感情的な表明だけにとどまることはできない。その抗議は法制的に具体化されなければならないし、しかも緊急にそうしなければならない。

予想される危険

軍拡競争一般の、そしてまず第一に大量殺りく手段の分野での軍拡競争の断固たる反対者として一貫して行動している社会主義共同体諸国は、核中性子兵器が持っている特別な危険を認識している。

物質的環境にたいする影響は割合局限されるが、選択的に人間に苦痛を与えて殺傷する作用を持つこの極端に残酷で野蛮な兵器は、現代の武器庫に現れてはならない。手の込んだ殺傷手段としての直接の危険のほかに、中性子兵器はミサイルの弾頭、火砲の砲弾としても核戦争ぼっ発の脅威を鋭く増大させ、いわゆる〝核のしきい〟を低くする。中性子爆弾を局地的、〝戦術的〟兵器だとする主張は、この兵器を管理のワク外に置き、下級指揮機関にその使用の権利と可能性を与えるものである。これは事実上、核戦争の無責任な、承認を受けない開始に役立つだけであり、この戦争のエスカレーションを防止することは不可能となるだろう。

軍縮委員会のV・リハチョフ・ソ連代表は「もし中性子兵器の製造と配備を許した場合には、核軍備競争の新たな方向が開かれるだろう。そしてこれは軍事的対立の度合いを高め、欧州大陸でも、国際問題全体でも諸国間の信頼をぶちこわすことになるだろう」と語った。

V・リハチョフはまた、中性子兵器の製造と配備の開始にかんする決定の採択は、その意義と今後に残す結果の点で、ワシントンがかつて原子爆弾についで水素爆弾の開発にかんする決定を採択したことと比較できると強調した。そしてこの決定は、周知のように、核戦争の場合の殺りくの規模を数百倍も数千倍も増大させたのである。

必要な禁止条約

ソ連は、中性子兵器が持っている脅威の度合いを明確に理解して、この質的に新しい核兵器の開発に断固反対している。

この問題にたいするソ連の態度は、ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長が提唱した「この新たな大量殺りく兵器の出現から世界を救うために、たがいに中性子爆弾を製造しないことを取り決めよう」という提案にまったく明瞭に現れている。

平和の敵によって中性子兵器のホコ先がまず第一に向けられようとしているソ連や他の社会主義共同体諸国だけが、この兵器の禁止に関心を持っていると考えたら誤りだろう。西側で〝小型水素爆弾〟と詐称されている中性子爆弾の使用は、帝国主義的な服従と指図の政策を押し付けられている他の諸国をも明らかに脅かしている。いかなる核手段を行使した場合にも不可避的に生ずる核戦争のグローバルな性格は、全人類を破局の脅威にさらしている。

それゆえ中性子兵器を禁止する国際条約案の形をとったソ連とその同盟諸国の共同イニシアチブは、軍縮委員会で支持を見出している。ソ連代表が指摘したように、委員会の多くのメンバーはこの権威ある機関が中性子爆弾の行く手に障壁を設けるといった、重要で焦眉の軍縮問題を検討することに賛成したのである。

ソ連は社会主義諸国によって提出された条約案を支持するよう委員会に呼びかけている。この条約の加盟国は中性子兵器を製造しない、蓄積しない、どこでも展開しない、使用しないという義務を負うことになる。

核軍備競争中止と核軍縮の途上で具体的な合意をかちとるためにねばり強い努力が払われている現在、好戦的軍国主義の恐るべき産物である中性子爆弾を非合法化する使命を持った、合意を見た条約文の作成はきわめて時宜にかなっており、また必要である。

侵略の兵器――中性子爆弾

V・エメリヤノフ科学アカデミー準会員に聞く

使う側にも被害

「一九六四年から中性子爆弾に反対しているソ連の学者は、この爆弾は侵略兵器だと考えている。この爆弾はこれを使用する側をも殺傷する」と、ワシリー・エメリヤノフ・ソ連科学アカデミー軍縮問題委員会議長はウラジーミル・オストロフスキー・ノーボスチ通信評論員に語った。

「ソ連の世論は社会主義諸国の新しいイニシアチブ――核中性子兵器禁止条約案を熱烈に支持している。この兵器は〝小型〟だといわれるが、その威力に制限はない。米国のロスアラモス原子力研究所の資料によると、1―2キロトンの中性子砲・爆弾の放射線は12平方kmを超える地域に被害を与える。爆発力は大量の放射性土壌（二次放射能）を空中へ巻き上げるが、それは地上のあらゆる生物にとって避けがたい追加の脅威となって降下する。向かい風は、中性子兵器を使用した軍隊にとって自滅の風となるだろう」と彼は語った。

ワシリー・エメリヤノフ・ソ連科学アカデミー準会員は、高速中性子はたとえば大気中の窒素と相互作用してそれを放射性の炭素（炭素14）に変えるが、その半減期は五〇〇〇年を超えると指摘した。このような同位元素は大気中ではこれだけにとどまらないが、この元素は食物連鎖を通じて人間の染色体を傷つけ、遺伝コードを変える恐れがある。

局地戦にとどまらない

身の安全を守るために、自国軍隊から遠い所でこのような兵器は使用されることになろう。この場合、それは防御の目的や〝戦術用〟という術語とはまったく関係のないものになる。1発や2発では個々の作戦の帰すうさえ決定できないとあっては、いきおい集中的に行使することとなって、欧州大陸の広大な土地が死の荒野となるだろう。中性子爆弾の着弾密度が平均的な場合には、1発の殺傷範囲がもう一発のそれと重なり合うだろう。これは高い水準の放射能汚染を生み出し、土壌、建物、金属構造物、大気中の二次放射能はいっそう強く、持続的なものとなるだろう。

これらすべてが一緒になって、相当な面積の地域に汚染されない場所は1インチたりとも残らないだろう。突然の中性子攻撃による無防備の平和な市民の犠牲は、膨大な数にのぼるだろう。

「私はけっして欧州の人々をおどかすつもりはない」と、ワシリー・エメリヤノフは語る。「しかしこの兵器を欧州に配備する問題のもう一つの側面も考慮に入れる必要がある。国連の委託により、私もそのスタッフの一員である核専門家の国際委員会が、核兵器使用のさいに考えられる結果を検討した。この報告書には、たとえば20メガトンの核爆弾がハンブルグ上空で爆発したとすると、事実上西独の半分が壊滅的打撃を受けると述べられている。被害ゾーンは長円形をなして北から南へとこの国の広大な領域にひろがるだろう。

中性子兵器のホコ先がソ連に向けられていることをNATO筋は隠そうともしていないが、もしこの爆弾で攻撃されたら、ソ連も保有核兵器で反撃を加えざるをえなくなるだろう。

核弾頭を使う現代戦を、局地戦にとどめることはできない。この兵器の本来の性格からして、それは局地的兵器ではないからだ。長さ数千km、幅数百kmにわたって死の灰をまき散らしたビキニ環礁での米国の核実験もこのことを確信させている」

ワシリー・エメリヤノフは、最近開かれたソ連科学アカデミー総会でソ連科学者が中性子兵器反対闘争で努力を倍加するよう外国の科学者に呼びかけたことを強調した。ソ連は軍事技術面で危険な競争の道を進むことを望んでいない。ソビエト国家の政策はこれとは別の目標――軍縮と軍事対決の緩和をめざしている。

ソ連の科学者たちは、中性子爆弾は防御用兵器であるというこの爆弾の弁護者の主張はごまかしであると指摘している。この説の土台には社会・政治的側面がある。中性子爆弾のホコ先は社会主義諸国に向けられている。しかし欧州へのその配備の危険は、欧州人にとっても同じように大きい。諸国民の大多数は、この爆弾が核兵器の詰まった火薬庫――現在の欧州はそうなっている――に投げ込まれようとしているタイマツであることを理解している。

宇宙を夢見る少年たち

宇宙開発という問題は、たんに想像力に富んだ人々や学者だけでなく、ただの熱中家や夢想家までも夢中にさせている。そしてこの点では、ティーンエージャーと呼ばれる10代の青少年にも、かれらなりの観点がある。毎年モスクワで開催されている全ソ青少年模型製作・設計コンクール『コスモス』を訪ねれば、このような若者たちと近づきになることができる。本誌のマリーナ・ルイクリナ記者は、同コンクール組織委員長アナトーリ・ラグージン技師に、最近のコンクールの印象について聞いてみた。



組立て修理軌道工場の原理を説明するモスクワ州プーシキノ市の子供たち。

左下　ソ連邦英雄Ｌ・Ｓ・ジョーミン宇宙飛行士のサインは何よりのプレゼント

コンクールに参加できるのは、学齢期の子どもたちです。つまり、コンクール参加者の大多数は、ユーリー・ガガーリンが宇宙を飛んだ後に生れているのです。宇宙飛行は普通のことになりました。それは、若い設計家たちの作品にどんな影響を与えているでしょうか？

——コンクールには、定期便の航空機と同じように「アエロフロート」という標識をつけた宇宙飛行機が出品されていました。子供たちは、宇宙飛行が空の飛行と同じように、われわれの日常生活にすんなり入りこんでくる日が遠くないと考えているのです。

他方、宇宙飛行の事実自体はすでにかれらを驚かすものでないとすれば、これまで通りかれらを夢中にさせているのは、宇宙空間の未知性です。われわれのコンクールがますます人気を集めているのはこのためです。

若い設計家たちの想像力が学者の設計を追い越すということがあるでしょうか？

——それはあります。たとえば、未来の軌道宇宙港の動く模型ですが、これは巨大な宇宙コンプレクスともいえるもので、点々と明り窓のある円筒状のブロックに、ロケットを収容する係留装置がそなわっています。修理室の昇降口が開かれ、出発準備をととのえた宇宙船がドックから出てきます……

学者は、早急に解決しなければならない、もっと差し迫った問題を研究しています。このような型の装置は自分の出番を待っているのですが、いまのところ時期尚早といったところです。

大人たちは、子供の設計家たちをどのように援助していますか？

——大人たちの仕事は、実際のデータによって子供たちの夢の裏付けをしてやり、空想を現実のものにするのを助けてやることです。ピオネール宮殿、ピオネール会館、学校などには、宇宙ロケット模型作りの新しいサークルがつくられているし、いまもつぎつぎにつくられています。町の子供技術家たちの研究所では、すべてのクラスの生徒たちが、必要ないろいろな設備、計器、工具を使って実験をしています。そこでは技術教育を身につけた専門家が教えています。ソ連には、この種の施設が約一一〇〇カ所にあります。そして各共和国には、その共和国の中央研究所があります。ここでは教授方法の研究が行われています。最も興味深い模型や新しい教育方法は、すぐサークルのすべての指導者に知らされます。

コンクールの実施機構について話してください。

——まずはじめに、村や町で専門委員会が優秀な作品を選び、そのあとモスクワの中央青少年技術研究所で最終選考が行われます。主要な条件は、模型が物理学と数学の法則に完全に従って設計されていなければならないこと、つまり現実離れした空想であってはならないことです。〝設計者〟自身が、自分の作品について説明でき、技術的構想とその具体化がともに正しいことをりっぱに証明できなければなりません。そのためには、莫大な量の専門文献を研究し、大量の情報のなかで自主的に方向を決めることが必要です。

模型の展示・実演が、コンクールの参加者にとっても、また観客にとっても最も興味のあるのはいうまでもありません。考えてもみて下さい——展示場のなかで、みんなの目の前で、ロケットの操縦席に座ったり、まったく新しい技術的構想にもとづいて作られた装置に乗って火星へと〝飛ぶ〟のです。ところで、あなたは惑星面走行車を操縦したことがありますか？　私はあります。クイビシェフ（ボルガ中流の都市）の児童が出品した惑星面走行車の模型ですが、操縦が容易で、私の思いどおりに動いてくれました。走行車は凹凸のある惑星面をおおうようにして進むのですが、乗員は揺れを味わうことがありません。惑星面走行車を創作した子供たちは、こんご15年ないし20年で、太陽系の惑星に科学技術的作業を行うための基地が出現するものと考えています。

コンクールには、既存の宇宙技術設備の模型も出品することができますか？

——できます。子供たちは、本や雑誌に載っている図面にもとづいて、既存の宇宙機器の模型を作っています。こんなケースもありました。コンクールの参加者たちは実際のソ米共同飛行よりも一年半ちかくも早い一九七四年に、ソユーズ・アポロ両宇宙船の共同飛行の〝目撃者〟となったのです。タジク共和国の生徒たちが作ったこの動く模型は、一九七三年から七四年にかけて米国で開かれたソビエト青年博で披露されました。子供たちには図面はありませんでした。両宇宙船の比率と縮尺が非常に正確に守られていることに驚かざるを得ませんでした。

ところで、このように非常に複雑な、しかもたくさん必要な模型の部品を、子供たちはどこで手に入れるのでしょうか？

——ごもっともな質問です。たとえば、ノボチェルカスク市（ロシア連邦南部）にある電気機関車工場の文化宮殿の子供たちが作った未来の惑星間ステーションの模型には、二六〇〇個の部品が必要でした。子供たちはこの模型を作るのに、まる一年間かかりました。基本的には部品はすべて手製です。しかも多くの子供たちは、まったく思いがけない物——ピンポン球、古時計の部品、棒切れ、小さい角材などで自分たちの構造物を作り上げます。もちろんこれらの構造物は見た目には、工作機械を使って作られた大型の模型にはかないませんが、その構想はしばしば、けっして劣っていない場合があります。これらの構造物がどんなに感動的なものであるかは言うまでもありません。このことはとくに農村のサークルについていえます。農村では普通、古くなった設備を近隣の学校に譲ってくれるような工場は近くにありません。たとえば、ザバイカル地方のブリヤート自治共和国アチンスク区モゴイトゥイ村の学校のサークルはすぐれた活動をしています。部品には苦労していますが、子供たちはみんなで発明の才を発揮しています。子供たちはステップ（草原）に出かけて、ロケットの動く模型を飛ばしています。

コンクールには伝統のようなものが生まれているでしょうか？

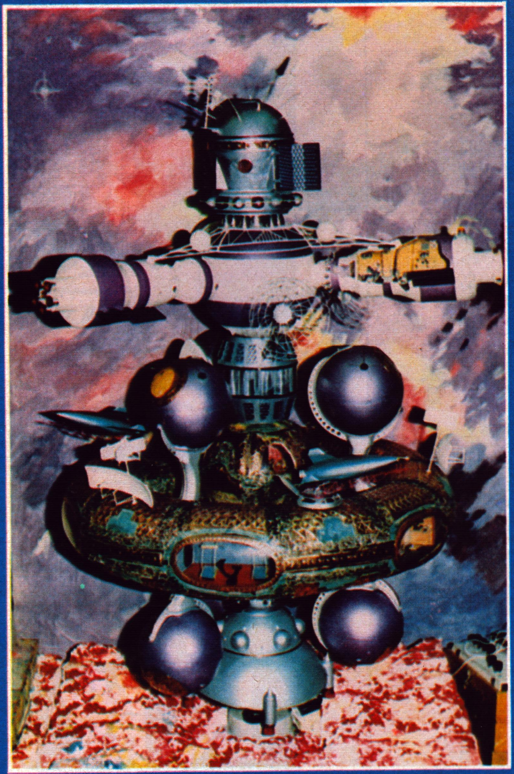
なにしろ、もう7年も行われているのですから。

——優秀な模型は、コンクールの後、国民経済成果博へ出品されることになっています。4月12日の宇宙飛行の日には、宇宙飛行士や有名な設計技師たちが若い発明家の模型を見にやって来ます。かれらは子供たちといっしょに、子供たちの作品の長所と欠点について研究します。そのうえ宇宙飛行士たちは、生徒たちを自分たちの家がある〝星の町〟に招待しています。

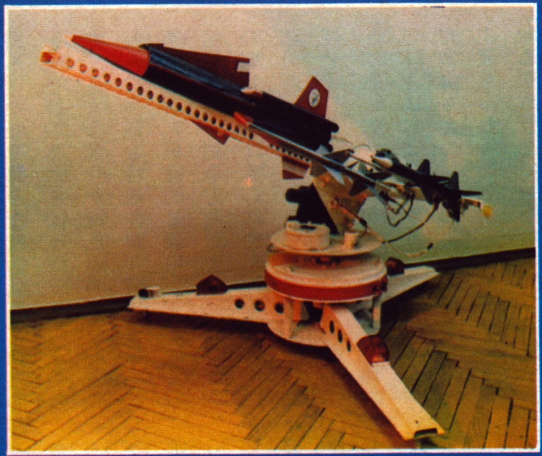
コンクール参加者のだれかがいまに星の町で生徒たちを迎えることになるかもしれない、とはお考えになりませんか？

——さあどうですか。現在すでに、近年のコンクール参加者で、若いときの熱中を職業に変えた人もたくさんいます。そのなかにはパイロットもいるし飛行技師もいます。いまに宇宙飛行士も現われるかもしれませんね。

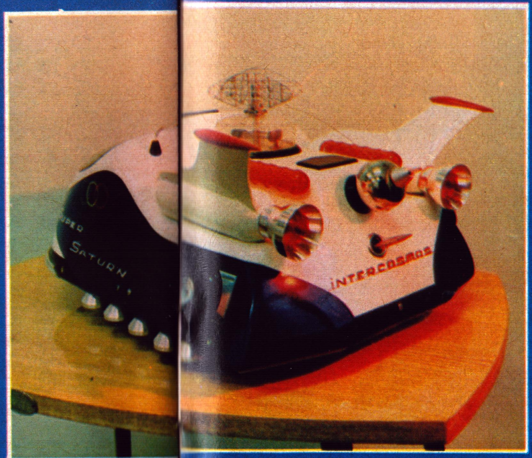




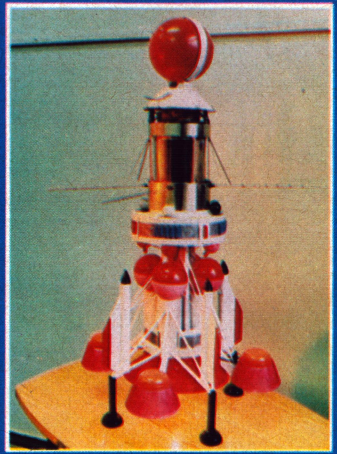
ノボチェルカスク市（ロシア連邦南部）の少年たちが作ったセルゲイ・コロリョフ記念惑星間ステーション



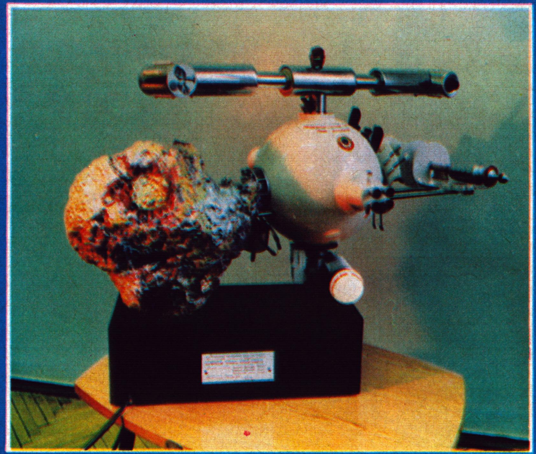
クイビシェフ市の少年技術クラブが出品したロケット発射基地〝メルクーリー〟



スームイ市（ウクライナ共和国スームイ州）の少年技術クラブ員たちが考えた宇宙実験室〝スーパー・サターン〟



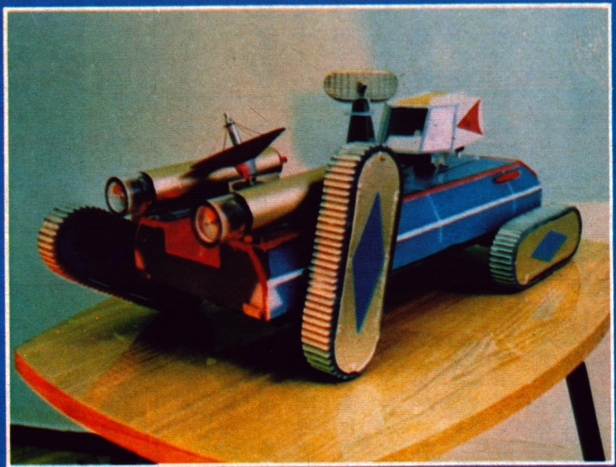
イズマイル市（ウクライナ共和国オデッサ州）の少年たちが想像した将来の惑星間飛行用光子ロケット



イジェフスク市（ロシア連邦ウドムルト自治共和国の首都）の少年設計家たちが考案した宇宙生産基地



クイビシェフ市の少年設計家たちが考えた月面走行車



カラガンダ市（カザフ共和国）の学校の生徒たちが作った万能型惑星面走行車〝プロメテイ2号〟



バルナウル市（ロシア連邦アルタイ地方）の学校の生徒たちが出品した宇宙ステーション〝マルス〟



ミレロボ市（ロシア連邦南部）の少年たちが出品した航空宇宙船

イデオロギー問題

社会主義建設の一般的法則と民族的特殊性

歴史学修士　ステパン・モクシン

現代のきわ立った特徴は、世界革命運動の力強い高まりである。生産力の発展と社会的成熟度の相異なる水準を持ち、かなり雑多な政治制度と歴史的伝統を持っている国々で、この運動のさまざまな部隊がたたかっている。これらの多様な特殊性が共産主義者に、革命理論を創造的に適用し、勤労者の組織形態、闘争方法および社会的変革の綱領における特殊性を綿密、具体的に分析、考慮するという課題を提起している。

これらのすべてが、国際共産主義フォーラムにより、マルクス・レーニン主義にもとづいて仕上げられた、社会主義革命と新社会建設の一般的法則にかんする概念に特別の緊要性を付与しているのである。

まず、これらの法則の一般的特徴について考えてみよう。

新社会への唯一のとびら

エンゲルスは、プロレタリアートの政治的支配をこのように呼んだ。レーニンも、これと同じ考えを述べている。レーニンは、国家権力の一つの階級の手から別の階級の手への移行が、革命の最初の主要な特徴だと考えた。

何のために、労働者階級には政治権力が必要なのだろうか？　それは社会における労働者階級の支配を永久化するためでも、またみずからの階級的特権を主張するためでもない。プロレタリアートにとって国家権力が必要なのは、社会主義の建設というプロレタリアートの歴史的使命を遂行するためである。社会主義社会の建設がブルジョア国家のわく組みの中で可能だと考えることは、まぎれもなく本物のユートピアである。西欧の数多くの社会民主主義者が長年にわたって、そしてなかには50年にもわたって閣内にいたり、内閣の首班となっていたにもかかわらず、これらの国は社会主義へ向かっては一歩も前進しなかった。前進しなかったのは、これらの国では、現実の権力が労働者階級の手中にではなく、資本家団体、帝国主義的ブルジョアジーの手中にあったし、いまもあるためである。

ロンドンのタイムズ紙はさきほど、ソ連の共産主義者は、ロシアの10月革命以前に存在していたマルクス主義の考え方に復帰するためにたたかっていると書いた。ついでに言えば、英国のこの新聞の主張は、ブルジョア社会学のステロ版の一つである。それはソ連共産党やその他の共産党が、レーニンと10月革命の助けを借りて、すっかり変化した世界の諸問題を、60年もむかしの経験によって説明し解決したいと望み、10月革命の経験を手本に、実生活のあらゆる場合に効用のある処方箋にしたいと望んでいるかのように主張するのである。

ソ連の共産主義者が10月革命の経験について語り、10月革命が他の国々の解放闘争にとって持つ意義について語るとき、かれらは、国際共産主義運動のなかにソ連の手本の機械的で陳腐な模写を広めようという考えや志向からは、ほど遠いのである。かれらはただ、ロシアの独得の条件のもとで社会主義への移行の客観的法則が現れたこと、これらの法則は、それが法則であるが故に、ロシア的土壌でない、別の土壌の上においても色々にして現れるということを強調しているにすぎない。これらの法則をそっくり模写することはできない。

政治権力への道

共産主義者は労働者階級による国家権力の獲得の必要性を言明するとともに、そうすることへの唯一の道が革命の道であることを教える。この道は平和的でも、あるいは非平和的でもあり得る。しかし革命的であることにおいてはどちらも同じである。なぜならこの道は、前述したように、国家の指導権がだれの手に渡るかという基本問題を解決するからである。

それぞれの具体的な状況のなかで目的の達成がどのような方法で行われるかは、プロレタリアートにかかっているのではなく、ブルジョアジーに、ブルジョアジーの抵抗の度合いにかかっている。10月社会主義革命は、その当初においてはほとんど無血だった。ペトログラードでの武装蜂起の日に死んだのはわずかに6人だった。しかし革命が発展するにつれて、国内の打倒された階級と外国の反革命の抵抗が増大し拡大した。闘争は内乱となった。そして三年間続き、巨大な人的犠牲と物質的破壊をもたらした。

統一をかためる力

労働者階級は、人道的イデオロギーに立脚して、できるだけ苦痛の少ない方法で社会主義的改革を行うよう努めた。〝左翼〟過激派、新トロツキスト、毛主義者らの、階級的抗争を故意にあおる方針は労働者階級には無縁である。しかしブルジョアジーが革命に向かって剣を振り上げたからには、生まれたばかりの社会主義国家はただちに報復措置をとり、闘争を最後まで、反革命の抵抗を完全に鎮圧するまでやりぬかねばならなかった。すべての革命は、それが自らを守り得てこそ、はじめて革命といえるものだ、とレーニンは警告している。このレーニンの警告がどれほど時機にかない、寿命の長いものであるかということを判断するには、チリの苦い実例を想起するだけで十分だろう。

勝利した社会主義革命の過程で生まれるプロレタリア民主主義は、一つの階級の権力である。しかし労働者階級は、社会を指導するにあたって独りでは行動せず、働く農民その他の勤労者層と同盟して行動する。社会的実践において初めて、労働と目的の共通性によって結束した幾百万、幾千万の生活の真の主人公たちが、国家統治の中枢に立ち現れるのである。

社会主義建設において勤労者を組織し、その努力を方向づけているのは、マルクス・レーニン主義党である。共産党による指導——これは社会主義革命と新社会建設の一般的法則である。労働者階級の権力の堅固さ、社会主義と共産主義の体制を建設する事業の成功、これらはこの党の成熟、マルクス・レーニン主義にたいする忠誠、党の隊列の団結に直接かかっている。一九六九年の国際共産党・労働者党会議は革命運動の経験と世界社会主義の経験を深く分析することによって、次のような結論に到達することができた——「実践が示したところによると、社会主義的改造と新社会の建設は複雑で持続的な過程である。そして新体制によって開かれた巨大な可能性の利用は、まず第一に、指導にあたっている共産党・労働者党に、社会主義的発展の諸問題をマルクス・レーニン主義的に解決するそれらの党の能力にかかっている」

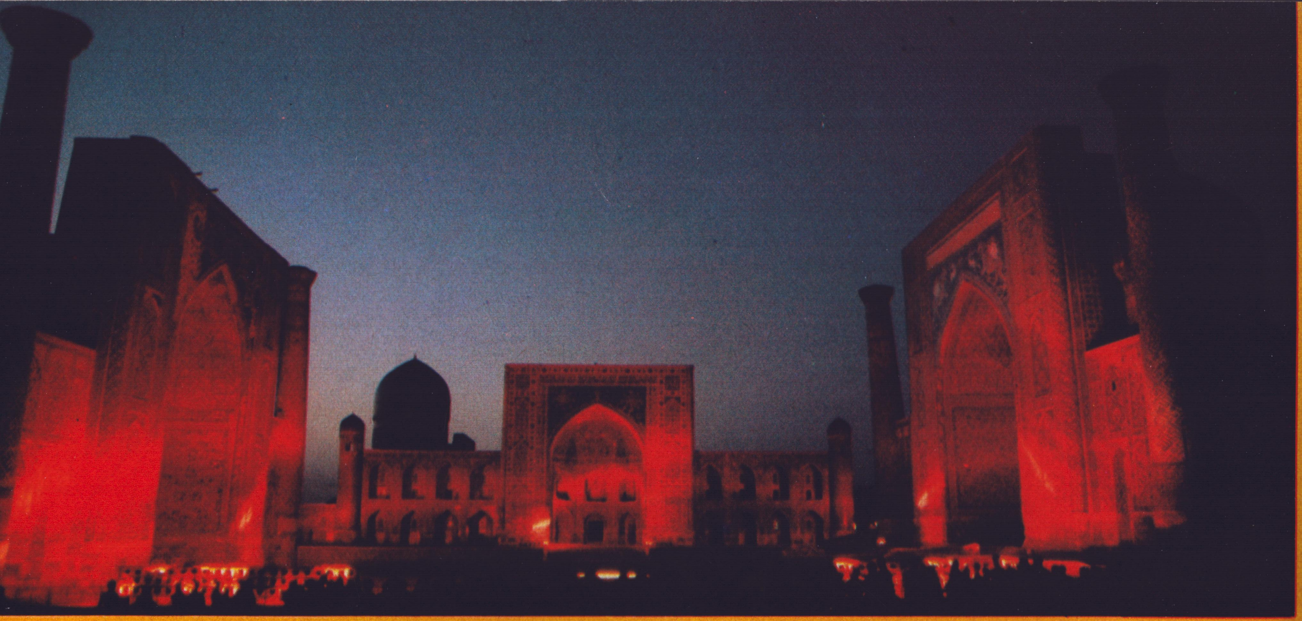
ブルジョア宣伝のねらい

このことを理解しているのは共産主義者だけではない。共産主義者の敵も、このことをはっきりと理解している。だからこそかれらは、なにはさておき第一番に、共産党の指導的役割を破壊することにその努力を向けているのである。ブルジョア宣伝は、共産主義者は〝独占〟的であると非難し、社会主義諸国における共産党の指導は独裁であり、そこには自由などはないかのようにいいふらしている。しかし、ソ連その他の社会主義諸国の国民は、自分たちの共産党の政策、勤労者の切実な根本利益にかなった政策を全面的に支持しているというのが真実である。

※　※　※

世界社会主義の経験はたえず拡大している。各国共産党は、この経験を注意深く研究し、自党の実践と可能性とを対比し、階級的勢力関係の分析にもとづいて、社会主義をめざす闘争の戦術と戦略を作り上げている。

ソ連共産党はつねに、兄弟諸党が自国のすべての特殊性と自分自身の経験を考慮しながら、社会主義をめざす闘争の具体的方法を探求することに大きな関心を寄せてきたし、いまも寄せている。しかしソ連共産党は同時に、各党の観点と経験の幅広い対比と共産主義者間の同志的討論が、原則的基盤に立ち、われわれの運動の共通の利益を常に考慮しながら進められることを支持する。このことは、われわれの階級敵が、これらの問題の討論のなかにくさびを打ち込み、討論を意見の対立に変え、対立をさらに分裂に変えようと試みているために、なおさら必要である。ブルジョアジーが考え出した〝ユーロコミュニズム〟の概念をめぐる先鋭な宣伝攻勢は、マルクス・レーニン主義理論によって明らかにされたまさにこの一般的法則に向けられているのである。







▲フットライトに照らし出されたレギスタン広場の夜景

▶サマルカンドの〝インツーリスト〟に勤める観光ガイド、ニッソ・プラトワ。毎日、大勢のツーリストを案内している。

◀レギスタンで行われている建築文化財の修復作業

▼レギスタンの建築アンサンブルの一部



古都サマルカンドへようこそ！

スタニスラフ・セルゲーエフ

カメラ V・レズニコフ



サマルカンドの案内役ニッソ・ブラトワ

旧サマルカンド市街の中心部レギスタン広場を見物する日本人観光客

中央アジアの都市サマルカンド（ウズベク共和国の州都）は、世界でもっとも古い都市の一つ。二五〇〇年以上の歴史があり、この都市の名が最初に文献に現れた紀元前三二九年にはすでに、かなりの人口と、発達した手工業、商業、文化を持っていた。何世紀ものあいだに、サマルカンドはペルシャ人、ギリシャ人、アラブ人、モンゴル人その他多くの民族に征服され、栄枯盛衰をくり返した。

サマルカンドがもっとも栄えたのは16世紀末、チムール大帝国の首都だったときである。このときのサマルカンドは、中世科学・文化の中心地の一つとして、その名をほしいままにした。

チムールの時代につくられた建築物の傑作は、中央アジア諸民族の中世建築美術の頂点をなすものである。中央アジアの残虐な征服者——大チムールの愛妃のために建てられた壮大なビビ・ハヌイム大寺院、グル・エミール廟の青いドーム、比類のないほど優雅な建築アンサンブル——シャヒ・ジンダ群廟その他のすばらしい遺跡には、今日でもなお驚かざるをえない。

サマルカンドはまた、壁画



ウルグ・ベクの天文台



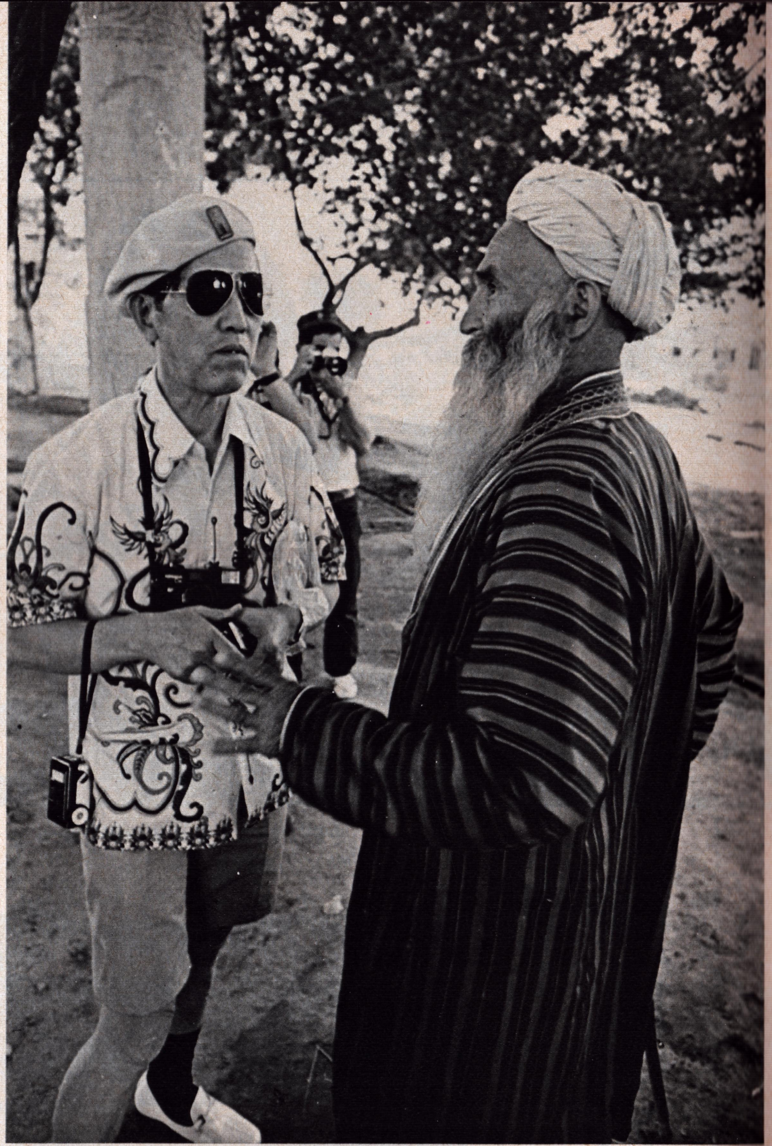
▼グル・エミール廟の壁の装飾模様がツーリストの関心をひいた。

や木彫、彫金、宝石細工などの工芸品でも有名である。
　今日のサマルカンドは、人口三〇万。広い通りや並木道が町を貫き、耐震高層ビルがそびえている。近代的な街区が、古い建築物とみごとに調和し、市の景観をまったく独特なものにしている。
　当然のことながら、サマルカンドは観光客にも人気がある。特に近年、その傾向が目立っている。一九七七年だけでも、日本をふくむさまざまな国から、二万五〇〇〇人の外国人観光客がここを訪れた。
　サマルカンドのインツーリスト（ソ連国営旅行社）外国人旅行客サービス事務所には24人のガイドがいる。主として、地元の大学の文学部を卒業した娘たちだ。そのうちの一人――ニッソ・プラトワはインツーリストで約3年働いている。私たちがサマルカンドを訪れた日、彼女は日本人旅行者の一行と見学に出かけるところだった。
「今日は日本のお客さんたちに何をお見せするのですか?」
と私は質問した。
「レギスタン広場へご案内します。レギスタンとは、〝砂地〟という意味で、旧サマルカンド市街の心臓部にあたります。その昔、レギスタン広場は、交易の中心地でした。ここに建っている一群の建築記念物は、過去の都市建築文化のユニークなモデルだといえるでしょう。レギスタン広場には、ウルグ・ベク（チムールの孫）のメドレセ（回教の最高学府）もあります。文献によればウルグ・ベク自身がここで数学の講義をしていました。ウルグ・ベクは当代一流の数学者であったばかりでなく、ケプラーの時代までもっとも正確だと認められていた惑星表や恒星表をつくった、15世紀最大級の天文学者でもありました。
　ウルグ・ベクのメドレセは、時間や地震、特に18世紀初頭の度重なる戦火によって、ひどくいたんでいました。一九一七年の10月革命ののちようやく、このユニークな建築記念物がそれ以上崩壊しないための措置がとられました。
　私たちはこの広場にあるもう一つの壮大な建築記念物――メドレセ・シェルドルも見学します。これは〝獅子のいる建物〟という意味です。この建物は約17年かかって建設されました。その10年後には、レギスタン広場を北から塞ぐような形で、メドレセ・チリャカリ（金張りの意味）が建てられました。
　そのほかにも、ビビ・ハヌイム大寺院をお見せしなければなりません。これは、中世

▶ 地元の古老と話し合う日本人観光客

ビビ・ハヌイム大寺院の遺跡で





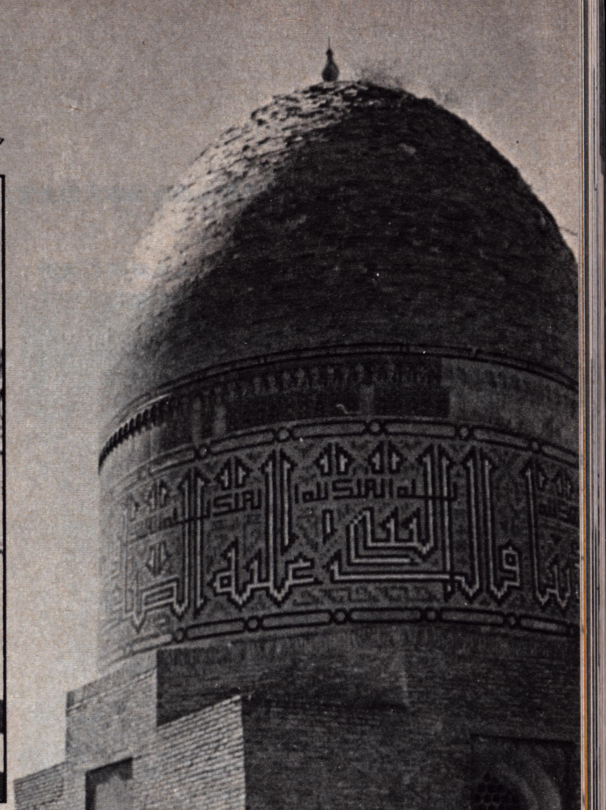


ガイドに質問も…

サマルカンドの建築の粋だと言えるでしょう。
　この大寺院の建設は、チムールがインドへ遠征して勝利を得たのちの一三九九年に開始されて、完成には5年かかっています。チムールの考えでは、ビビ・ハヌイム大寺院は、自分が見たよその土地のあらゆる寺院の顔色を失わせるはずでした。その建設には、多くの東方の国々の建築家、美術家、工匠、職人が参加しました。すべての部屋の壁は、釉薬を塗って焼き上げたレンガ（タイル）でその表面を美しく飾られています。それは、気まぐれな幾何学模様や宗教的な訓示を描いています。部屋部屋のぜいたくで豊富な内装は、マジョリカ焼きのタイルや大理石、金色に輝く模様で出来ています。今日残っているのは、その廃虚にすぎませんが、それにもかかわらず、深い感動を呼び起こすことでしょう。
　私が一番好きな場所の一つは、シャヒ・ジンダ群廟の遺跡です。これは〝生ける皇帝〟という意味で、もちろん、日本の観光客のみなさんにご案内します。これは、14世紀から15世紀にかけて次々に建てられた、さまざまな建物からなっています。青いドーム、タイル張りの大玄関、模様入りの石造りのドーム、複雑なモザイクを持つこれらの建物は、ソ連の建築家、考古学者、職人によって修復されたものです。この建築アンサンブルは、タイル芸術の真の博物館です。その繊細さ、形態の多様さにおいて、シャヒ・ジ

“このメロンはおいしいですよ”







中央アジア古建築物の傑作シャヒ・ジンダ群廟

ンダ群廟に匹敵するサマルカンドの建築物はありません。今日の午後は、私たちはサマルカンドの現代的な側面を見学する予定です。たとえば、一万四〇〇〇人以上の学生が学んでいるアリシェル・ナボイ記念国立大学や、市の新しい団地、絹糸繰り工場、にぎやかな、民族色豊かなバザールなどがそれです。夜には、印象深かった一日を思い出しながら、サマルカンド・オペラ・バレエ劇場で、オペラ『マダム・バタフライ』を、ウズベク語で楽しんでいただく予定です」

ソ日関係50年の多面的分析

——論文集『ソ連と日本』

一九二五年から一九七五年までの期間のソ日両国間の関係のさまざまな面を取り上げた著書『ソ連と日本』が、モスクワのナウカ出版所から発行された（三〇〇ページ、発行部数一万一〇〇〇部、価格1ルーブル60コペイカ）。この本はソ連の学者たちによって書かれた論文集で、2部に分かれている。第1部には、一九二五年の条約締結の時からの、さまざまな時期における両国間の外交関係史を扱った論文が載っている。第2部では各分野での二国間交流の諸問題が検討されている。

本書では、広範な史料にもとづいてソビエト国家の対日外交方針の原則的な性格が得心のいくように解明されている。著者たちは、ソ連の平和愛好政策が時代への譲歩ではなく、政治体制やその国の支配的なイデオロギーに関係なく、すべての国と平和・友好のうちに生きることを熱望しているソビエト国家の一般方針を表現するものである、と指摘している。

一九二五年から一九三九年までのソ日両国間の外交関係史を取り扱っているL・クタコフの論文では、この期間の善隣関係の確立と発展をめざすソビエト国家と日本の進歩的な各界各層の闘争について詳細に物語っている。著者は、レーニンの平和共存原則が10月革命後の初期からソ連の対日政策の基礎を成していたと強調している。

A・パノフの論文は、対日理事会や極東委員会でのソ連の活動を含む、一九五二年までの戦後日本の平和的民主的発展の助成を目的としたソ連の政策について述べている。

S・ベルビツキーの論文では、戦後の日本の対ソ外交方針の形成が示され、日本国内におけるさまざまな傾向の闘争が描かれている。

この本の第2部は、先にも述べたように、ソ日二国間交流のさまざまな面を取り扱っている。善隣関係の発展で重要な役割を果たす使命を持っているのが、両国間の経済協力であることは争う余地のない事実である。P・ドルゴルーコフの論文はこの問題を取り上げている。最も先進的な工業大国としてのソ連と日本は、地理的に近いという要因と国際分業の利点を利用して、最も広範な貿易経済協力と科学技術協力を実現する大きな可能性を持っている。この方向で広大な見通しを切り開いているのが、七六—八〇年度ソ連国民経済発展計画によって予定されているシベリアと極東の燃料・原料資源のいっそうの開発とそこでの大規模な経済コンプレックスの創設である、と著者は考えている。

この論文集ではソ日両国民間の友好をめざす運動やソ日労働組合交流と、科学と文化の分野での両国間の交流に大きな注意が払われている。これらの問題を取り扱っている論文では、日本との多面的な交流の拡大をめざすソ連の国家機関と社会団体の積極的な活動が述べられ、ソ連諸民族との友好と協力にたいする日本の一般大衆の志向や世界で最初の社会主義国の歴史、科学、文化にたいする広範な日本の世論の関心の高まりが示されている。

論文集の最後を飾っているのは、日本におけるソ連研究にかんするM・クルピャンコの論文とソ連における日本学にかんするG・ポドパロワの論文である。G・ポドパロワの論文は、ソ連の日本研究家の業績についての系統的な展望としては初めてのものである。

『ソ連と日本』は半世紀にわたるソ日関係の多面的な分析をその内容としている。序文には次のように述べられている。「歴史的経験は、両国間の関係改善が極東での緊張緩和、国際舞台での日本の役割と権威の強化をもたらしたことを証明している。反対に、この道に障害をつくろうとする…どんな試みも、極東での緊張激化、日本の国際的権威の低下をもたらしたのである」

モスクワ日本語放送の時間と周波数（1978年4月20日から9月2日まで）

放送時間（日本標準時）	17.00〜17.29	17.30〜18.14	18.15〜18.59	19.00〜19.29	19.30〜19.59	21.00〜21.29	22.00〜22.29	23.00〜23.29
周波数（メガヘルツ）	0.62 1.25 5.96 9.54 11.91 12.03 15.24 15.28	左に同じ	左に同じ	左に同じ	0.62 1.25 5.96 9.54 11.91 12.03 12.04 15.24	0.62 1.25 5.96 12.04 15.28 15.33	0.62 1.25 5.96 11.77 12.04 15.28 15.33	0.62 1.25 5.96 7.18 9.73 11.77 12.04 15.28 15.33



視察に来た福井県の婦人代表団を案内するビクトル・ルイチキン〝モスコフスキー〟ソフホーズ次長。

ソフホーズはソ日協会団体会員

今年創立20周年を迎えるソ日協会は、数十の団体会員（企業、団体、施設）を含む五〇万人以上の会員を擁している。ここにご紹介するソフホーズ（国営農場）〝モスコフスキー〟は、このような団体会員のうちの一つ。

このソフホーズはモスクワから南西へ数十km離れた所にある。ソフホーズの主要な任務は、モスクワ市民に新鮮な野菜とマッシュルームを供給することである。ソフホーズはその義務を立派に遂行している。ここにある温室コンビナートは、ソ連最大のものの一つ。コンビナートは五四万平方mの冬季用温室を持ち、そこで主にキュウリやトマトが栽培されている。ここからモスクワ市民は毎年約一万八〇〇〇tの温室野菜を受け取っている。

ソフホーズでは温室野菜栽培のほかに、酪農（約二〇〇〇頭の牛）と園芸（四〇〇haの果樹園と30haのイチゴ畑）もさかんだ。

ソ日協会を通じてモスクワへやってくる多くの日本のお客は、このソフホーズの生活を直接視察することができる。たとえば本誌でもすでに紹介したように（一九七七年第19号）、〝友情の船〟でやってきた福井県の婦人代表団もこのソフホーズを訪問した。親切な主人側のエブゲニー・ルイチン・ソフホーズ長、ビクトル・ルイチキン・ソフホーズ次長、ソ日協会の活動家たちはお客を歓迎し、ソフホーズを見せ、自家製の食料品をご馳走した。

ソフホーズではいつも、お客が来る前にあらかじめ準備を整えておく。ソフホーズの事実上すべての青年男女が参加しているアマチュア芸能集団は、日本の踊りと歌をマスターした。『モスクワ郊外の夕べ』と『さくら』は、ソフホーズでのソ日友好の夕べにとって欠かせない歌になっている。日本の若者たちがモスクワ郊外のこのソフホーズへお客に来ると、踊りや歌に先立って、世界のすべての青年男女が関心を持っているテーマで、長時間の内容豊富な座談会が開かれる。

一方、ソフホーズの多くの働き手も日本を訪問し、温室栽培がどのように行われているかを視察した。経験と知識の交換は成果をあげている。たとえばソフホーズ〝モスコフスキー〟では現在、生産力の高い日本産キャベツをかなり成功裏に栽培しているが、その種はソフホーズの働き手が日本から持って来たものである。

日本を訪問した同僚によって準備される写真展の開催、かれらとソフホーズの働き手との会合、日本で見たことについての話は良き伝統になっている。

ソフホーズ図書館の一室には、日本にかんする文献を乗せた陳列だなが置かれている。そこにはソフホーズを訪問した日本のお客から贈られた品物や土産品がある。

今年の3月、このソフホーズでソ日協会の活動家会議が開かれた。ソフホーズ長でソ連最高会議代議員、ソ日協会理事のエブゲニー・ルイチンは昨年度の活動家の仕事を総括し、日本からソフホーズあてに寄せられた最近の手紙を集会参加者に紹介し、最近の日本訪問中に行われた会合について語った。活動家会議ではソ日協会理事候補者が推薦された。

1 この顔からすると、ここのトマトは見事〝合格〟。

2 ソ連最大級のこのソフホーズの温室は、面積54万平方m。

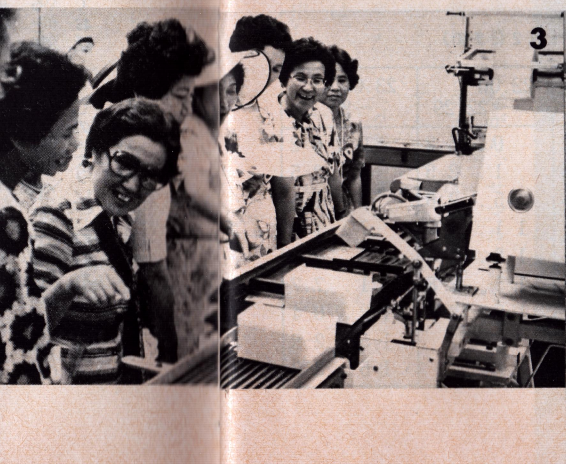
3 最後の工程――包装作業。こうして箱詰めされたマッシュルームはモスクワへ出荷される。

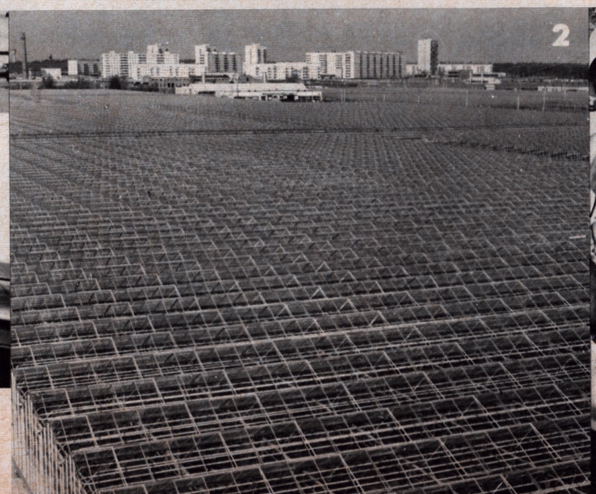
4 ここで毎日マッシュルームが収穫される。

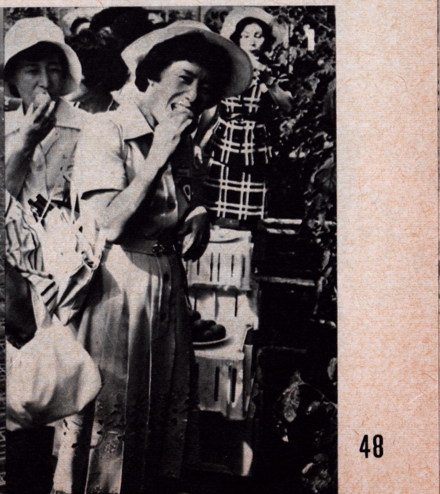
5 ソ日協会の活動家たちに、自分たちのソフホーズの記事が載った『今日のソ連邦』誌を見せるエブゲニー・ルイチン〝モスコフスキー〟ソフホーズ長。













チモフェイ・グジェンコ・ソ連海運相

海国ソ連の商船隊

——グジェンコ・ソ連海運相に聞く

ソ連は海国である。ソ連の領土は12の海にかこまれており、海の国境の長さは約5万km、陸の国境の2倍以上ある。

本号では、ソ連の商船隊とその発展の見通しについてチモフェイ・グジェンコ・ソ連海運相に話してもらった。

チモフェイ・グジェンコは1918年、村の鍛冶屋の家に生まれた。1942年にオデッサ水運技術大学を、1951年にレニングラードの海洋船舶アカデミーを卒業。1942年にムルマンスク商港で技師として活動を始めた。1966年にソ連第一海運次官に任命され、1970年に大臣になった。

T・グジェンコはソ連共産党中央委員であるとともにソ日協会理事長でもある。

自動車、鉄道、航空などによる運輸の急激な発展にともなって、こんにちでは旅客、貨物ともに、商船隊の規模は縮小しているのではないでしょうか？

——反対です。商船隊はこんにち、人と貨物のますます重要な輸送手段となっています。現代の科学技術の発展水準が、海洋運輸手段と港湾施設を最も進歩的な方向で改善することを可能にしています。

ソ連の現在の商船隊は、トン数においても積荷積載量においても世界有数の地位を占めています。ソ連の商船隊は、ほとんどすべての基本的な型の約二〇〇〇隻の船舶から成っています。その総積載量は一六〇〇万tを超えます。商船隊は年間二億一四〇〇万t以上の貨物と約五〇〇〇万人の旅客を運んでいます。

第10次5ヵ年計画（一九七六—一九八〇年）では、船舶輸送は25％成長することになっています。外国航路の輸送の伸びは約33％。総積載量は二〇〇〇万tを突破します。

ソ連商船隊の近代化の問題に読者は関心を持っていると思いますが、これについてお話しいただけませんか？

——ソ連の商船隊はすでに、科学技術の粋をあつめたスーパータンカー、一〇万t級の石炭・鉱石輸送船その他の船舶を使用しています。建造中のすべての船舶が自動操縦装置を持つことになります。しかもなお商船隊の改良作業はつづけられています。商船隊の最も進歩的な発展方向は、船舶のいっそうの専門化ということでしょう。たとえばコンテナ輸送船は2倍に増え、〝ローロー〟船は2倍半に増えます。ローロー船は、ご存じのように、フェリー形式で船尾が開き、岸壁に橋を渡し、フォークリフトなどの荷役機械がそのまま船内に入って作業できるきわめて便利な船です。

経済的効率が非常に大きいラッシュ船も現在の5ヵ年計画期間中に就航します。

ラッシュ船は独特の母船で、貨物を積んだ大型のはしけや浮きコンテナをそのまま積んで運ぶことができます。これらのはしけや浮きコンテナには重量一三〇〇tに達するものもあります。こういうはしけは、積み込みや荷揚げを港に寄らずに直接に海で行うことができるし、また航路から遠くはなれた地点、つまり海洋船が寄港することができない内陸の河港でもできるという点で便利です。また工場や貿易機関所属の岸壁にじかに接岸することができます。

前途有望な新機軸がもう一つあります。それは安く、速く建造できる〝連結船〟のことです。これは2—3隻のはしけと、これを押す押船とを連結したプッシャー・バージ方式と呼ばれるものです。すでにことし、アムール川下流地方とソ連極東のその他の港から、プッシャー・バージ船が日本の港に木材の輸送を開始します。さらに、強力な大型鉄道フェリーがあります。これは三層甲板の船で、一六〇tの鉄道車両、自動車その他の技術設備を運ぶことができます。

客船では、こんごどんなものが補充されますか？

——新しい設計で建造された貨客船が海洋航路にすでに姿を見せています。これらの船は三五〇人の旅客と二五〇台の自動車を積むことができます。いまポーランドでは、自動車四一六台、一五〇台をそれぞれ積むことのできるソ連向けの新型船が建造されています。このなかには、一九八〇年オリンピックのためにタリン＝ヘルシンキ間を航行する専用船もふくまれています。

港湾施設の改修についてはどうでしょうか？

——港湾もますます専門化されており、最新式の技術設備によって装備されています。これによりコンテナ船その他の型の船の積荷を、直接港域内で迅速かつ全面的に処理するのに必要な条件がつくり出されています。

たとえば、極東のウランゲル湾に建設中のウォストーチヌイ港には、一時間に二〇〇〇tの石炭を処理する総合施設が出現します。この港では、ソ連で初めての工業用チップ積み換え用の機械化装置が作動します。

各バースには、生産性の高い技術設備が絶えず補充されています。荷役作業はすべて機械化が進行中です。今後数年間に延べ数十万平方mの倉庫が建設されます。

外国との接触は、ソ連の商船隊の活動のなかでどんな位置を占めているでしょうか？

——こんにちではソ連国旗をかかげた船舶が、一二三ヵ国の一四〇〇以上の港に年間およそ三万三〇〇〇回寄港しています。ソ連は26ヵ国との間で二国間の政府間協定を結んでいます。そして商船隊は全輸送量の半分以上を国際線で輸送しています。また、「川—海」混合航行をする船舶が欧州、アジア、アフリカの二五〇の港に貨物をとどけています。

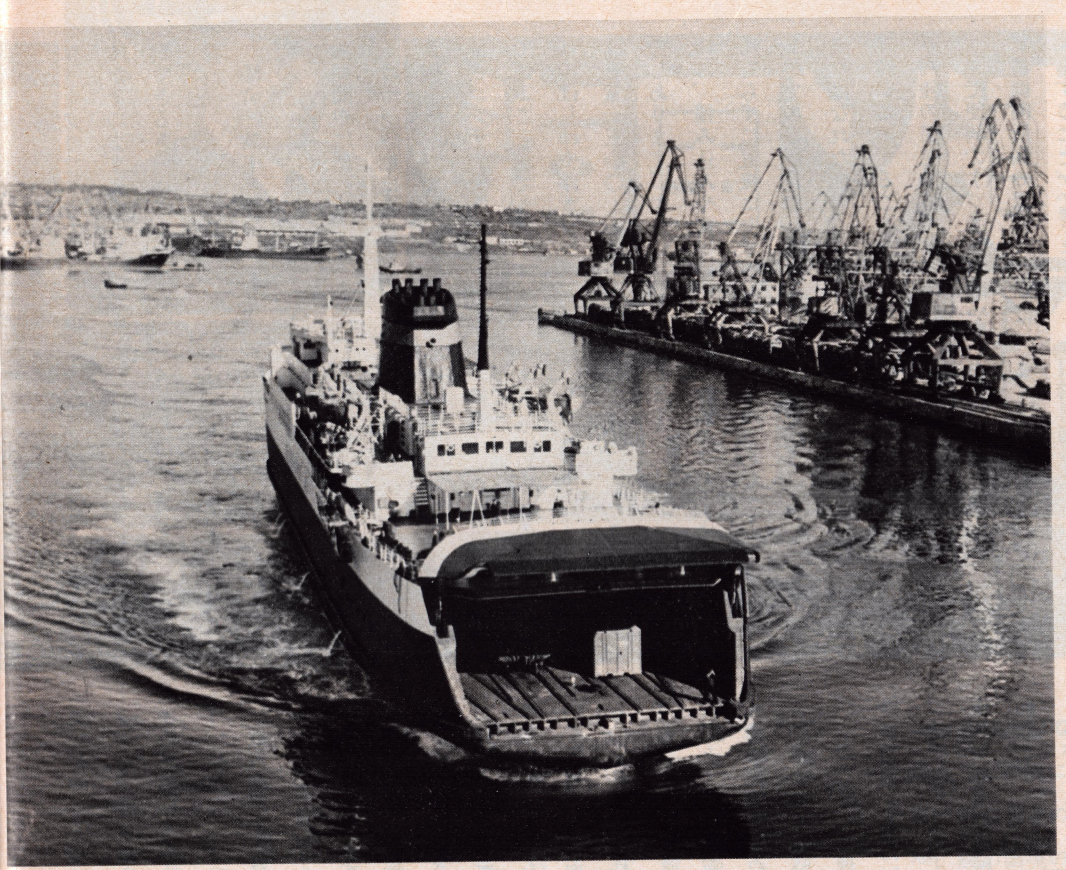
ソ連の商船隊は外国との互恵的協力を重視しています。ソ連の各海運公社は、他国の船主たちと同等の資格で国際海運に参加しています。

世界の海運問題でソ連が立っている見地はどのようなものでしょうか？

——言っておかねばなりませんが、わが商船隊の目的は、まず第一にわが国の輸送上の必要を満たすことです。もちろんソ連の商船隊は、他国の商船隊と同様、外国の顧客の積荷の輸送にも参加しています。しかしこの種の輸送量は、すでに長年にわたってほぼ一定の水準にとどまっています。海運をも含めた現代の国際分業は、平等かつ公正な競争という条件のもとでのみ形成されるものと私は確信しています。ソ連の海運公社はたとえば公定運賃を値引きして、これをひそかに荷主にリベートするといった違法な競争方法に訴えるようなことはしていません。

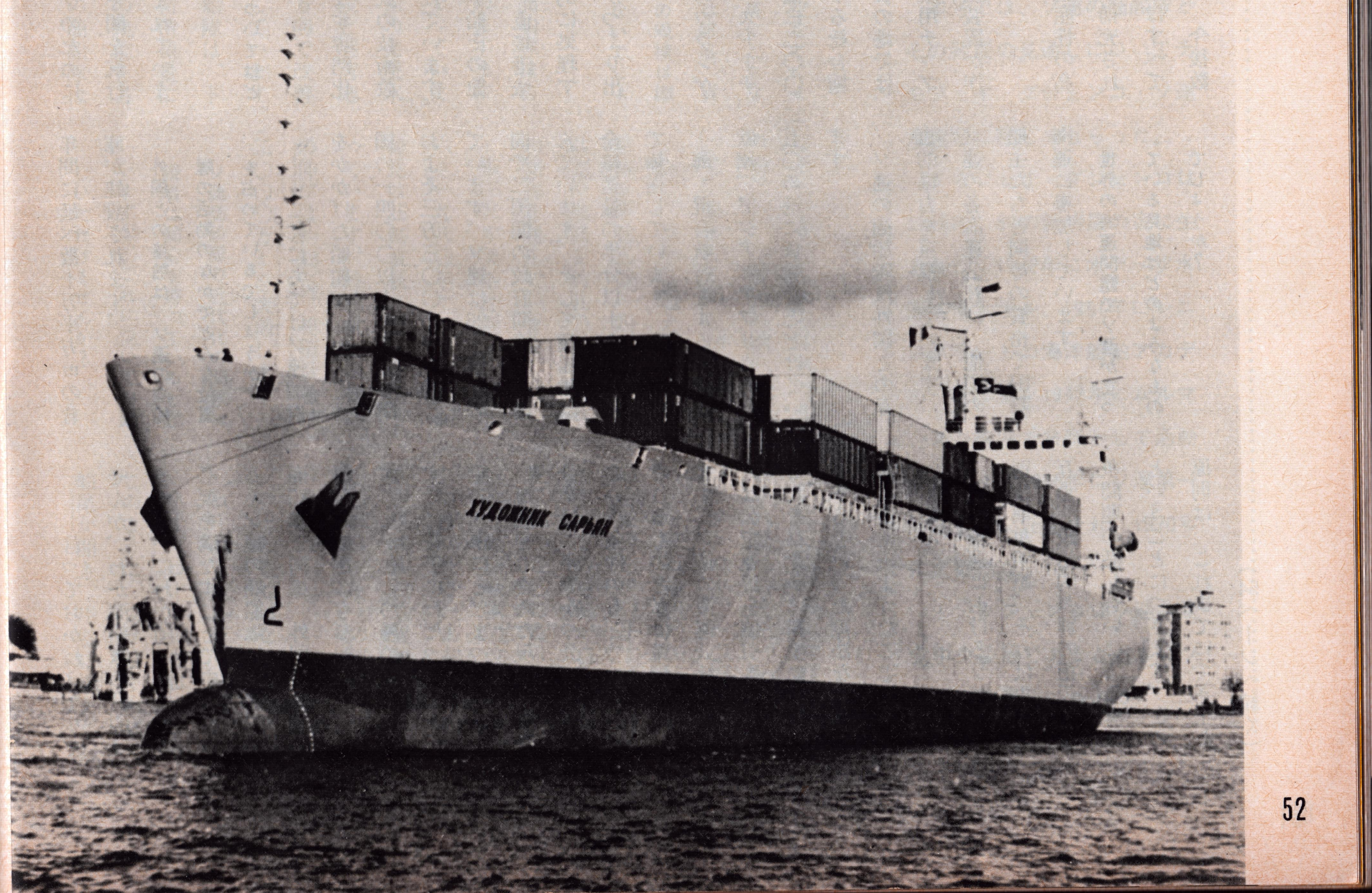
国際海運におけるソ連の原則は簡単明瞭。それは平等と互恵、政治的差別の拒否、論争問題の話し合いによる解決ということにつきます。この原則は、これまでにでき上が

（54ページへ続く）



▼コンテナ船〝美術家サリヤン〟号。アルメニア共和国の有名な画家マルチロス・サリヤンの名にちなんで命名された。

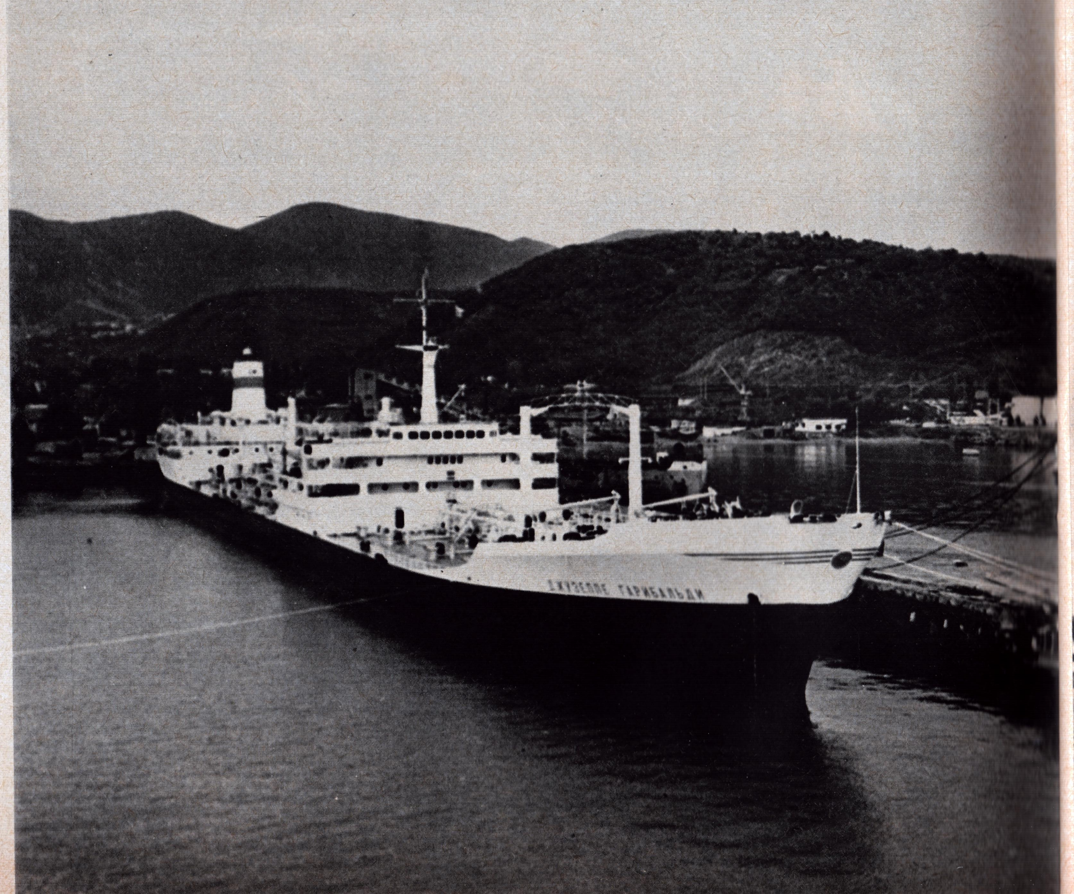
◀ソ連で建造された〝サハリン〟型砕氷鉄道フェリー5隻のうちの1隻。全長一二七m、幅約二〇m、時速約18ノット。5隻とも本土のワニノ港とサハリンのホルムスク港のあいだを連絡している。





▲バルト海にのぞむラトビア共和国の首都リガの港で荷役中のローロー船。バースに直接、橋を渡して貨物を積み降ろしできるのが強み。

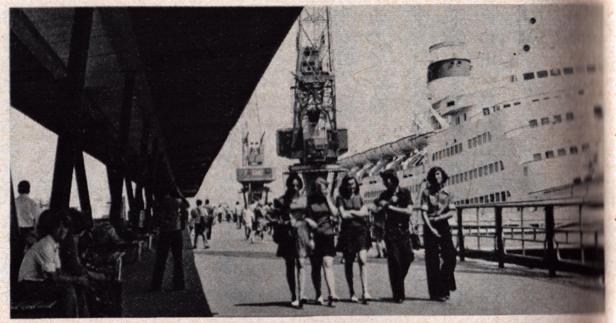
▶ソ連の大型タンカー〝ジュゼッペ・ガリバルジ〟号



っている協力の実際と、相互に関心のある問題にかんする協議のなかで十分に確認されています。たとえばわが国と日本、インド、ベルギー、イタリア、フランス、スウェーデンその他の国々との接触は、このような原則にもとづいて確立されています。私はこの原則が世界海運における相互関係の健全化を促進していると見ています。

本誌の読者にたいして何かご希望は？

――すべての人間の生活は多かれ少なかれ海上の道とつながっています。われわれはだれでも船に乗って旅をすることがありますし、また船によってとどけられた物資を消費しているからです。だから私は人々と船舶に最も幸運な航海を望みたいと思います。



黒海のオデッサ港はソ連の貿易の〝南ロ〟。さまざまな国旗を掲げた船がバースに係留中。



日本海に面したウォストーチヌイ港のコンテナ・ターミナルは毎月五五〇〇個のコンテナを積み換えている。次のコンテナ船がターミナルに到着した。



機械化された現代の港。貨物の積み込みの最中だというのに、人影がほとんど見られない。

海洋の富と人間

ジルムンスキー科学アカデミー準会員にインタビュー

アレクセイ・ジルムンスキー・ソ連科学アカデミー極東学術センター海洋生物学研究所長、ソ連科学アカデミー準会員に海洋の資源と人間の関係について聞いてみた（聞き手——アレクサンドル・ハリコフスキー・ノーボスチ通信記者）。

たいていの人は海洋の富と言うと、まず第一に魚族資源のことを考える。しかし海洋の価値は魚だけではないと思うが……

——魚は海中に生息する生物の中でごく小さな割合しか占めていない（重量でわずか数%!）。それにもかかわらず魚類が世界の漁獲量の$\frac{9}{10}$を占める。最も栄養豊富な海の生物の膨大な量が、今の所まだ人類の食卓に供せられていない。

たとえば、比較的最近オキアミを漁獲するようになった。オキアミはほとんど純粋なたん白質で、鯨の主要な餌である。もちろん鯨が食べるオキアミをとるよりも、鯨をもりで捕らえる方が簡単である。しかし鯨類や魚類はオキアミを食べるが、その食べた量の$\frac{1}{10}$しか自分の体の成長に使っていないのだ。人間の手に入った鯨と魚は、それら自身が消費したものの10%しかもたらさないということになる。残りは人間にとって永遠に失われてしまうのだ。

昔からの魚への慣れはどうなるのか?

——もちろん、好みについては議論をしても始まらないが、しかし人類が今後も魚だけを海洋でとらねばならぬということはないだろう。おまけに、魚への〝傾倒〟はけっして魚族資源を増やすことにはならない。

一九六六年にモスクワで開催された第2回国際海洋学会では、海洋の動物界に損害を与えずに世界の漁獲量を倍増することができるか、という問題が論議の中心になった。専門家たちは、それはできない、なぜならもし何らかの種の数が一定の水準以下に落ちると、その種は生存することができなくなるからだという結論を出した。このときの計算では、魚族資源の人工的回復なしに世界の海洋から得られる漁獲量はどうしても八〇〇〇万—一億t止まりだということだった。ちなみに一九七六年の世界の漁獲量は七〇〇〇万tだった。

もし漁民が漁獲量を増やせば、何が起こるだろうか?

——海洋では取り返しのつかない事態への変化が起こるだろう。実を言えば、その変化はすでに起こっている。ニシンでさえ珍味になるのではないかと私は心配している。大西洋ではニシンはほとんどとりつくされ、極東にもきわめて少ししか残っていないので、一部の水域では魚獲が禁止されている。

それぞれの種は〝自分の〟生態学的な場所を占め、自然の敵との闘争でその場所を守っている。その種を弱め、その場所から追い出せば、通常われわれにとってあまり貴重でない他の種がその場所を占める。たとえば人間がニシンの魚群と縁を切った水域はスケトウダラによって占められた。

だから必要なのは新しい養魚場の建設だけではない（養魚場はクリール諸島やサハリンに多い）。魚の自然保存と人工養殖との間に必要な比率を見出さねばならない。

海洋の生物資源の人工的回復のためにあなたの研究所で行われている研究についてお話し願いたい。

——極東学術センター海洋生物学研究所で行われている調査活動は、実際的な利益をもたらしている。二つの例だけを挙げよう。遺伝学実験室では、シロザケの遺伝的差異は産卵する川の違いで見られるだけでなく、同じ川でも、遡(そ)上する時期の違いによっても個体間に差異のあることを突き止めた。言い換えれば、同じ川に来る魚群は遺伝学的に一様ではない。〝前衛〟として早くやって来たシロザケは、〝後衛〟の魚とは違っている。それにどんな意味があるのかと思われるだろう。少なからぬ意義があるのだ。以前は魚群の遺伝的差異を知らなかったため、養魚場では魚群の先頭部分からだけ養殖用の個体をとっていた。したがって親魚の遺伝形質を限定していたわけだ。現在ではわれわれの勧告に従ってサハリンの各養魚場は養殖技術を改めた。今度は魚群の先頭部分と最終部分の親魚を25%、中間部分から50%とっている。

第二の例は、魚の養殖ではなくて、海の他の生物の養殖である。ポシエタ湾には工業用実験養殖場があって、ベテランの専門家が海洋生物学研究所の研究員と緊密に協力してホタテガイの人工養殖実験を行っている。ナマコ漁が行われている唯一の場所ポポフ島では、すでにナマコの人工養殖に取りかかった。

栽培漁業はとくに将来性のある部門である。イタリアの小さな州に匹敵する面積の海底牧場があれば、その収穫でイタリア国民を十分に養えるという計算がある。世界の浅瀬と大陸ダナは、もし一ヵ所に集めれば、面積でヨーロッパに匹敵する水中大陸ができ上がるほど沢山ある。もちろん集めることはできないが、利用することはできる。

しかし、海洋開発のすべての計画を疑問視させる危険——水質汚濁があるが……

——これは実際、重大な問題である。概算によると、すでに現在、汚染の結果、海洋から供給される生物生産物は年間二〇〇〇万tも少なくなっている。

しかしもう一度繰り返すが、海洋の富はいわば食べられる資源だけではない。その深部には石油を含む有用鉱物の膨大な埋蔵量が秘められている。

どうしたらよいだろうか? 海洋の起こりうる汚染問題におじけづいて、地上の鉱層が掘りつくされたら、エンジンを止めるべきか? 人間は海洋の宝庫を放棄することはできない! 人間はその宝庫を手に入れなければならない。だがどんな犠牲を払ってもではない!

海底の石油や有用鉱物の代価を水域の汚染で支払うことはできない。原料をただ求めるだけではなく、石油の探鉱も、その採掘も海の環境にとって安全なものとなるようにあらゆる措置を講ずることが必要なのだ。



（カット　I・ネチャエフ）

トピックス

婦人船長に労働英雄の称号

世界で最初の、遠洋航海船の婦人船長アンナ・シチェチニナさんに、ソ連最高会議幹部会から社会主義労働英雄の名誉称号が授与された。この称号は、労働において特に功績のあった人にたいするソ連最高の報賞である。

他の船長たちと同じく、アンナさんも、水夫から航海士までの道を歩んできた。極東のアムール湾にのぞむオケアンスカヤ町に育った彼女は、子どものころから海に魅せられていた。1925年、アンナさんは見習い甲板員として第一歩を踏み出した。1934年には、航海学校を卒業して遠洋航海船の船長資格を取った。

戦争中、アンナさんはバルト海で働いたのち、極東船舶公社の船の船長をして米国とカナダに危険な航海を敢行した。〝ジャン・ジョレス〟号だけでも、アンナさんは米国西岸の港に17回も航海している。戦功勲賞を3回授与された。戦後、アンナさんは、レニングラード商船大学の学部長を勤めた。

現在、アンナ・シチェチニナさんは、極東船舶公社の指導船長として働いている。この地位にある経験豊富なベテランたちは、〝船長の船長〟と呼ばれている。アンナさんは、その中でも最高の一人である。

創刊20周年記念
愛読者クイズ
あなたはソ連をご存知ですか？

愛読者のみなさん！

『今日のソ連邦』創刊20周年を記念して、愛読者クイズ『あなたはソ連をご存知ですか？』を行うことになりました。

問題は全部で10問ありますが、本誌の読者のみなさんにはもちろん、日本の隣国ソ連について多少とも関心のある方ならどなたにでも、簡単に答えられるものばかりです。

正解者には次の**賞品**を用意しております。

1等（1名） ソ連製トランジスタ・ラジオ。

2等（2名） パレフ塗り民芸品または民芸風打ち出し銅細工。

3等（5名） サモワール、ソ連製腕時計、コハク製品、ホフロマ塗り民芸品のうち、1点。

奨励賞（10名） 民芸品、レコード、アルバム、『今日のソ連邦』誌1年分送料当方負担のうち、1点。

答えは、問題のあとにあるカッコの中から正しいと思うものを選んで下さい。

第1問 今年の秋ソ連では、発達した社会主義国ソ連の主要な成果を確認した新憲法の採択1周年を迎えます。新憲法採択のこの日は、今年からソ連国民の祭日（休日）になります。

現行の新ソ連憲法が採択された月日は？（①9月1日、②10月7日、③11月7日、④11月19日、⑤12月30日）

第2問 写真3をご覧下さい。この人はソ連邦英雄（2回）のソ連の宇宙飛行士です。

この人は一九六五年3月に、史上初めて宇宙船ウォスホード2号の船外に出て〝宇宙遊泳〟を行い、一九七五年7月には、ソ米共同宇宙実験に参加して、宇宙船ソユーズ19号の船長として2度目の宇宙飛行を行っています。

現在ソ連宇宙飛行士養成センターの副所長をしているこの人の姓は？（①シャタロフ、②チトフ、③レオノフ、④ベレゴボイ、⑤ニコラエフ）

第3問 一定の年齢に達し、一定の期間（男性25年、女性20年）働いたソ連国民は、年金を受け取る権利があります。男性と女性はそれぞれ何歳に達すれば、この権利が与えられるでしょう？（①75歳と70歳、②70歳と65歳、③65歳と60歳、④60歳と55歳、⑤55歳と50歳）

第4問 今年8月、東シベリアの大工業中心地が創設三五〇周年を迎えます。エニセイ川にのぞむこの河港都市には、機械工業、化学工業が集中しており、アルミ工場やパルプ・製紙コンビナートも建設されています。この都市の人口は七七万人。七つの大学と四つの劇場、一つの美術館があり、近郊にはこの都市と同じ名前の、現在操業中の世界最大の水力発電所もあります。

A この都市の名は？（①ブラーツク、②トボリスク、③イガルカ、④クラスノヤルスク、⑤アバカン）

B 同名の水力発電所の出力は？（①四五〇万KW、②五六〇万KW、③六〇〇万KW、④六四〇万KW、⑤六八〇万KW）

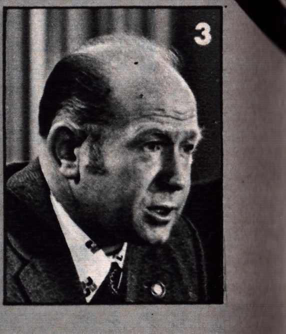
第5問 バイカル湖には多くの特徴があります。たとえば、この湖に注ぎ込む川は三三〇本以上もあるのに、この湖から流れ出る川はたった一本しかない、というのもその一つです。

A バイカル湖からただ一本流れ出ている川の名前は？（①セレンガ川、②レナ川、③キーレンガ川、④エニセイ川、⑤アンガラ川）

B この川にある（建設中のも含めて）水力発電所は？（①イルクーツク水発、②ブラーツク水発、③ボグチャヌイ水発、④ウスチイリムスク水発、⑤クラスノヤルスク水発、⑥サヤン・シューシェンスコエ水発⑦ビリュイ水発）







第6問 今年の9月9日はロシアの文豪レフ・トルストイ（一八二八—一九一〇）の生誕一五〇周年にあたります。トルストイがそこで生涯の大部分を過ごし、そこで『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』が書かれ、そこにトルストイの墓がある（写真2のように記念館もある）その場所の名前は？（①ヤースナヤ・ポリャーナ、②スパスコエ・ルトビノボ、③ミハイロフスコエ、④トリゴルスコエ、⑤メリホボ）

第7問 写真1はモスクワの創設者の記念碑です。このロシアの公は、一一四七年にモスクワ川の湾曲部に最初の木造の要塞を築き、それが現在のモスクワのもととなりました。

A このモスクワの創設者の名前は？（①ヤロスラフ賢公、②ボリス・ゴドゥノフ、③ユーリー・ドルゴルーキー、④イワン雷帝、⑤ピョートル一世）

B その記念碑が立っている場所は？（①赤の広場、②ボリショイ劇場わき、③レーニン丘、④ソビエツカヤ広場、⑤マルクス広場）

第8問 日本とちがって、ソ連では新学年は4月1日に始まるわけではありません。ソ連で新学年が始まるのはいつですか？（①1月1日、②3月1日、③5月1日、④9月1日、⑤12月1日）

第9問 ソ連には世界最高峰級の山がいくつかあります。

A ソ連にあるもっとも高い山の名前は？（①エベレスト山、②エルブルース山、③レーニン峰、④カズベク山、⑤コムニスト峰）

B その標高は？（①七一三四m、②七四三九m、③七四九五m、④七六九〇m、⑤八八四八m）

第10問 現在、ソ連と日本のあいだには、17組の姉妹（友好）都市があります。

17組の姉妹都市は次のどれですか？（①ミンスク=神戸、②リガ=秋田、③ナホトカ=舞鶴、④ハバロフスク=新潟、⑤ウラジオストク=仙台、⑥オデッサ=横浜、⑦ナホトカ=小樽、⑧イルクーツク=金沢、⑨ノボシビルスク=札幌、⑩ボルゴグラード=広島、⑪ユジノサハリンスク=旭川、⑫スベルドロフスク=函館、⑬ブラーツク=七尾、⑭キエフ=京都、⑮ヤクーツク=室蘭、⑯ウランウデ=留萌、⑰ポロナイスク=北見、⑱ネベリスク=稚内、⑲ハリコフ=北九州、⑳ミンスク=仙台、㉑リガ=神戸、㉒レニングラード=大阪、㉓タリン=富山、㉔ホルムスク=釧路、㉕シェレホフ=根上、㉖ウォストーチヌイ港=敦賀）

なお、クイズの回答のほかに、『相互理解は知識を通じて』というようなテーマで、読者のみなさんのエッセー（随想、一五〇〇字以内）を募集します。これは、クイズ応募の必須条件ではありませんので、希望される方だけで結構です。しかし、全問正解者が多数の場合には、エッセーをお寄せになった方のほうが、入賞の確率が高まるでしょう。

このようなエッセーを募集するのは、日本国民とソ連国民が互いによく知り合えば知り合うほど、相互理解もいっそう容易になるという事実があるからです。このような事実は、みなさんの個人的な体験からもうなずけるでしょう。たとえば、日本へ来たソ連の旅行者と話をしたとか、ソ連へ旅行に行ったとか、ソ連経由でヨーロッパへ行ったときのこととか、ソ連を旅行した知人の話とか、ソ連の映画やテレビを見た人が書いている本の話とか、ソ連の現実やソ連国民の気質を理解する助けになった出来事ならなんでも結構です。エッセーにしてお寄せ下さい。

回答（随想ともに）の**締め切り**は一九七八年9月15日（当日消印有効）。**回答は封書で**、お一人一通にかぎります。回答には問題の番号（問題がさらにA、Bと分かれている場合にはそれも）と答えの番号のみお書き下さい。設問や答えの文章は不要です（回答例——第〇問、A〇、B〇）、回答用紙には必ず、氏名（ふりがな）、年齢、性別、職業、住所、電話番号をお書き下さい。

回答の**あて先**は、東京都品川区東五反田3—9—13（〒141）ソ連大使館広報部『今日のソ連邦』クイズ係。**結果の発表**は、本誌一九七八年11月1日号の予定です。

みなさんの回答をお待ちしています。ふるってご応募下さい。

東京でソ連船の起工式



しゅんせつ船の起工式のあと、起工を確認する文書に調印する両国関係者。

3月17日、東京の石川島造船化工機株式会社でソ連が発注した海洋吸い上げしゅんせつ船の起工式が行われた。このしゅんせつ船は総トン数二一三一t、しゅんせつ能力一〇〇〇立方m、しゅんせつ深度一二m。全ソ船舶輸入公団が石川島播磨重工業に注文したもので、建造は石川島播磨重工業グループの石川島造船化工機が担当する。

12時30分。両国の国歌吹奏裏にソ連と日本の国旗が掲揚された。溶接準備の命令が出される。M・ジャルコフ駐日ソ連通商代表代理と松山泰・石川島造船化工機社長が自動溶接制御盤へ近付き、同時にボタンを押す。船台で火花が散った。この最初の溶接で新しい船の建造が始まった。日本側、ソ連側関係者の間で友好的な握手がかわされ、たがいに成功裏に建造が完了することを祈った。

根本広太郎・石川島播磨重工業常務取締役は新船起工の祝賀レセプションで次のように語った。「ソ連が私たちの会社にシリーズ船の発注をふたたび割り当てたことを私たちは大変うれしく思っています。これはすでに、ソ連の専門家が稼動性能を高く評価している"カムチャツキー"、"アムール"、"ゼヤ"型船シリーズの四番目のしゅんせつ船です。私はKS協定によって両国間で実施されている互恵協力が今後も発展することを確信しています」

この商談を仲介した協邦通商株式会社を代表して、松田滋夫・同社社長は次のようにあいさつした。「たとえて言いますと、私たちは全ソ船舶輸入公団と石川島播磨重工業という良き両親を持った子供の誕生に立ち会っているわけです。私たちは、この分野でのソ連との協力に5年の経験を持つ仲介商社として、互恵関係の強化をお手伝いできることをたいへんうれしく思っています」

近年、全ソ船舶輸入公団と石川島播磨重工業との間の関係は急速に発展している。ソ連の発注によって同社は10隻のタンカー、10隻のクレーン船、2隻の河川用吸い上げしゅんせつ船と1隻の海洋吸い上げしゅんせつ船を含む24隻の船舶を建造し、発注者に引き渡した。現在も大きな浮きドックが建造されている。

起工式に出席したA・ポリャコフ・駐日ソ連大使館参事官は、両国間の貿易・経済関係の発展の意義を強調して、次のように述べた。「ソ日両国間の協力は相互理解の深化と友好関係の強化をもたらしますが、ソ連国民はこの協力が発展していることを高く評価しています。私たちの共通の課題は、これらの関係の強化を促進することにあります。結局、そのことが新しい経済協力分野の出現をもたらすのですから」

（V・タラネンコ）

トピックス

モスクワ五輪の聖火

80年モスクワ・オリンピックの開会式前日（7月18日）、ギリシャからブルガリアとルーマニアを経て運ばれてきた五輪聖火を迎える盛大な式典が行われる。

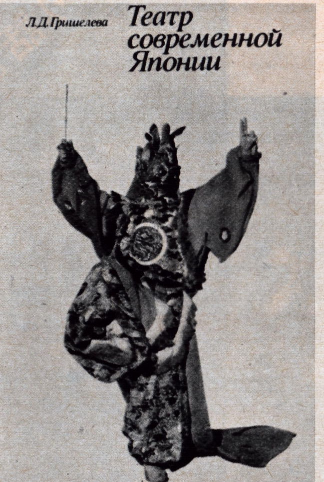
全長三〇〇〇kmの聖火コースはすでに決定ずみで、リレーの準備が開始されている。

五輪聖火は伝統によってオリンピアの地で太陽光線から点火されている。これはもう、各大会前の恒例の儀式になっているが、その輸送方法となるとさまざまだった。これまで聖火は自転車、オートバイ、自動車、船、飛行機で運ばれた。レーザー光線の助けを借りて運ばれたこともある。

モスクワ大会ではオリンピックの伝統を復活させることに決まった。聖火ランナーたちは昔通りに一時間12kmのスピードで走り、名誉護衛隊が自動車で伴走する。

一九八〇年7月19日、聖火はレーニン・スタジアムに現れ、数分後、聖火台に燃え上がって、オリンピックの開会を告げる。

日本の演劇にかんする新著



L・グリシェリョワ著『現代日本の演劇』の表紙

最近、モスクワの「イスクーストボ」（芸術）出版所から、東洋芸術の専門家であるリジア・グリシェリョワ文学博士候補の著書『現代日本の演劇』（発行部数二万五〇〇〇部、定価1ルーブル70コペイカ、二三八頁）が出版された。日本演劇のいろいろなジャンルについて書かれた本は、ソ連で数多く出版されている。この著書では、ソ連芸術学において初めて、現代日本の演劇界全体の動向が示されている。

日本の演劇がすべての外国の演劇研究家や歴史家の興味を引いているのは、なによりもまず、そこに民族的独自性がはっきりと現れているからである。著者は最も有名なプロ劇団、その主要なジャンル、傾向、上演目録に注意を集中している。

本書は、伝統的な演劇である舞楽――著者に言わせると、日本演劇芸術の最も初期の、最もエキゾチックな模範――についての話から始まっている。同じ章でグリシェリョワは、能や寄席や16世紀の人形劇も説明している。ソ連の読者はこれらのジャンルの形成と発展を、順を追って、詳細に知ることができる。

次の章は歌舞伎について――その発展の歴史、個々の出し物、役者、劇場をとりあげている。著者は男女登場人物のメーキャップの特徴、歌舞伎によって集成された所作や動作の体系、立ち回り等を詳細に述べている。

グリシェリョワは歌舞伎を、幾世紀にもわたる日本演劇文化のすべてのすぐれたものを取り入れている、日本伝統芸術の主要なジャンルとして評価している。

歌舞伎の最初の外国公演は、周知のように、一九二八年にソ連で行われた。そのときの出し物は、『修禅寺物語』『三番叟』『娘道成寺』その他を含む三種類のプログラムだった。公演はソ連の観客の間で非常な人気を呼んだ。一方、日本の俳優と演出家はモスクワの劇場を見物したり、歌舞伎を高く評価していたソビエト演劇の創始者コンスタンチン・スタニスラフスキーや有名な映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインと会った。

著者はこのジャンルの分析を続けながら、歌舞伎の脚本がどのように作られるか、そこでの劇作家、俳優、演出家の役割がどのようなものかについて述べている。著者はソ連の読者に、歌舞伎が上演される劇場の内部や芝居に必要な舞台装置と観客席の設備を紹介している。

最後の第3章は、明治維新後に日本に現われた新しい演劇ジャンル、たとえば、新派、新国劇、新劇、それにヨーロッパから取り入れたバレエ、オペラ、レビュー等に割かれている。

「新派のジャンルはメロドラマとして定義することができる」と、グリシェリョワは書いている。「新派は歌舞伎の芸術手段やヨーロッパ・タイプの現代劇の手段を用いる。しかしこれらの手段の有機的な融合は起こらなかった。これらの手段は折衷的に共存している。新派は歌舞伎と新劇の間にある中間的な演劇ジャンルと呼ぶことができる」

グリシェリョワは新国劇についても簡単に説明している。新劇の現状はすべての演劇研究家の間に多くの論争を呼び起こしている。著者は近年新劇諸劇団の活動がかつてなかったほど活発になったと考えている。いくつかの注目すべき脚本が現れ、新たな論争を呼んでおり、演出家や俳優の新しい名前が登場している。新劇の活動家は現代劇の発展の新しい道を探求しているが、その多くの探求は成功を収めている。

最後にグリシェリョワは、ソ日演劇交流に触れている。一九七〇年から一九七五年までの間だけでも、ロシアおよびソ連の作家の作品による演劇が、38本も日本の舞台で上演された。その中にはオストロフスキーの『才能とパトロン』や、チェーホフ没後70周年を記念して上演されたチェーホフの九つの戯曲のような有名な古典作品がある。

日本の劇場の舞台では現代ソビエト劇作家の戯曲も上演されている。ミハイル・シャトロフの『7月6日』（レーニン生誕一〇〇年祭によせて）、ボリス・ワシリエフの『朝焼けは静かなれど』、アレクセイ・アルブーゾフの『ターニャ』等のような戯曲の上演が、観客に温かく迎えられた。

日本ではソ連の大劇場――ボリショイ劇場、ゴーリキー記念モスクワ芸術座、キーロフ記念レニングラード・オペラ・バレエ劇場、シェフチェンコ記念キエフ・オペラ・バレエ劇場その他が定期的に公演している。

ソ連の振付師は日本の諸バレエ団とつねに交流を保っているし、演出家は日本での演劇の上演に参加しており、ソ連のソリストたちは日本の舞台に出演している。

リジア・グリシェリョワのこの新著は、演劇研究家や日本の芸術に関心を持つ広範な読者の注意を引いている。

作り話と現実

いわゆる〝ユダヤ人問題〟の真相

〝ユダヤ人問題〟は、ソ連にたいする〝ユダヤ人活動分子〟という術語と同様に、シオニストによって考え出された。このような〝活動分子〟の典型的な代表者として西側で最近まで有名だったのが、アレクサンドル・ウォロネリである。

西側世界を駈け回って、ソ連におけるユダヤ人の〝恐るべき差別待遇〟について講演しているこの48歳の元電波物理学者は、そのむかし、大学院を修了し、まず電波物理学分野での博士候補論文にパスし、やがて博士論文にパスした。そして教授の称号を得て、研究所の先任研究員として働いていた。

一九七二年3月16日、ウォロネリは〝本人の希望により〟（彼は研究所長への届け出の中で自筆でこう書いている）退職した。同年5月17日（日付に注意！）、ウォロネリは〝先祖の故国〟イスラエルへの出国申請を出した。彼は研究所で国家機密にかんする仕事に参加していたので、その出国は一時拒否された。ついでに言うと、このような拒否の合法性はソ連の国内法にも、しかるべき国際条約にも明記されている。拒否の回答を受け取ったウォロネリは、二つのウソを内容とする声明を発表した。その二つのウソとは、第一に、イスラエル行きを希望したために研究所での仕事を奪われたということ、第二に、あたかも彼の〝異端者的信念〟が責められているかのように言っていることである。これはすぐに西側のマスコミに取り上げられた。こうしてウォロネリは「ソ連におけるユダヤ人迫害のもう一人の犠牲者」として、西側の新聞の表題に初めて現れたのである。

機密保持の期間が切れた一九七四年12月に、ウォロネリはイスラエルへの出国を許可された。いまや彼は電波物理学の研究に没頭しているかと思われるだろう。だがソ連を出国してからの彼を引き付けているのは、研究所ではなくて、かれが「ソ連におけるユダヤ人の恐るべき運命」について講演する反ソ集会である。

ソ連国内のユダヤ人

ウォロネリの客観性の度合いをもっとよく評価するために、彼がつねに黙殺している資料を引用しよう。

——ソ連に住むユダヤ人には、他の諸民族の出身者と同様に、ある特別な身分または何らかの民族的特権や制限はない。ユダヤ人はソ連に住む一二〇以上の平等な諸民族の一つである。一九七〇年の国勢調査資料によれば、ソ連には二一五万一〇〇〇人のユダヤ人が住んでいたが、それはソ連の人口の1％弱である。

——一九三四年5月に政府の決定により、ソ連極東にユダヤ自治州が創設された。これは、この二〇〇〇年間における最初のユダヤ人国家組織である。この自治州の面積は三万六〇〇〇平方km。日本の九州よりやや小さい。人口は一九万四〇〇〇人で、州都はビロビジャン。このようにユダヤ人は、ソビエト国家の他の諸民族と同様に、初めて民族自決権を得た。しかし圧倒的多数のユダヤ人は大都市に住むことを希望し、大都市人口の3－4％（モスクワ、レニングラード、キエフ）から7－12％（オデッサ、キシニョフ）を占めている。

——ユダヤ民族の活動家はソ連閣僚会議でも、連邦構成共和国や自治共和国の政府、その他の国家機関や党機関でも要職に就いている。国家権力の最高機関であるソ連最高会議や連邦構成共和国最高会議、地方ソビエトの代議員の中には、約三万五〇〇〇人のユダヤ人がいる。

ソ連の科学者の間ではユダヤ人は5・7％、芸術家の間では5・2％、文学者やジャーナリストの間では6・5％、医療関係者の間では3・4％を占めている。

——一九七六－七七教育年度のユダヤ人学生数は、ユダヤ人一万人あたり三一〇人以上で、これはソ連の他の諸民族の場合よりもずっと多い。たとえば、一九七六－七七教育年度には、六万七〇〇〇人のユダヤ人がソ連の大学で学んだ。もちろんソ連よりもずっと多くのユダヤ人がいるイスラエルでさえ、一九七六－七七教育年度に四万八二〇〇人が大学で学んだにすぎないことを付け加えておこう。

——ソ連では現在、ユダヤ人一〇〇〇人あたりの高等教育修了者数は、世界のどの国におけるよりも多い。一九七五年のソ連におけるユダヤ人高等教育修了者数は、三八万五〇〇〇人だった。

——科学技術部門でのレーニン賞と国家賞の受賞者の中で、ユダヤ人はそれぞれ10・4％、12・4％を占めている。文学・芸術部門ではそれぞれ9・3％、11・5％である。

——祖国防衛で発揮した英雄的な精神と勇気にたいして、政治、経済、科学、文化の活動で収めた成功にたいして、約三四万人のソビエト・ユダヤ人が勲章やメダルを授与された。

——ソ連にはイディッシュ語で作品を書いている約70人の散文作家、詩人、劇作家が住み、働いている。彼らの作品は定期的に、大量に出版されている。たとえば、最近だけでも、イディッシュ語で書かれたユダヤ文学の古典作家や現代作家の本が総部数一六万部出版された。一九五五年から一九七〇年までに、ソ連では四六六点のユダヤ人作家の本が、15の民族語で、総部数四六〇〇万部出版された。一九六一年からモスクワでユダヤ人の月刊文芸誌『ソビエティシ・ハイムランド』（ソビエト祖国）が発行されている。

——ソ連ではいくつかのユダヤ人演劇集団や音楽集団（アンサンブル）が活躍している。たとえばモスクワ演劇アンサンブルやレニングラード市とチェルノフツィ市のユダヤ人音楽アンサンブルなどはひじように人気がある。一九七七年の夏には、ビロビジャン市にユダヤ人音楽センターが設立された。

——ユダヤ人信者は自由にユダヤ教の教会へ通い、ユダヤ教によって定められたあらゆる儀式を営んでいる。現在、ソ連には92のユダヤ教教会がある。すでにおよそ20年間、モスクワ・ユダヤ教教会に付属して教会の聖職者を養成する宗教学校が開設されている。

出国の自由について

わが国の当局はイスラエルへ出国しようと望んでいるユダヤ人にたいし何らの妨害も行っていない。たとえば一九四五年から一九七七年6月1日までに、子供を含む一四万一六〇〇人がソ連からイスラエルへ出国した。これは同期間の申請者総数の98・4％である。申請者の1・6％だけが一時的に出国を拒否された。このような措置は一九六六年12月16日の国連総会で採択された市民的権利と政治的権利に関する国際規約に完全に合致している。この条約は特に、「国家の安全、社会秩序、住民の健康または道徳性、または他人の権利と自由の保全」にかかわる場合に、自国から他国へ出国する市民の権利を制限することを認めている。

国家的機密となるような情報を持っている人物または最も重要な軍事専門技術の訓練を受けたばかりの者の出国の決定は、一定期間引き延ばすことができる。場合によっては、近親者が自分たちの関係、とくに物質的な関係を調整するまで出国問題の解決が見合わされる。当然のことながら、法廷で取り調べ中または服役中の者は出国を拒否される。出国拒否の決定は、申請者の要請により半年ごとに再審査される。たとえば一九七六年には、以前に申請が却下された七三七人の市民が出国の許可を得た。一九七七年の5ヵ月間にさらに六一五人がこのような許可を得た。

ソ連にあるかのように言われている〝ユダヤ人問題〟なるものは、実際にはこのようなものである。

トピックス

試験も波の上で

太平洋で操業中の母船〝アンドレイ・ザハロフ〟号の船上で、27人の漁船員に中等学校の卒業証書が授与された。創設されて12年になる通信制のこの漁船員中等学校では、卒業試験委員会は操業中の漁船員に、仕事から離れることなく試験を受けさせることができる。60人の教師はほとんど1年中、各漁船に乗り組んで、漁船員たちに授業をし、試験をする。

モスクワ——ロンドン間にバス路線開設

ソ連自動車輸送総局と英国のウォーレス・アーノルド社は、モスクワ——ロンドン間共同バス路線の開設にかんする協定を結んだ。この新路線はポーランド、ドイツ民主共和国、ドイツ連邦共和国、ベルギー、フランスを通過し、フランスのカレー港からフェリーで英国のドーバー港まで運ばれる。路線総延長は3000km余。バスはこれを3昼夜半で走破する。第1便はモスクワとロンドンをそれぞれ6月3日の夕刻に出発。当面は6月8、17、22日の3便が予定されているが、将来は週2便になる。

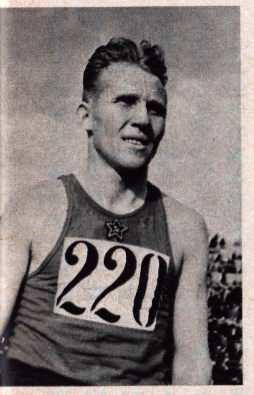
olympics-80

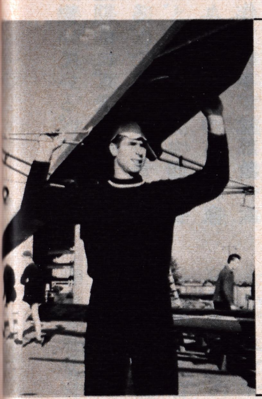
オリンピックとソ連選手 (2)

メルボルン大会（一九五六年）

一九五六年のメルボルン・オリンピックを前にして外国のスポーツ関係者やジャーナリストは、4年前のヘルシンキでソ連の選手が大活躍をしたところから、メルボルンではどんな活躍を見せるか、大いに注目していた。

ソ連の選手はメルボルンで金メダルを37個、銀を29個、銅を32個獲得し、非公式の国別得点計算では六二一・五点をあげ、米国を抜き第一位になった。チーム成績ではソ連勢は体操、サッカー、近代五種、ボクシング、レスリングのグレコローマン・スタイル、カヌー、射撃で一位になり、ボート、バスケットボール、レスリングのフリー・スタイル、陸上、重量あげで二位になった。


一万mと五〇〇〇mの長距離二種目を制覇したウラジーミル・クーツ

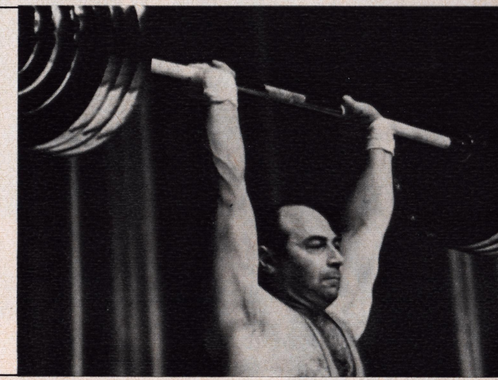

シングル・スカルで優勝したビャチェスラフ・イワノフ


優勝したソ連サッカー・チームの名ゴールキーパー、レフ・ヤーシン

メルボルン・オリンピックは、ソ連の誇る長距離ランナー、ウラジーミル・クーツの輝かしい勝利の舞台となった。一万mではクーツはライバルのゴードン・ピリー（イギリス）をぴったりマークする作戦をとり、最後の一周で一気にスパートし、オリンピック新記録でゴールイン。5日後の五〇〇〇mではスタートからトップを走り、またもやオリンピック新記録でゴールインして、長距離2種目を制覇した。

その他の陸上競技ではイネッサ・ヤウンゼメが女子やり投げ、タマーラ・ティシケビチが女子砲丸投げ、レオニード・スピリンが20km競歩でそれぞれオリンピック新記録を出して優勝した。

シベリアのチタ市出身のウラジーミル・サフローノフ（フェザー級）はソ連ボクシング史上初のオリンピック・チャンピオンとなった。ボクシングでは、さらに、ウラジーミル・エンギバリャン（ライトウェルター級）とゲンナジー・シャトフ（ミドル級）が金メダルを獲得した。


重量あげミドルヘビー級で金メダルを獲得したアルカジー・ボロビヨフ

ソ連の体操陣はメルボルンにおいてもその高度な技術を再び見せた。男女とも団体優勝し、ビクトル・チュカリンが男子個人総合で2連覇、女子個人総合ではラリサ・ラチニナが優勝した。

サッカーではソ連がユーゴスラビアを破って金メダルを獲得した。しかし、ソ連チームにとって劇的だったのは決勝戦ではなく、準決勝の対ブルガリア戦だった。試合は攻守の変化に富んだものとなり、手に汗を握る熱戦となった。しかし、双方ともゴールを決めることができず、〇対〇のまま延長戦に入った。延長戦に入ってフルバックのニコライ・チシェンコはブルガリアのフォワードとぶつかり、鎖骨を折るという重大な事態が生まれた。


ボクシングでソ連初のオリンピック・チャンピオンになったウラジーミル・サフローノフ（右）

当時のルールでは交代が認められていなかったため、チシェンコはソ連チームのドクターから麻痺して動かなくなった手を包帯で体に固定してもらい、試合に復帰した。動くたびに襲う激痛に必死に耐えながらチシェンコは自陣の左隅に位置を取り、それでもチームメートを助けようとしてがんばった。この時の得点は一対一の同点だった。しかし、ソ連チームはついに勝ち越し、勝利のゴールをもぎとった。しかも、勝利の女神を呼んだのはチシェンコが出したパスだったのだ。


女子体操の個人総合で優勝したラリサ・ラチニナ

オリンピック規則では優勝チームには11個の金メダルしか与えられない。したがって、表彰を受けるのは最後の決勝戦に出たイレブンだけである。このため、決勝戦を除き全試合に出場したチシェンコは金メダルをもらうことができなかった。しかし、彼の活躍は高く評価された。ソ連最高会議幹部会は名誉勲章を授与して、チシェンコの功に報いたのである。

OLYMPICS-80

オリンピック記念硬貨の発行

ソ連財務省と国立銀行は、一九八〇年のモスクワ・オリンピック記念硬貨の発行を昨年10月25日から始めている。記念硬貨の種類は銅・ニッケル合金の1ルーブル、銀の5ルーブルと10ルーブル、金の一〇〇ルーブル、プラチナの一五〇ルーブルの5種類。オリンピック記念硬貨の直径は31㎜、33㎜、39㎜、30㎜、28・6㎜となっている。各硬貨の表面の上部にはソ連国章と〝CCCP〟の国名、下部には額面を示す数字が刻まれ、裏面には80年オリンピックのシンボルマークと円周に沿って「第22回オリンピック大会、モスクワ、一九八〇年」の文字と鋳造年が刻まれているほか、各種類ごとにそれぞれちがったスポーツまたはオリンピックにちなむ図案が刻まれている。

これらのオリンピック記念硬貨は現在流通中のソ連貨幣と同じ法定貨幣である。

オリンピック記念硬貨発行の歴史は紀元前四八〇年にさかのぼる。その後も古代ギリシャと古代ローマではオリンピック記念硬貨がたびたび発行された。そして、この伝統は一九五二年のヘルシンキ・オリンピックから復活し、記念硬貨が発行された。

ヘルシンキ以後のオリンピック開催国（オーストラリアを除く）も記念硬貨を発行しているが、それはオリンピックの規模と意義の増大にともなって、その開催国が記念硬貨の発行をますます重視するようになったからである。

一九七二年のミュンヘン・オリンピックでは記念硬貨が一億枚発行され、その販売による利益は組織委員会の全収入の50％を超えた。

モントリオール・オリンピック組織委員会は記念硬貨の販売による利益が最終的には一億一〇〇〇万ドルになることを期待している。期待しているというのは、記念硬貨の普及がオリンピックの大分前から始まり、閉幕後も1―2年間は続くからである。

モスクワ・オリンピック組織委員会はソ連財務省、ソ連国立銀行、ソ連外国貿易銀行とともにこれまでのオリンピック開催国の経験を研究し、オリンピック記念硬貨が組織委員会の追加財源となるだけでなく、一九八〇年のオリンピックの重要な宣伝手段であることも考慮した。

モスクワ・オリンピック組織委員会の記念硬貨計画の実施において全権を委任されているのがソ連外国貿易銀行。一九七七年9月29日、ソ連外国貿易銀行はフランス銀行連合および米国のオキシデンタル・ペトロリアム社と、総額一億五〇〇〇万ドルのオリンピック記念硬貨をソ連外国貿易銀行が両社に売るという契約を結んだ。

両社はモスクワ・オリンピック記念硬貨を世界各国に普及させるためのキャンペーンを始めている。両社は銀行やコインの収集、売買を専門とする会社を通してオリンピック記念硬貨を販売できる。

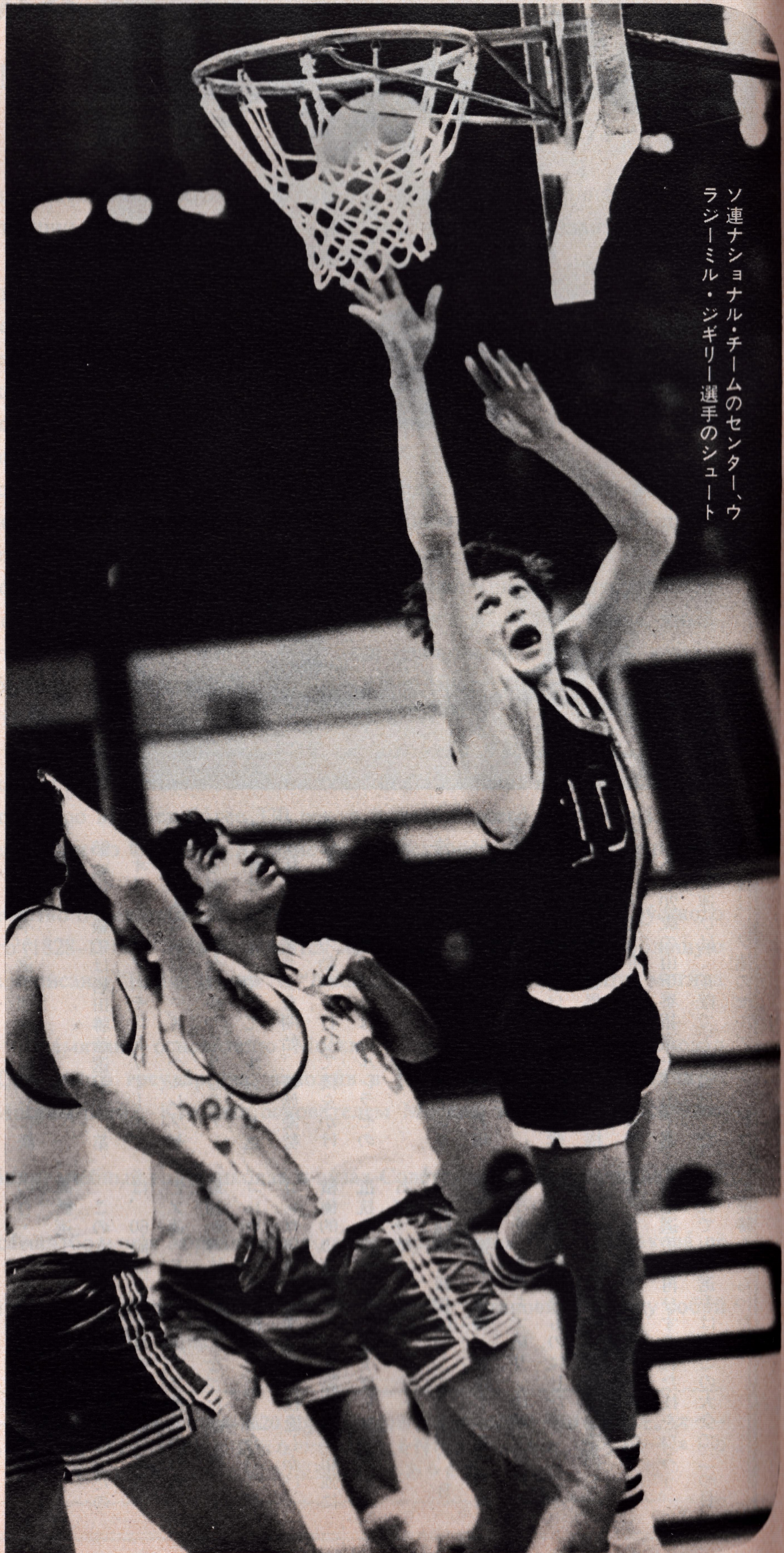
記念硬貨の販売が予定されている国のオリンピック委員会の支持を得、また国際オリンピック運動をいっそう発展させるためにフランス銀行連合とオキシデンタル・ペトロリアム社は、売上高から一定のパーセントをその国のオリンピック委員会に支払うことになっている。



80年オリンピックを記念して発行された硬貨

スポーツ

ソ連代表チームの名センター



ソ連ナショナル・チームのセンター、ウラジーミル・ジギリー選手のシュート

ソ連代表男子バスケットボール・チームの主力選手ウラジーミル・ジギリー(25歳、ディナモ・モスクワに所属）は、バスケットボールの申し子とも言われる男。ビッグ・スポーツへの道も順調だった。

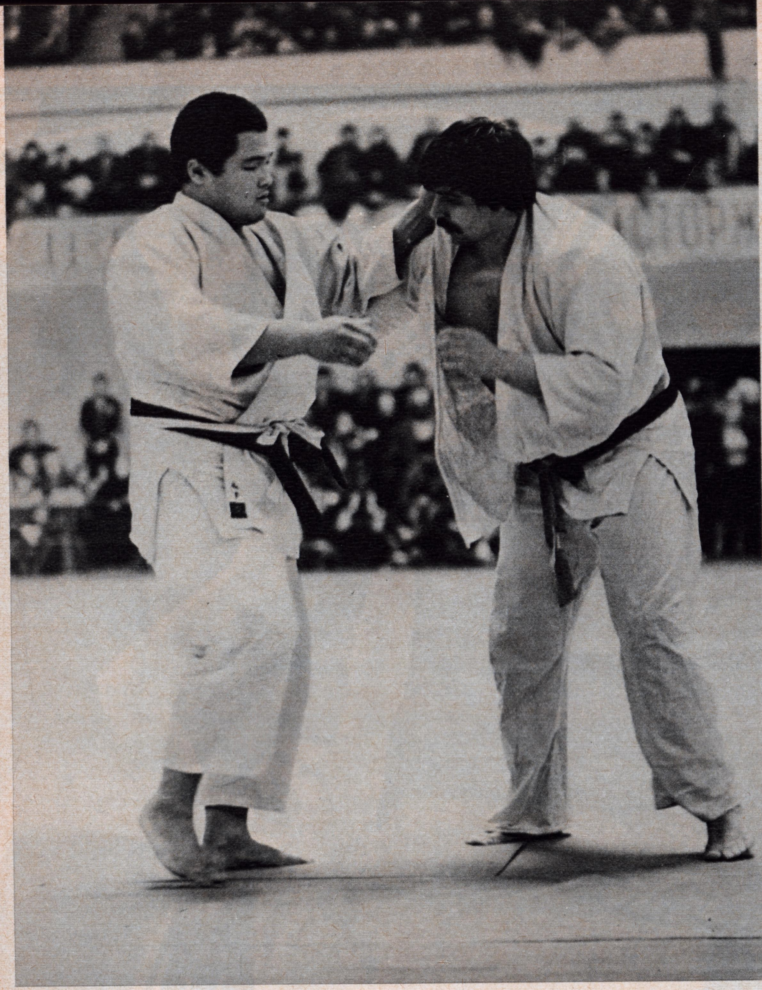
ウクライナ共和国ハリコフ市のジュニア・チームでバスケットボールを始めたジギリーは、全ソ大会に出場した時、ディナモ・モスクワの当時の監督エブゲニー・ゴメリスキーからセンスのよさを認められてスカウトされた。

数年後、ナショナル・チームのコーチ陣はジギリーをチームの一員に加えた。ナショナル・チームに入ってからの彼は、1974年の世界選手権優勝、モントリオール・オリンピック銅メダル、1975年と77年の欧州選手権２位の成績を収めたソ連チームにあって主力選手として大活躍している。

ジギリーはセンターだが、かつてはセンターは背の高いものの役と相場が決まっていた。そのためか、センター役の選手は技術的、戦術的、体力的に相当の欠点を持つ場合もあった。しかし、身長２m07のジギリーは運動量が非常に多く、ドリブルのスピードも豊かで、カットインプレーや中距離シュートを得意としている。１試合に彼はたびたび30点を超える得点をあげている。

ガードに回るとプレーが甘くなるという欠点はあるが、ジギリーがソ連の男子バスケットボール界の逸材であることは、間違いない。

トビリシで行われた第9回国際柔道大会



無差別級の決勝戦で対決する山下選手とB・ベリゼ選手（ソ連）。山下選手が勝った。

今年の2月10日から3日間にわたって、トビリシ（グルジア共和国首都）で第9回国際柔道大会が開催された。

この競技会は以前から各国の柔道選手たちの間で大きな権威をもっており、今回もブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、キューバ、ユーゴスラビア、ルーマニア、フランスおよび日本が選手団をトビリシに派遣した。

95kg以下級では岩田勝彦選手が、第21回オリンピック（モントリオール）で2位に入賞したラマズ・ハルシラゼ選手と対戦。試合はゆっくりしたテンポで始まったが、やがてハルシラゼ選手が猛然とアタックを開始。終始優勢を保ち、相手の動きを封じて技をかけようとした。この試合はハルシラゼの判定勝ち。

決勝でハルシラゼは、ソ連のアレクサンドル・シュロフ選手に負け、岩田選手は3位になった。

95kg超級の優勝者は、東海大学の学生で、一九七六年世界ジュニア選手権および一九七七年全日本選手権の優勝者である20歳の山下泰裕選手。山下選手の試合運びは、正確で、確実だった。決勝で彼は、ソ連のセルゲイ・ノビコフ選手に勝った。

78kg以下級では、ソ連のA・ボロソフ選手とA・オクロピリゼ選手が決勝戦に進出。激しい争いになり、結局ボロソフが優勝した。日本の加瀬次郎選手は第3位になった。

86kg以下級で優勝を争ったのは、日本の高橋政男選手とドイツ民主共和国のD・ウルチ選手の無敗同士。結局、高橋選手が優勝した。

この大会で一番激しい試合だったのは、60kg以下級の日本の森脇保彦選手とソ連のE・ポゴレロフ選手の対戦。最初から技の応酬となったが、幾分ポゴレロフに有利に見えた。試合中、ポゴレロフは絶えず果敢な技をしかけ、積極的に攻撃した。森脇選手は頑強に抵抗したが、軍配はポゴレロフ選手にあがった。

65kg以下級では、トビリシの若いB・ググバ選手が優勝。彼はすべての対戦相手を一本勝ちで破り、決勝ではわずか36秒で勝利をものにした。

71kg以下級の優勝者は、ソ連のP・ポノマリョフだった。無差別級では、山下選手が再びすぐれた技をひろう。これで山下選手は、この大会で二つ目の優勝をさらった。

А Б В

ЗНАЕТЕ ЛИ ВЫ СОВЕТСКИЙ СОЮЗ?

Вопросы:

1. Осенью э́того го́да сове́тский наро́д бу́дет отмеча́ть пе́рвую годовщи́ну приня́тия но́вой сове́тской Конститу́ции, закрепи́вшей основны́е достиже́ния страны́ развито́го социали́зма.

Како́го числа́ и ме́сяца была́ при́нята ны́не де́йствующая сове́тская Конститу́ция?

2. Пе́ред Ва́ми (фо́то 3) — сове́тский космона́вт, два́жды Геро́й Сове́тского Сою́за. В ма́рте 1965 го́да он впервы́е в исто́рии соверши́л вы́ход в откры́тый ко́смос с бо́рта косми́ческого корабля́ “Восхо́д-2”.

Как фами́лия э́того космона́вта, кото́рый ны́не явля́ется замести́телем нача́льника сове́тского це́нтра подгото́вки космона́втов?

3. По достиже́нии определённого во́зраста сове́тские лю́ди, прорабо́тавшие за свою́ жизнь не ме́нее определённого сро́ка (мужчи́ны — 25, же́нщины — 20 лет), име́ют пра́во на госуда́рственную пе́нсию. По достиже́нии како́го во́зраста предоставля́ется э́то пра́во?

4. В а́вгусте э́того го́да исполня́ется 350 лет кру́пному промы́шленному це́нтру Восто́чной Сиби́ри, го́роду-по́рту на Енисе́е, в кото́ром сосредото́чены машинострое́ние, хими́ческая промы́шленность, постро́ен алюми́ниевый заво́д и целлюло́зно-бума́жный комбина́т. Ря́дом с э́тим го́родом нахо́дится крупне́йшая из ны́не де́йствующих ГЭС, нося́щая то же назва́ние, что и го́род.

Как называ́ется э́тот го́род и какова́ мо́щность ГЭС, располо́женной вблизи́ э́того го́рода?

5. Озеро Байка́л облада́ет це́лым ря́дом осо́бенностей. Одна́ из них, в ча́стности, заключа́ется в том, что в э́то о́зеро впада́ет бо́лее 330 рек, а вытека́ет всего́ лишь одна́. Как называ́ется река́, вытека́ющая из Байка́ла, и каки́е гидроэлектроста́нции постро́ены и́ли стро́ятся на ней?

6. 9 сентября́ челове́чество бу́дет отмеча́ть 150-ле́тие со дня рожде́ния вели́кого ру́сского писа́теля Льва Толсто́го (1828–1910). Как называ́ется ме́сто, где Толсто́й про́жил бо́льшую часть свое́й жи́зни, где напи́саны “Война́ и мир” и “Анна Каре́нина”, где нахо́дится моги́ла писа́теля?

7. На сни́мке No. 1 — па́мятник основа́телю Москвы́. Этот ру́сский князь основа́л ны́нешнюю столи́цу Сове́тского госуда́рства, заложи́в в 1147 году́ пе́рвую деревя́нную кре́пость в излу́чине Москвы́-реки́. Кто был основа́телем Москвы́ и где нахо́дится э́тот па́мятник?

8. В отли́чие от Япо́нии, учёбный год в шко́лах и ву́зах Сове́тского Сою́за начина́ется не 1 апре́ля, а . . . когда́?

9. Как называ́ется са́мая больша́я го́рная верши́на на террито́рии СССР и какова́ её высота́?

10. На сего́дняшний день 17 пар сове́тских и япо́нских городо́в установи́ли ме́жду собо́й побрати́мские свя́зи. Назови́те э́ти па́ры.

本号のテキストは，58ページに掲載されている本誌創刊20周年記念愛読者クイズの問題を利用しました。スペースの関係で，省略した部分もあります。また，やさしい文章なので，〔注〕を付けません。なお，前号のテキストの訳文は本号14ページの記事『明日の農業をになう青年たち』の最初の部分にあります。

国内問題

本誌創刊20周年を迎えて

『今日のソ連邦』評論員
ミハイル・エフィーモフ

私の前には本誌の第1号がある。表紙には赤い数字で〝1958・4〟と号数の〝1〟が記されている。この雑誌が世に出てから、はやくもまる20年が過ぎ去ったとは信じがたいほどだ。

表紙には、七人の青年が立っている。かれらはモスクワ大学の学生である。まだ一年生で、やっと学問のとびらを開きかけたところである。残念なことに、私にはかれらをだれひとり探し出すことができなかった。そういうわけで、できるのはただ、かれらのその後の人生を想像し、われわれの社会にはそのための前提がすべてそろっているのだから、実生活の道をりっぱに歩んでいるものと期待することだけである。モスクワ国立大学の現在の学生のなかに、この7人の〝2世〟がすでにいる可能性は大いにある。

創刊号の内容から

本誌第1号の巻頭には、国家の最高権力機関——ソ連最高会議にかんする記事が掲載されている。これより少し前の一九五八年3月には総選挙が実施され、一三七八人の代議員が選出された。いまもそうだが、これらの代議員のなかには、職業的国会議員はひとりもいなかった。大多数のものが、工場とコルホーズから直接にクレムリン大宮殿にやってきたのである。

このときの第5期ソ連最高会議の代議員たちは、かれらの先輩および後輩と同じように、祖国のために為すところが多かった。かれらはクレムリンで、当時の重要問題を大きな関心をもって審議し、しかるべき決定を採択した。

最高会議会期中に撮られた写真には、登壇中のアンドレイ・グロムイコ・ソ連外相がうつっている。(ついでにいえば、A・グロムイコは一九五七年以降ずっとこのポストにあり、このことはまたソ連の外交政策の不変性を証明するものである)。A・グロムイコはこのとき、ソ連があらゆる種類の核実験を停止するというソ連政府の提案の審議を代議員たちに求めた。これは米英両国がこの呼びかけに頑として耳を傾けようとしなかったためだった。最高会議は、わが国のいつもの平和的イニシアチブを全会一致で承認した。

この20年間に、代議員の顔ぶれはすでに幾度か入れかわった。しかし代議員たちはつねに、全国民の意志を表明してきた。このために、かれらが採択した諸決定は最も幅広い承認を得た。本誌第1号に掲載された写真にうつっている代議員たちは、19年後にかれらの後輩たちが、あのような意気込みでソ連の新憲法と、いちどならず同じ議場にひびきわたった新しい平和的提案に賛成することを、もちろん知るよしもなかった。

日本の読者にわが国の生活を紹介するという大きな、責任の重い仕事を引きうけた本誌の編集部は、当然のことながら第1号で、15の連邦構成共和国のなかでも最も大きいロシア連邦から、ソビエト諸共和国にかんする物語を始めた。この記事の筆者は、当時ロシア連邦共和国閣僚会議副議長をつとめていたニコライ・バイバコフだった。N・バイバコフは経済的達成について語り、とくに石油採掘の領域では同共和国がソ連全体の採掘量の73%を占めていると述べた。この記事に引用されている別の諸指標も、ソ連の重要生産部門に占めるロシア連邦の比重が大きいことを明らかにしている。

その後もこの傾向は少しも変わっていない。そしてロシア連邦はいまも依然としてソビエト経済の旗頭である。しかし指標そのものは変わった。たとえば一九六〇年のソ連全体の石油採掘量は約一億五〇〇〇万tだったが、昨年12月の最高会議で、いまはすでにソ連閣僚会議副議長・国家計画委員会議長であるニコライ・バイバコフは、今年の国民経済に与えられている課題について述べ、一九七八年には西シベリアだけでも、二億五〇〇〇万t以上の石油が生産されると報告した。

20年後にこの数字を知る者は、あるいは今日ほどの感銘は受けないかも知れない。のみならず私は事態は将来も正しくそのようになるものと確信している。なぜなら、わが国の歴史のすべてがはっきりと証言しているとおり、社会主義経済はいかなる後退も不況も危機もなく、安定的に、かなり速い速度で発展しているからである。一九七七年のわが国の経済力が一九六七年に比較して2倍に強められていると言うだけで十分だろう。そしてこの場合に強調されねばならぬことは、社会主義の条件のもとでの経済の発展がかならず、社会の例外なくすべての成員の物質的福祉の向上をともなっていることである。たとえば一九七六年の国民の実質所得は一九六五年の一七二%だった。この所得増大の傾向はこんにちにおいても特徴的である。

宇宙時代の夜明け

本誌第1号に視線を戻すと、わが国の科学技術の発展に関係のある二つの記事が目にとまる。一つはソ連の航空にかんするもの、もう一つは映画『星への道』の批評である。この映画はロシアの傑出した学者、発明家であり、惑星間飛行理論の創始者であるツィオルコフスキーのことを物語ったものだ。

この20年間に、人間の知識がこれほど感嘆に値する進歩をとげた領域はほかにはない、と私は思う。本誌は技術の最新の知識として(これはしごくもっともなことであるが)ジェット機TU104について書いている。もっとも、こんにちでは、この型はすでに珍しいものとなっている。これに代わってエアバスIL86と超音速機TU144が現れたのである。

映画『星への道』は一九五七年に製作されたが、当時すべての人々がたった今生まれた奇跡——ソ連で人類史上最初の人工衛星が打ち上げられたこと——に夢中になっていた。この映画の批評を載せた本誌の創刊号が読者の手に渡ったその年には、ユーリー・ガガーリンはまだ飛行学校で学びはじめたばかりだった。アレクセイ・レオーノフも、わずか数年後に自分自身が宇宙船の外の宇宙空間を〝遊泳〟する最初の人間になろうとは想像さえしなかっただろう。だからこそ宇宙飛行を遠い空想として描いているこの映画が幾分幼稚に見えるのである。

この文を書いているきょう、ソ連とチェコスロバキアの宇宙飛行士からなる最初の国際クルーが軌道上で一週間過ごしたのち、無事地球に帰って来た。

宇宙飛行について語るとき、おそらくいつも〝最初〟という言葉が現れるだろう。なぜなら宇宙の秘密へのそれぞれの一歩は、新しいものの発見だからである。しかしロシアの小さな都市カルーガ市の教師ツィオルコフスキーの名はけっして忘れられないだろう。彼はこの都市でほとんどその永い一生(一八五七—一九三五)を過ごし、星への道を人々に切り開いたのである。

いうまでもなく文学と芸術の世界はこれほど急速には発展しない。『今日のソ連邦』の創刊号には新上演のA・ハチャトゥリヤンのバレエ『スパルタクス』の批評が載っている。すでに20年が過ぎたが、ソビエト音楽文化のこの精華は今も舞台から消えていない。写真にうつっている演技者の一人Y・グリゴロビチは、いまやボリショイ劇場の首席振付師となり、最近の名舞台のすべてが彼の名と結びついている。

ソ日関係発展の20年

最後に、本誌の誕生をもたらしたと言える最も主要な、最も基本的なテーマについて述べよう。それはソ日両国・両国民間の友好的、実務的、公的交流のことである。少しの誇張もなく言えるが、本誌のすべての号に必ずこのテーマが掲載されている。おかげでわれわれは本誌をソ日関係に最も精通した年代記とみなすことができるだろう。創刊号もまた例外ではなかった。

ソ日両国間の関係におけるこの20年間は、おそらく最も実り多いものだったろう。雑誌のとじ込みをざっとめくっても、われわれに主要な段階を思い出させる。すなわち——

二国間交流の分野では——ナホトカ=横浜間の定期航路の開設、モスクワ=東京間の直通空路の開通、領事条約の締結と総領事館の設立、ハバロフスク=新潟間の貨客空路の開設。

貿易・経済交流の分野では——最初に3カ年、次に5カ年の貿易協定の調印、中村、河合、植村、永野、土光の各氏を団長とする実業界代表団のソ連訪問、多くの基本契約の締結、大規模な見本市の開催、科学技術協力協定の調印、その他多くの出来事。

文化交流の分野では——両国の一流の芸能集団や演奏家の公演、絵画展、書籍展、国際的な反響を呼んだ合作映画等々。

政治的接触の分野では——ソ連最高会議幹部会副議長の日本訪問、ソ連閣僚会議副議長の三度の訪日、ソ連外相と日本国外相との再三にわたる会談、ソ連政府要員多数の訪日とさまざまな交渉の実施、両国国会間のかなり定期的な接触。一方、日本の首相、多数の政府要員がクレムリンで交渉した。日本の野党の多数の指導者がソ連を訪問し、両国の社会団体間の強固な交流が打ち立てられた。

このように、多くのことがなしとげられた。過ぎ去った期間に両国間の貿易額は70倍以上に増えたと言えば十分だろう。六〇年代の半ばにA・I・ミコヤンが日本の実業界の代表団との会合の席で、両国間の貿易額はまもなく一〇億ルーブルを超えるだろうと語った時、多くの者にはそれは空想としか思われなかった。今日この数字はすでに二〇億ルーブルの大台を超えている。本誌の創刊30周年を迎えるころには、われわれはソ日貿易におけるいっそうの進展を確認することができると確信したい。またこの進展が貿易面だけではないことを期待している。

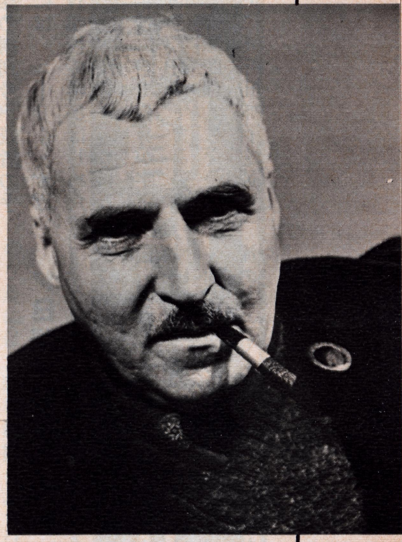
周知のように、ソ連は最近ソ日善隣協力条約草案を提案した。読者の多くは昨年の朝日新聞でL・I・ブレジネフとのインタビューを読まれたことと思う。彼はこの草案に触れて次のように述べた。「…私たちは平和条約交渉は続けながらも、意見を交換し、善隣協力条約を結ぶよう提案した。この善隣協力条約はすでに条約に成文化できるほどまでに成熟した両国関係の分野を含むものになるだろう。これによって不信の残りかすを取り除き、あらゆる分野での相互協力を着実に発展させるという方向への急激な転換がもたらされるだろう」

『今日のソ連邦』は創刊以来すでに20年間、この崇高な目的に奉仕しているのである。

文学

コンスタンチン・シーモノフ

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



コンスタンチン・シーモノフ（一九一五年生まれ）は、幾百万の人々に読まれている作家です。シーモノフは若くしてすでに名声を博し、その名声をもう40年にもわたって維持しています。

シーモノフは、自分の運命の中でも、創作の中でも、戦争における人間の勇気、大きな目的のためには危険をもかえりみない大胆さをたたえてきました。彼は、本質を凝視する芸術家としてだけでなく、自分の目でしばしば死を見てきた兵士として、自分の作品の真実を自分自身の行為によって報いた兵士としても、それを行ったのです。

個性の成熟にとってもっとも重要だと思われる10年間が、シーモノフにあっては従軍記者としての仕事と切り離しがたく結びついています。この10年のうちの4年は、ソビエト国民とファシズムとの戦争の期間で、このときシーモノフは〝クラスナヤ・ズベズダ〟（赤い星）紙の記者でした。

シーモノフ自身は幸いにも弾丸を免れましたが、血まみれの戦闘のさなかでシーモノフを見たことのある同僚たちの回想や将兵たちの話は、死の危険に直面したときの彼の勇敢さを物語っています。彼は、目撃者のこの上なく貴重な証言を残すために、最後まで戦場にとどまりました。

ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

シーモノフは有名な三部作『生者と死者』でレーニン賞を受けましたが、この三部作に入っている長編の一つに『だれも生まれながらの兵士ではない』という作品があります。

人々が兵士になるのは、警鐘が打ち鳴らされるときです。

シーモノフにとって、その〝とき〟は、決定的なものとなりました。

彼は戦争以前にすでに、詩人として広く知られていました。そして戦争の初期には、いくつかのすぐれた叙情詩を書いています。その中の一つ――『私を待て』は、ソビエト詩の古典になっています。

「私を待て、私はもどる、ただひたすら待て……」

この句は、ソ連では幾百万の人々に知られています。それは、家族を残してきたすべての兵士を捉えた感情の表現だったのです……

「私を待て、私はもどる、すべての死に面当てに」

この句がラジオから流れるやいなや、それは銃後にも前線にも広がりました。それは人々に書き移され、この詩に曲もつけられました。

「私がどう生き抜いたか、おまえだけに知らせよう。おまえはだれもできなかったように、待つことができたのだから」

このような言葉が、時を失せずに語られ、聞かれることが、どんなに大切だったことでしょう！　この詩は、悲劇的な一九四一年に書かれたのです。

「待つことによって、おまえは私を救ってくれた」――これは、愛についての、信念と忠実さによって兵士の生命を救うことのできた女性についての詩です。

一九五〇年代と六〇年代に、シーモノフは一連の大作を書いています（長編『戦友』、三部作『生者と死者』、中編『ロパーチンの手記から』その他戯曲やシナリオ）。戦争の叙事詩的パノラマ、厳しい、ほとんど禁欲主義的なまでの手法、諸人物の深い劇的要素が、シーモノフの散文を現代ソビエト文学の注目すべき現象にしています。シーモノフは一度ならず、芸術的虚構は彼の作品の中で、従属的な役割しか果たしていない、と語っています――「戦争のような苦しいことについての中編や長編を書けば、夢想したり、事実をいいかげんに取り上げたりする気にはなれないだろう。反対に、自分の生の経験が許す可能なかぎり、戦争において自分の目で見たものの、できるだけ近くにいようとするだろう」

シーモノフは長年にわたって、過去の自分の日記の整理に取り組みました。一九七七年には2巻ものの回想記『戦争のさまざまな年――作家の日記』が刊行されました。本誌にその抜粋を紹介する『日本一九四六年――日記から』もまた、同じジャンルの作品です。

この本が世に現れるいきさつについて、シーモノフ自身が次のように語っています。

「30年まえ、約5ヵ月の旅のあと、私は日本からもどった。日本についての大作の仕事を始めるためには、モスクワまで行かなければならなかった。この大作のために、すべての必要な資料は集められているように思われた。ここにこそ、この旅行の主要な意義があったのだ。

だが、列車でチタからイルクーツクへ向かうあいだに、われわれの車両に電報が届いた。それによれば、私は列車から降りて飛行機に乗り換え、ただちにアメリカ合衆国への長期の出張に赴かなければならなかった。電報は反論を前提とせず、考える暇を与えず、あとで明らかになったことだが、それまでの私のすべての計画を、長いこと反故にしてしまった。

いま、その日記――より正確に言えば、その日記の断片が、みなさんの前にある。そして私は、なぜそれがいまになったかを説明しなければならない。なぜ私は、読者のみなさんに30年もまえのこのメモを、当時ならこれらのメモをもとに、日本について考えた自分の本をこんな風には書かなかっただろう30歳の作者のメモを紹介する気になったのか？

私は、戦後の日本はわが国の文学に見事に紹介されていると思う。イリヤ・エレンブルグの『日本印象記』、ニコライ・ミハイロフの『日本人』（ジナイダ・コセンコとの共著）、ダニール・グラーニンの『石庭』、フセボロド・オフチンニコフの『桜の枝』がすぐに思い浮かぶ。これらは、賢明で繊細な人間の、長年にわたる鋭い観察と思考の成果である。

これら日本についての本の中で、いちばん新しく刊行されたのは、ボリス・アガポフの本である。彼はひじょうに長いことこの作品に取り組み、この本が出版される直前に死んだ。オフチンニコフの場合と同様に、アガポフの本もまた、多年にわたる思考の成果だった。ただちがうのは、戦後最初に日本を訪れた者としての観察や会話が、それにつづくすべての思考の基礎になっていたことである。そのとき私はほとんど毎日、ボリス・ニコラエビチ・アガポフのお伴をしたり、彼が毎日の仕事を終えるとき必ずやる、夜の、簡潔で機知に富んだ要約を聞いたりしていた。

のちに、この本の仕事に取り組むにあたって、アガポフは、あのころあまりたくさんメモを取っておかなかったとこぼし、記憶を検証するために私の日記を読んで、そのいくつかの抜粋を自分の本に引用させてくれとたのんだ。私は大いに結構だと言った。

『あなたは本当に、ちっとも惜しくないんですか？』とアガポフは、私の返事になぜか笑いながらきいた。

『ちっとも。でも、なぜそんなことをきくんです？』

『だって、私があなたの立場だったら、おそらく自分でこの日記を出版したでしょう。ここには、あなたがすでにずっと以前に〝日本芸術の話〟に引用したものだけでなく、芸術とは関係のない、ほかのことも書かれています』

私は、その他のものはすべて、日本における一九四六年とはあまり関係ない、役に立つとしても、むしろ思考の基礎材料として役に立つくらいで、私にはそのつもりはない、と反論した。

『干し草の上の犬のように、自分の〝基礎材料〟の上に座っていないで、あなたがおっしゃるように、あなた自身がそれができないのでしたら、それをせめて出版して、他の人々が考えるための可能性を提供なさい』

そのときは、私たちの会話は彼のこの本気とも冗談ともつかない言葉で終わった。

何年かたった。ボリス・ニコラエビチ・アガポフは死んだ。日本について書かれた本が出版された。

この本を手にしながら、私はアガポフとのかつての会話を思い出し、自分の日本での日記を読み直して考えた。30年も以前のことではあるが、その中の何ページかは、当時の、戦後の日本についてだけでなく、現在の日本についても考えるための、ある程度の〝基礎材料〟にはなるだろう。なぜなら、私は年をとったことによって、社会生活においてはいかに多くのことが、しばしば見た目には分からないうちに、そっくり過去のものに、特に、変動の多い困難な時代のものになりつつあるかを、いっそうよく理解できるようになったからである。

日本一九四六年—日記から

コンスタンチン・シーモノフ　岡本つとむ 訳

一九四六年1月26日。東京。

きのう昼食後1時過ぎ、われわれはいまの日本の作曲家のうちで最も有名で、事実上現代日本音楽の創始者である作曲家の山田〔耕筰〕さん宅へお客に出かけた。

東京ではよくあることだが、われわれの乗ったジープは不意に広い通りから横町ともいえないような（家並みの割れ目とでもいいたい）狭い道に入った。それから30度もありそうな急坂を数十メートルのぼると、日本ではどこでも見かける灰黒色の、たいして大きくない家の前で止まった。格子戸越しに高く盛り上がった小じんまりした庭が見え、そこには敷石、石燈籠、素焼の円テーブルがあり、テーブルのまわりには同じ素焼の四つの腰掛けがおかれていた。壁ぎわに高さ半メートル位の赤塗りのお宮があって、その小さな段にお供え用の茶碗が見えた。要するに、すばらしい前庭だった。

純日本風の一戸建ての家屋の外観や色は、日本の男の和服そっくりといいたい。和服も家と同じ特徴があり、暗灰色か黒色で、優雅さがぱっと目につかず、またすぐには気がつかないが、色合いや裁ち方（様式）に大きな違いがある。

玄関口で初老とはいえ、まだ美しい婦人がわれわれを迎えに出て、上体を前に屈めると同時に、身体に当てた掌を腰から膝にすべらせて、日本人のしきたりどおりのお辞儀をした。

すぐに主（あるじ）の山田さんが出てきた。年はとっておられても、ほんとうのところ老人とはいえず、われわれには中年のように見えた。おそらく日本人の平均よりもむしろ背は高いのだろう、額はひいで、つるつるに剃り上げられたでこぼこの頭は大きかった。顔はほぼすべすべで、頬のほんの二、三本のしわと目尻の小じわが60歳というとしを表わしていた。彼は黒い、こまかい格子じまのゆったりしたウールの着物姿で、広い袖口からまだ全然老いを感じさせない美しい手がのぞいていた。

山田さんに案内されて通った書斎には大きなピアノ、低い現代風のひじかけいす、鋳鉄製の持ち運びできるストーブ、楽譜が積んである文机があった。普通の家とはちがって部屋は暖かかった。ついでにいえば、われわれはもう暖房をやかましく要求することはやめて、とにかく口から出る白い息が見えなければ結構だという気持になっていたのだが。

われわれはほかのことに比べて日本音楽のことがよくわからないので、日本音楽のことをおききしたくてきたというと、山田さんは開口一番、私は二度ロシアに滞在したし、四回ロシアを通過したことがあるといい、自分が滞在した都市の名を20ばかり挙げた。またロシアでの日本音楽にかんする講演のことや自分がとても高く買っているショスタコービチをはじめソ連の数々の作曲家と近づきになったことを話した。それに自分はRABIS〔当時全芸術関係者が加入していたソ連の芸術組織〕にも入っているといって、何かを取りに机のほうに立った。きっとRABISの会員証を取りにいったのだろう。どうだかわからないが、きっと山田さんは会員証をもっているのだろう。ところが山田さんは机の引出しの中をさがしまわっていて、さらにひとこと、GOMETSといった。

私はGOMETSという言葉がすぐにはピンとこなかったが、やがて、以前ソ連にあった音楽、軽演劇、サーカスの国営連合団体の略語であることを不意に思い出した。

机の中をかきまわしたあげく、山田さんが取り出したのは会員証ではなくて二個のバッジだった。一つはRABISという名の入ったけばけばしい感じのもの。もう一つはダークブルーのバックに劇用の面をえがき、GOMETSという名の入ったものだった。

再びイスに腰をおろすと、山田さんはわれわれがお願いした日本音楽の話を第一歩から話し始めた。以下は山田さんの話——日本のオリジナル音楽、いいかえれば古い日本音楽の起源は遠い遠い昔ではない。いまから少なくとも三、四百年位前の日本音楽について話しておかねばなるまい。この音楽は歌舞伎と同じく民衆の中から生まれたもので、歌舞伎の役者の舞台の演技には必ず歌い手の歌唱がついていて、音楽は歌舞伎の一部だった。歌舞伎から音楽を取り去れば、歌舞伎の価値は半減する。だからおよそ歌舞伎を離れた音楽は存在しなかったのだ。貴族がたしなんだ能も、中国、朝鮮の音楽をもとにした音楽（舞楽）と関係があり、それに仏教思想が結びついたものだ。この音楽には事実上メロディはなく、複雑なリズムがあるだけで、踊り手はそのリズムに合わせて踊る。

古い日本音楽には楽譜というものがない。楽譜が日本に現われるようになったのはずっと後のことだ。そのうえ、現代の音符形式で古い日本音楽を譜面に表わすことはできない。仕組みが違うのだ。日本の古い音楽には、ヨーロッパの音程と違って音符の間に半音以下の四分の一、八分の一の音がある。たとえばピアノではその音楽は正確に弾けないが、バイオリンならどうにか弾けるかもしれない。

ヨーロッパ音楽のうち日本に最初に伝わったのは、軍隊行進曲（薩摩海軍軍楽隊のイギリス音楽）とイエズス会の宗教歌だった。

日本に現代音楽が現われたのは明治維新後で、当時最初の国立の音楽学校が設立され、山田さんは一九〇八年にこの学校を卒業して、ドイツに留学。一九一一年帰国後シンフォニーとオペラを初めて作曲したが、これこそ日本の現代音楽の誕生を告げるものだった。その後彼はさらにオペラを三つ、交響曲を30余りとひじょうに多くの歌曲を書き、それで生活の資をえた。

最初の音楽学校の教師は初め全員がヨーロッパ人だったが、いまはもう、もちろん日本人ばかりである。学校は国立だから、教授はみんな日本政府のお役人で、どこかへ演奏公演に行くにも、いちいちお役所の許可がいるので、山田さん自身は学校をやめた。

一九一四年に山田さんは最初の交響楽団をつくったが、資金難のため解散の破目に追い込まれた。

一九二一年、長いアメリカの旅から帰った後、山田さんには若い音楽家でオーケストラをつくろうという気持が再び燃え上がったが、国にまったく乗り気がなく、補助金を出してくれないのが頭痛のタネであった。また金持ちの誰も、自分たちにはわけのわからぬ山田さんの発意に進んで金を出そうとはしなかった。そのため山田さんは自分の責任で、とにかく借りられるところから、百万近い金を借りてこなければならなかった。その当時はまさに歌が山田さんの救いの主だったのである。

戦後、それまで最も優先されてきたもの（まず軍隊と軍備）が見捨てられると、社会と国は、文化をこれまでよりも重視するようになり、いま東京都は東京都音楽団（このほかに日本には交響楽団が四つある）に年間百万円を出す予定だという。

この楽団の編成についてたずねると、山田さんは、交響楽団には日本の民族楽器が入らないのが普通だが、自分が作曲したものの中には日本の楽器で演奏されるモチーフが多いので、その場合、主に打楽器だが、楽団に加えているとのことだった。

「ではフルートまたはバイオリンで純日本調のメロディは演奏できないのでしょうか？」

「それはできるだろうが、日本の食料品でロシア料理をつくるようなもので、肝心の味がなく、面白くもなんともありませんよ」

「ヨーロッパのメロディはヨーロッパの楽器でということなら、日本のメロディは日本の楽器でということですか？」

「そうすれば二つの音楽がまったく違った、融合できない音楽だということがわかりますよ」

山田さん自身ヨーロッパ音楽を作っているが、そのなかに古い日本音楽の要素を特別に持ち込んではいない。しかしヨーロッパ人が山田さんの作品をきくと、その中にやはり日本調のものが入っていると感じるそうだ。

話が終わるころ、山田さんから秘書だと紹介された、きちんとした服装のがっちりした30歳の日本人の男と玄関口でわれわれを出迎えてくれた婦人が、部屋に入ってきた。紹介されたところによると、その婦人はプリマドンナだった。

山田さんは立ち上がって、小棚から胴太のウイスキーのビンを取り出し、皆にすすめた。まったく山田さんは人生をたのしんでいるんだなァという感じであった。彼は明らかに人生の意義をつかみ、うまそうにタバコをふかし、純ロシア風に一気にウイスキーを飲みほした。

話題が尽きたころ、何か弾いてもらえないかと頼むと、山田さんは心よく引き受けてくれた。電気スタンドを動かしたり、つけたり、ピアノを移動したり、楽譜を整えたり……準備に5分ばかり費したあと、山田さんがピアノに向い、プリマドンナが立った。立ったといっても、われわれの慣習のようにピアノのすぐそばではなく、ピアノから少し離れた小机のそばであった。

山田さんは自分の編曲したという日本の民謡（それは実のところ民族的なモチーフで書き下した山田さんの歌曲といってよい）を弾き出した。

歌い出したプリマドンナの顔にはびっくりするほどの魅力がこぼれた。彼女は中背でやせ気味。細面、鼻筋は通って肉はうすく、鼻孔は深く切り込まれ、ほんの少し上にむいていた。その鼻孔は奇形に近かったが、反面それは彼女の顔に何か特別の美しさを与えていた。彼女は歌手にいつもいやな思いをさせる緊張感も全然なく、伸び伸び歌ったが、口はほとんど大きくあけなかった。彼女の着ている着物は暗い感じのものでも、またけばけばした、やけに派手なものでもなかった。ヨーロッパ人は美的感覚という点で（家の飾りつけ、織物、こまごました装身具などあらゆるもので）日本人に比べてまったく野蛮人だが、彼女の着物は、こ

うしたヨーロッパ人が買うので東京のどの店でも売られているあのけばけばしい着物とはまったく違っていた。

その後民族的モチーフで作られた歌をさらに二曲披露してから、山田さんは「いまのは私の交響楽団を物質面で支えるために作った曲の一つ〝からたちの花〟〔原文は「カタチノ」となっている――訳者注〕です」と言った。

それはまったくうっとりするような歌曲で、そのメロディはわれわれの耳にすっかりなじみのあるもので、同時にある程度日本的なものだった。〝からたち〟の言葉が繰り返されたリフレインのところで私は何かイタリアとグルジアの言葉を同時に聞いた思いだった。ひとことでいうと、歌は実にすばらしかった。すぐさまこの曲の入ったレコードがあれば、モスクワへ持って帰りたいと言うと、あるということだった。

そのあとプリマドンナは山田さん作曲のオペラ「夜明け」の中の長いアリアを歌った。アリアの中ごろの、明らかに男声歌唱が入る箇所では、山田さん自身が静かな低音で歌い出し、一節か二節を実に表現力豊かに歌った。

私は一般に作曲家が歌うのをきくのが好きだ。作曲家の声は大体まずいが、作曲家が歌う場合はその歌の気持をつかんでいる。しかし歌手となると、りっぱな歌手でも歌の気持をいつも必ずしもつかんでいるとはいえない。なぜかというと、歌手は自分が歌うものよりも、自分の声のほうを愛する場合がはるかに多いからだ。

それからやがて明日（つまりきょうの5時）会うことを約束して別れを告げた。日本のどの家でもそうだが、われわれは玄関でぬいだ靴をはくのに一苦労したあと、帰路についた。

今日、われわれは約束どおり夕方5時に山田宅へ夕食を食べに出かけた。御老人へのプレゼントに私はウォッカを一びん持っていった。前の日かれは酒が好きだと言っていたからだ。

かれはわれわれを待ちかまえていた。

われわれは昨日同様しばらく階下の部屋に通され、緑茶を飲んだ。断わっておくが、このお茶は、レストランから洋服屋や靴屋にいたるまで、あらゆる場所でたいてい自動的に客に出されるものだ。

部屋のすみには、どの日本座敷にも見られるようにトコノマがあった。これは祭壇で、壁が少しへこみ、下に光沢のある板があって、その上に水の入った茶わんが置かれている。いまそこに二つの石彫りの燈籠に火が灯り（その中に電気が通じている）、その後方に砂の入った茶わんが置かれ、そこから何か花軸に似た細い棒が立てられ、その先端がゆっくり燃えていた。これは香だった。燈籠は客を迎えるのを喜んで明りが灯されていたのだ。

われわれが部屋に入ると、山田さんはウォッカのびんを手にとり、キモノの袖をたくしあげて二つの燈籠の間に置き、それからわれわれの方を向いてニッコリ笑い、燈籠やウォッカなど全部を指してこう言った。

「祭壇なんです」

恐らく、これが日本の宗教に対する態度の典型なのだろう。

狭い階段を伝ってわれわれは二階へ上った。階段の踊り場に大きな日本の太鼓が置いてあった。山田さんはそれを叩いてみせてくれた。太鼓の上の壁に三つの金属製の皿のようなドラがぶらさがっていた。山田さんはその音を実演してみせたが、三つとも高さの違う音を出し、順番に鳴らすと独特の和音になった。

そうこうしてわれわれは食卓の用意されている部屋に入った。そこは書斎とは違い、純日本座敷で、二つの低いテーブルがくっつけて並べられ、その周りに座布団が置かれており、山田さんは坐りやすいように座布団を二つ折りにするようすすめてくれた。

部屋の中はすべてが非常に簡素だった。タタミ、よく磨かれたテーブル、隅の方に一ヵ所、何かとても細かい絵が描かれた屏風、壁の引っこんだ所には黒い光沢のある板があって、その上に、花瓶がひとつ、そしてそれとは別の、白くて非常に細長い花瓶と何かの小さい玉が飾ってあった。飾り物は全部明るい色だが、ツヤのある板は真黒だ。

われわれが座につくと、日本の暮しの中の造形美についての話や、こうした家はだれが建てるのか、だれが設計するのか、建築家か建主かという話が始まった。山田さんは、このような家はふつう棟梁を中心とした大工の組合が建てるが、その際家の面積はメートルやフィートではなく、タタミ数で測り、これこれの坪の家という風に呼ぶと教えてくれた。こうした家のどれにもおおよその図面があり、この図面を大工が建主に見せる。建主は自分の好きなように設計を変更できるが、大工はなかなか変更を承知しないのがふつうだ。それは、まず第一に、変更の必要がないことが多いこと、なぜなら、大工は一度で良い図面を提示するから。第二に、大工は自分たちが専門家で、自分たちの方がよく知っていると思っているので、たとえどこか一部であっても大工を説き伏せるのは非常に困難だ。「およそ日本の美的趣味の本質は、少しだが上等で、簡素だということです。重要なのは簡素さです」と山田さんは言った。

これに同意しないわけにはいかなかった。

山田さんは三つの置き物が飾ってあるその棚を指して次のように語った。

「金持ちはよくたくさんの美術品を一生けん命集めて、それを必ず見える所に飾りたてます。だがこの三つの品はどれも安物です。この花瓶は上海でせいぜい10円で買ったんですよ。非常に古いもので、今では高くなっています。でも大切なのは他の品がこの花瓶の良さを損わない、ということです。違いますか」

壁には、日本ではよく見られるように、20ばかりのぞんざいな文字が書かれた細長い紙がかかっていた。ついで

に言えば、このなぐり書きの文字は悪筆だなどと考えてはならない。そういう場合もあるが、往々にしてこれが特別な書体で、非常に高く評価されるのだ。だが、無論われわれ素人目には前者と後者を見分けることはとても難しい。

「これは、あなたに気に入っていただけた『からたちの花』の作詞をした詩人の詩です。私の親友で、先年亡くなりました」と山田さんは言った。

「これにはなんて書いてあるんですか」と私は聞いた。

「これは短歌でね」と山田さんは内容を訳してくれた。「家の近くに木が植わっている。その木に葉がしげり、花が咲いた。すると馬が垣根に近寄ってきてそれを食べてしまった、これで全部です」

私は、この詩は辛辣だと思う、と感想を述べた。

「そうです」と山田さん。

「それに恐らく悲しい詩なのでは」とアガポフが聞いた。

「そう、悲しい詩でもあります。短歌にはふつうその二つ、アイロニーと悲哀がとけ合っており、それが短歌の特徴なのです」

食事が始まった。たっぷりと時間をとった優雅な夕食だった。私の受けた感じでは、山田さんは美食家だ。首長ビンに入れ替えたウォッカが出された。調度から食事の器にいたるまで上品づくめの優雅な部屋で、食事についてきたこのビンとグラスはチグハグに見えた。それは雑なヨーロッパの品で、上等とはいえないチェコのカットグラスだった。色は白で、むらさきの彫り模様が入っている。カットグラスは家の中のものとはどうしても調和しなかった。そして、二つの文化が非常にかけ離れているため、自分の家ではすばらしい美的センスを持った人も、よその文化を異国情緒として受けとめると、その受けとめ方で思わぬ悪趣味を露呈してしまうことがよくあるものだ、という思いが深かった。

さきほど二階へ上ってきた時、山田さんは、よく目立つ場所にかかっている小さな絵を、「これはロシアから買ってきたものです」と紹介した。

それは全くひどい油絵の習作で、ピオネール・キャンプの生活の一コマを描いたものらしかった。非常に下手な絵で、たとえいくらかでも美術に関係のあるモスクワの建物にこんな絵を飾ることはあり得ない。ところが繊細な趣味をもった山田さんの家にはその駄作が目立つ場所にかかっていたのだ。

われわれはかなり長く、二、三時間かけて食事をした。最初に出されたのは非常に美味しい前菜が数品だった。古くからあるアサシキという日本のサラダ、ボーブラに味がそっくりで、同じ方法で作るという干しイカ、それに殻ごと入った貝のスープ。貝殻は、わが国でデカダン期にテーブルやマントルピースの装飾に非常によく使われたのと同じ大きなものだ。この貝はフタを閉じたまま熱湯に入れて煮るのだそうだ。すると貝が独特のフタのように開くので、それに調味料と青味を加え、貝殻をつけたままテーブルに出される。日本料理の青味は緑色そのものだ。

「どうするのか、お分かりですか」と山田さんが言った。「実はこうです。薬はスープができ上って、火からおろす五分前に入れ、入れてからはどんなことがあってもナベのフタをしないのです。こうすれば青味の色が抜けません」

軽いおしゃべりをしているうちに知らぬ間に時間が過ぎた。前の時は真面目な話題ばかりだったが、今度は頭に浮んだことを話しただけだった。

食事を終えてから階下へ降り、そこでさらに一時間近く坐って話をした。

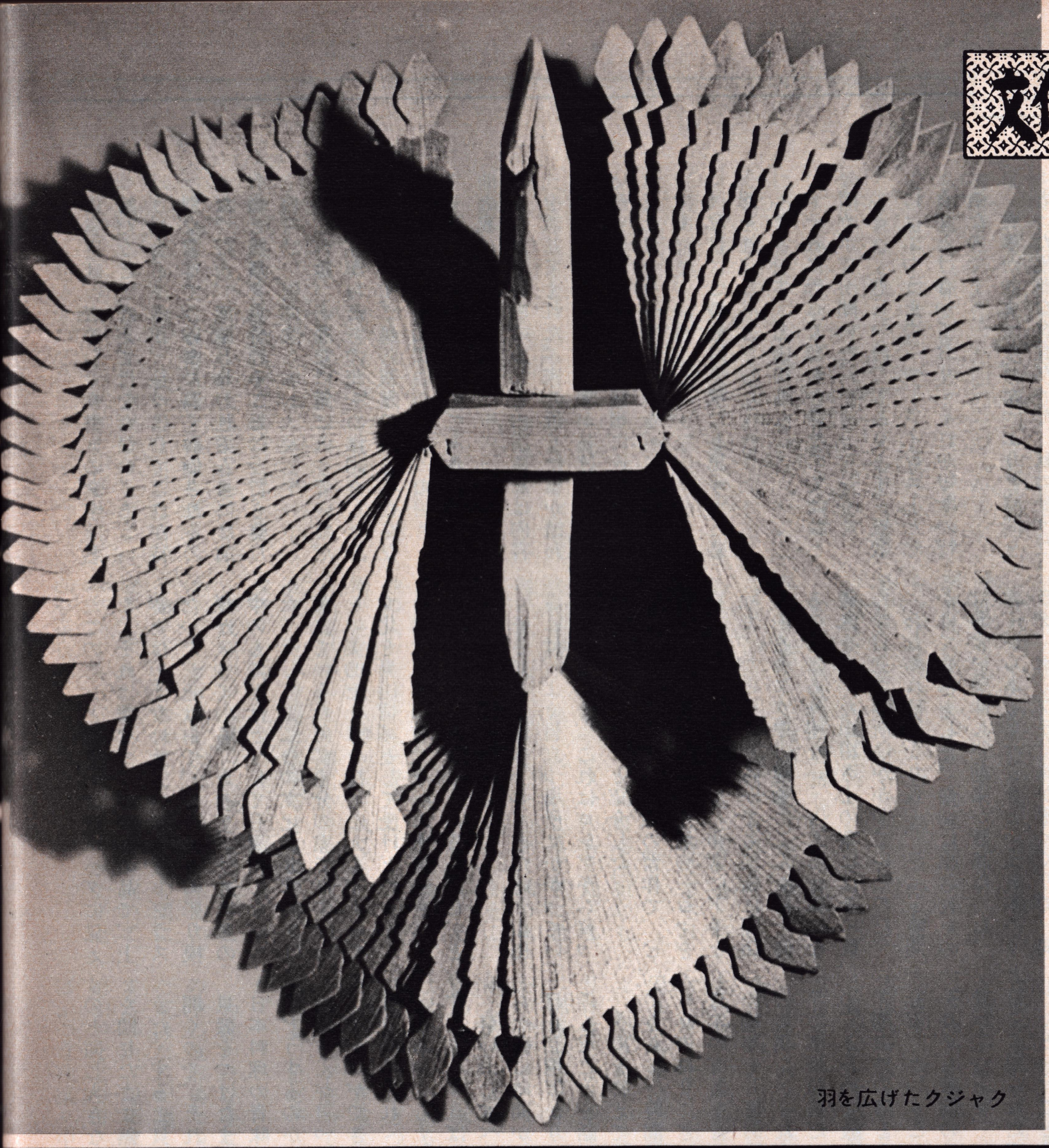
宴の終りにどこか近所に住んでいた日本の有名な音楽評論家で、音楽雑誌の編集をしており、同時に、山田さんの表現をかりれば、かれのオーケストラの事務局長だという人が来た。長身の、きわめて教養のある人物で、ロシア語以外のほとんど全部のことばが話せる、ということだった。われわれはかれから戦前の日本には月刊の音楽雑誌が二つあり、一方は大衆向け、一方はごく限られた専門家や音楽通向けだったということを知った。戦時中出版されたのは後者だけで、それも全期間を通じてたった四号しか出ず、そのうち三号は別々の印刷所で焼けてしまったため、世には出なかった、という。今度かれは改めて月刊で刊行するはずだ。

われわれがもう帰ろうとしていた時になって山田さんがドアのそばに掛っている奇妙な絵にわれわれの注意をうながした。それはかなりうまいが、ぞんざいに墨で描いたなにかの宮殿の絵で、円い、流線形の宮殿は周りに張出しと回廊がついていて、これが何やらモヤに包まれていた。わが国のさし絵画家が火星人の建造物を描くのに似ていた。

「これは私の設計による音楽堂で、描いたのは、私の生徒です。六万五〇〇〇人収容できる建物です。私は自分でこれを設計しました。どこにいても、音が同じように聞こえるはずで、オーケストラは閉ざされた室内で演奏します。オーケストラは余計なものに目を奪われてはならないし、聴衆の側もそれぞれ細胞室のように分れた個室にいて、隣席もオーケストラも目に入らず、ただ音楽だけが存在するようにするわけです。音楽だけ、それ以外はすべてしめだすのです」

その話が終ったところで、山田さんのオペラがラジオで演奏される2月末に再会することを約束して、かれの家を辞した。

ロシアの森が生んだ木製玩具



羽を広げたクジャク

円形の板にメンドリが数羽と、しっぽの立派なオンドリが一羽とまっている。黒と赤の塗料で、羽の線が描かれ、横腹はニスを塗って光沢を出してある。メンドリの頭にはそれぞれ糸がついていて、それをひとまとめにした糸の先端に小さな玉がぶら下がっている。板の下でこの玉を振れば、メンドリが板の真ん中に描かれた緑色のエサ箱を木のクチバシで激しくつついばむ。メンドリのせわしない癖を驚くほど正確に、また極めてコミカルに表現している。

〝鍛冶屋〟というおもちゃも変わっている。上下二本の棒にハンマを持った農夫とクマが向かい合ってまたがり、その真ん中にかなとこがある。二本の棒は左右に動くようになっていて、この端を両側に引っぱったり、押したりすると、荒い木彫りの農夫とクマが順番にハンマをかなとこに打ちつける……

木製玩具は、削ったり、彫ったりして彩色される。赤、黄、緑、赤紫の色が輝いているものもあれば、ボダイジュ、ハコヤナギ、シラカバなど白い木地のまま仕上げるものもある。無彩色の作品で大切なのは材料と彫りの美しさである。木はナイフやノミのタッチをそのまま伝える。木は、本来の天然のままで美しく、自然にたいする感動をよび起こす。そして木製の民芸品の中には木切れ、棒、二股の小枝など自然の造形美を生かしたものが多いのも決して偶然ではない。それらの作品では自然によってつくられた形が人間の創意によって巧みに意味づけされたり、形を変えたりされている。民族工芸の職人たちは木の可塑性に富んだ、豊かな可能性と木肌の美しさ、上品な色あいをいつも鋭敏に感じとり、さまざまに利用してきたのである。

木製玩具はロシアがルーシと呼ばれていた頃の大昔から知られている。それは農民の建築様式や風俗の伝統と密接につながっている。木製玩具のことをしばしば風俗彫刻と呼ぶが、まったくその通りである。

ロシアの木製玩具の特色は、現実と詩的誇張や空想の作りごとが作品の中で渾然一体となり、鮮やかなイメージを作り出している点である。シラカバの丸太を削って作った、すぐそれとは分からない馬のおもちゃや、おもちゃの家具、塔みたいな人形など、玩具がなんであれ、どんなに不細工に見えようとも、その中にはつねにイメージの土台が感じとれる。

ロシアの木製玩具に一番よく取りいれられる形象は、鳥や獣や家畜である。このおもちゃに出てくる人間は人形で、時としてもっとも素朴な形をしている。その作品には人々のお祭り、家事、労働が色濃く出ている。

各地方にはそれぞれ独自の玩具製造の習慣があるが、木製工芸がもっとも盛んなのは、森や林の豊かな土地で、昔から木が住民の日常生活に溶けこんでいる。ロシアの北部もそうした地方のひとつである。ここではどの農民も斧を上手に使い、自分で家を建てて装飾をほどこし、必要な木製調度を作ることができた。おもちゃは農民が仕事の合い間に気晴らしに作っていたのである。

北部玩具のもっとも代表的な作品は人形。柔らかい乾燥したコケにボダイジュの樹皮を巻き、手は松かさ、顔はボダイジュの木を大まかに切ってつけた素朴なもので、うっそうとした森の中から出てきたばかりの森の住人という感じである。

北部地方は、遠乗りに適した強くて頑丈な馬の飼育が盛んで、馬の玩具も多く作られた。馬の玩具はダイナミックなポーズをしているのが常であった。様式化された形の騎馬兵や、荷車をつけた馬、ソリを引く馬、三頭ともポーズや動きが同じトロイカなど、さらに一定の風俗の断片を示す作品も見受けられる。

ロシア中央部では木材加工業が住民の主要な生業のひとつになっていたが、ノブゴロド州やウラジーミル州などでは大工や指物師や彫刻師の腕が玩具の製造にも発揮された。しかし玩具王国の首都はモスクワ近郊のザゴルスク市である。

モスクワ近郊の職人の手による玩具ははっきりとした様式上の特徴をもっている。たとえば、鳥の形象、とくにクジャク、サギといった珍しい、エキゾチックな鳥の形象は、ことさら装飾的に扱われた。これらの作品で彫刻師は、こ



サギ



働き者のクマ（スツードフ作、モスクワ）



カゴを編むクマ（バラシコフ作、モスクワ）

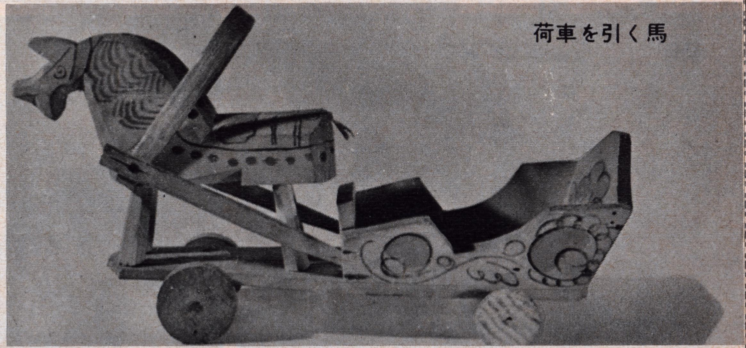
く単純で平凡なオントリやメントリの姿とはちがった珍しさはもとより、空想性すら表現しようとしたのである。

モスクワ近郊は高さ五cm以下のミニチュア工芸品の産地としても名高い。ミニチュア作品の特徴は対象となる人物が多様なこと、ユーモアがあること、単純明快なことてある。なにしろ、こうした極小のおもちゃは文字通り彫刻師のわずかな動作て、あっという間に出来あがる。驚くほど少ない表現手段を使い、細部を最小限に省いていながら、情緒にとんだ見事な作品が生まれている。

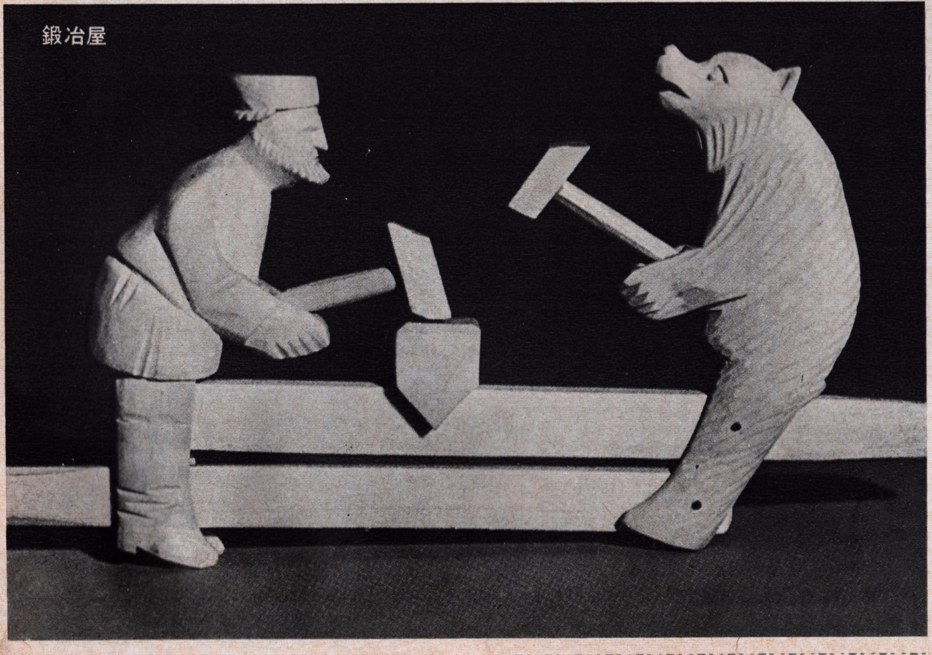
モスクワ近郊のおもちゃにはとくに風俗描写が感じられる。それは、ニッコリ笑ったおすましの女性てあり、歩哨に立つ勇ましい兵隊てあり、木の下て考えにふける牧童てあり、踊りを楽しむ農民男女てある。複数の人物からなる場面が作られることがしたいに多くなったが、これはひとつの人形たけては多様なテーマを表現することができなくなったからてある。モスクワ近郊の職人たちは、輪を描いたり、平行に動いたり、回転するなど、動きを伴ったさまさまな人形を数多く作った。↗



踊る農民



荷車を引く馬



鍛冶屋

今日ては木製玩具は民芸品の工場て製造されている。工場て生産されている魅力的な玩具は多いか、その中ても木製の民芸玩具は光栄ある地位を占めている。それは子どもたちのよい遊ひ道具であるはかりてなく、大人たちまて楽しませている。

今日のソ連邦

一九七八年4月15日号

編集・発行
ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141、電話03・447・3536）

印刷
大日本印刷株式会社

